
No,Fate

彩斗レイ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

No , F a t e

【Nコード】

N 2 2 5 8 V

【作者名】

彩斗レイ

【あらすじ】

幼い頃に戦争で両親をなくした少年レディットは食べていくため学校にも行かず国民特殊警備団（以下：ギルド）働いてばかり。そのため、なんでもかんでも一人で抱え込みがちだった。そんなレディットはある日任務で行った塔でミヤビという同い年の少女と出会う。二人は一緒に旅をするうちお互いを知り、変わっていく。運命の意味と意義を問うファンタジー！！

キャラ紹介プロフィール（前書き）

はじめに

こちらはキャラ紹介のプロフィールとなっております。

回を重ねて、秘密が明らかになるごとに、情報を更新していきます。そのため、各話に応じたプロフィールを追加情報としてのせたときに、ネタバレがある可能性があります。

その対策として、情報ごとに区切っており、その上に読まれる際の推奨話数を書いてあります。

それを確認してから、読んでください。

あとがきには特に何も書いていないのでご安心ください。

ちなみに初期プロフィールは、第1話と書いてありますが、1話を読んでからのほうがいいと思われる方もおられるかもしれません。

あくまでこれは、キャラのイメージを皆さんに付けてもらい、作品を更に楽しんでいただくためのものとなっております。

byレイ

キャラ紹介プロフィール

キャラ紹介 プロフィール形式

| | | | |
|------|-------|---|-----------|
| EX:1 | フルネーム | 6 | 好きな物、得意な事 |
| 2 | 身長 | 7 | 嫌いな物、苦手な事 |
| 3 | 体重 | 8 | 容姿の特徴など |
| 4 | 家族構成 | 9 | その他の備考 |
| 5 | 好きな色 | | |

第1話

NO.1

| | | | |
|---|-------------|---|-----------------------|
| 1 | レディット・ギルバーツ | 5 | モノトーン系 |
| 2 | 173cm | 6 | 特になし、家事全般 |
| 3 | 66kg | 7 | チーズ、人の気持ちを汲み取る事 |
| 4 | ？ | 8 | アッシュブロンドに緋色の目、中性的な顔立ち |

9 一人暮らしのギルドで働いている。17歳の少年。語学力は結構な物で、ドイツ語、オランダ語、英語、ロシア語、イタリア語、日本語の6ヶ国語を喋れる。体力もそれなり、視力は両目ともに6.0ある。一応主人公。能力は「炎^{フレイル}」。

NO.2

| | | | |
|---|----------|---|------------------|
| 1 | ミヤビ・センドウ | 5 | 水色、藤色 |
| 2 | 164cm | 6 | お風呂、着物の着つけ |
| 3 | 49kg | 7 | 節足動物、お化け、感情表現 |
| 4 | ？ | 8 | 髪の毛は日本人特有の闇色に瞳は赤 |

がかった紫。

9 レディットと同年の少女。謎の場所に「封印」されていた。記憶喪失で、過去の事を全く覚えていないため、発見したレディットが保護者に。

NO・3

| | |
|-------------|---------------------|
| 1 ユレイダ・オフアン | 5 黒 |
| 2 165cm | 6 特になし、情報操作 |
| 3 51kg | 7 特になし、家事全般 |
| 4 夫のみ | 8 茶髪に空色の瞳、見た目は20代後半 |

9 ギルドのアデルバ支部支部長。実年齢は44歳である。国立大学を首席で卒業した経歴を持っており、仕事は出来るが、家のことになるために。中性的な口調が特徴。

NO・4

| | |
|-------------|---------------------|
| 1 リース・エルモンド | 5 ピンクなどの暖色系 |
| 2 164cm | 6 ケーキ、お菓子作り、人の心を読める |

| | |
|---------|-------------------|
| 3 ？？kg | 7 辛い物、普通の調理 |
| 4 妹、父、母 | 8 ピンクの髪に金色の瞳。上から8 |

9 レディットの新しい上司。20代とまだ若い、頭は良いらしい。能力は「治癒^{ヒール}」。ちなみに上の数値は特に意味はない……

NO・5

| | |
|--------------|------------------|
| 1 ロゼット・サーペント | 5 特になし |
| 2 177cm | 6 金属類、金属細工を作る事 |
| 3 70kg | 7 木、プラスチック、裁縫 |
| 4 ？ | 8 青い髪に黒い瞳。体脂肪率4% |

9 レディットの新しい上司。リースと同期で、共に働いている。
家では毎日かかさず筋トレをやっているらしい無口な青年。能力は
メモリアハンス
「記憶の手」。

NO・6

| | | | |
|---|---|---|-------------|
| 1 | クレヴァー・レンテル | 5 | 白、銀 |
| 2 | 180cm | 6 | 銃火器、射撃 |
| 3 | 68cm | 7 | 価値のない物、近接戦闘 |
| 4 | 母親は他界 | 8 | 色素の薄い茶髪に緑の瞳 |
| 9 | レディットの新しい上司。リースたちの一期下で、射撃訓練で はその実力を発揮し、満点をたたき出した事もある。優しい好青年 だが、時々冷たい態度をするときもある。能力は「追撃」 <small>ホーミング</small> 。 | | |

NO・7

| | | | |
|---|---|---|-----------------|
| 1 | ヘル・フォーゲル | 5 | とにかくカラフルなの |
| 2 | 158cm | 6 | 紙、折り紙などの紙細工を作る事 |
| 3 | 45kg | 7 | 孤独、長い間一人になる事 |
| 4 | ? | 8 | オレンジの髪に空色の瞳 |
| 9 | レディットの新しい上司。クレヴァーと同期（年齢上）の女 性で19歳。今は明るいが、実は暗い過去を背負っているらしい。 ユレイダと同じ中性的な口調をする。能力は「工作」 <small>クラフト</small> 。 | | |

13話

フォーゲルの暗い過去について
ミヤビを部屋に招いたときに話した話。実は出生不明のフォーゲル
は、ユレイダに引き取られた事により特務班が作られ、そのメンバ
ーに。年齢的にはクレヴァーと同期だが、本当は一番先輩である。

NO・8

- | | | | |
|---|--|---|-----------------------------|
| 1 | ニーナ・エルモンド | 5 | 姉に同じ |
| 2 | 159cm | 6 | 人の弱みを握る事、心理戦 |
| 3 | 48kg | 7 | 特になし |
| 4 | 姉、父、母 | 8 | 髪はピンクのウェーブロングに金色の瞳、眼鏡をかけている |
| 9 | レディットとミヤビの入学したマルフ学園の生徒会長を勤める女性。リースの妹で、二人と同年だが、心を持つ能力を持つ彼女に対し、レディットは本能的に「さん」をつけてしまった。 | | |

レディットの過去と家族構成について

ミヤビが見たレディットの夢交換のときの記憶の断片。

場所や時間は不明だが、レディットは確かに母親と暮らしていた。よってレディットの家族構成に母親（過去）が加わる。

16話

NO・9

- | | | | |
|---|---|---|----------------------|
| 1 | ミステイン | 5 | 白 |
| 2 | 140cm | 6 | 鬼ごっこ、いたずら |
| 3 | 32kg | 7 | 素直に謝ること |
| 4 | ? | 8 | 真っ白な髪に紫の瞳、10歳ぐらいに見える |
| 9 | 霧の立ち込める街中で出会った少女。実年齢は不明である。とても元気だが、いたずら好きな性格のため、これからレディットが困らされることも？ | | |
| 1 | ミステイン | | |

キャラ紹介プロフィール（後書き）

それでは本編へどうぞ

by
レイ

「運命」と呼んだ日（前書き）

初投稿です。素人なので文がまだまだ未熟で・・・でもどうか温かい目でみて下さいね。最初の作品はベタな感じで行こうと思ったんで新しく感じるものはないかもしれません。よろしくおねがいます。

「運命」と呼んだ日

「ねえ、運命って信じる？」

突き抜けるように青くて、どこか寂しげな空の下、少女が口を開く。
「ひとつだけ言わせて。私ね・・・あなたと出逢ったときから今までのこと全部、運命じゃないかって思うんだ。あの時あなたがあの場所に来たことも、私たちの力のことも、今ココにいることも、全部、全部だよ。」

「うん・・・」

今まで黙っていた少年が頷くと柔らかな笑顔をする。

二人の表情は穏やかだった。

自分たちが今いる絶望的な状況を知りつつも無視するかのように。

「なんでだろ・・・私、全然怖くない。」

「僕もだ・・・」

そう言う少年は考え込むような顔をする。

「どうしたの？」

「・・・僕からもひとつだけ言わせてもらっていいかな。」

少年は揺るぎない瞳で少女を見つめる。「僕はね

」

時は仮想20世紀

50年前の大戦の爪跡は消えず、世界各地で残り火による紛争が絶えない世の中。

その少年はヨーロッパの一小国、シェダール王国にいた。

「チッ、これが転勤初日にやる仕事かよ。」

汚れまくった制服を着た少年 レディット・ギルバーツが砂を払いながら舌打ち交じりに言い放つ。

働くには若すぎるように見える年齢は17歳。

「仕方ない・・・」

そういつてレディットは腰に差してある日本刀を引き抜く。
銀色の月の光が刃を光らせている。

そう、仕方ない。

今いる場所を考えれば。

今おかれている状況を見れば。

今ココに至るまでの経緯を見れば。

すべて不可解である。

ココは魔獣と罠だらけの謎の塔で。

罠にはまりまくり、魔獣に襲われ、迷子になり。

転勤初日にいきなり任務に駆り出されたかと思えばこのざま。

「ハア・・・」

ため息をつきつつ、首を垂れながら歩いていた。
と。

急に視界が開ける。

瞬間。レディットの体から今までの疲れがすべて吹き飛ぶ。

それは今まで以上に不可解な「景色」だった。

一面の銀世界。と思えば

満開の桜、燃えるような紅葉、青々と茂る草木。

それは昔任務で行ったことのある島国でみた「四季」というものだった。

しかし、レディットの目を奪ったのはそんなものではなかった。

それは広間のような空間の中央にある祭壇の上

奇妙な装置の中。そこには少女が「封印」されていた。

「あ・・・」

かすかに漏れる声。もう何が何だか分からない。

気がつけばレディットはその装置に歩み寄り、触れていた。

本能的に「触れれば開く」と感じ取ったかのように。

すると装置を包んでいた周りのガラスのようなものが消え、その中

で浮いていた少女がゆっくりと降りてくる。

ひどく繊細な顔立ち、青がかった黒い髪、閉じた目の上にある睫毛は瞬けば音を立てそうなほど長い。

すべてを見てレディットは「かわいい」と思ってしまった。そしてその頬に触れようとした瞬間。

「・・・ん・・・」

少女の瞼がゆっくりと開き、赤に近い紫色の瞳と目が合う。

二人の物語はココから始まる

「運命」と呼んだ日（後書き）

多分まだまだ続くのでどうか見捨てないでください。

b y l e i

気づくための an overture

ウウウウウウウウウウウウウウウウウウ

けたたましいサイレンで目が覚める。

細胞一つ一つが目を覚ますのと同時にここ数日の記憶がよみがえる。

「・・・」

レディットは数日前、ギルド上層部の辞令でいままで勤務していた地元であるロレント地方支部からシェダール王国の首都であるアデルバ支部に異動となった。

アデルバ支部は大きく、いくつかの部署に分かれて仕事をするらしいのだが、変わった仕事が多いといわれる「特務班」に異動になったと聞いたとき、レディットはさすがに眩暈を覚えた。

さらに寄宿舍つきであることには感嘆であった。

おかげでロレント支部の時のようにわざわざ部屋を借りて家賃を払わなくてもよくなったので生活に余裕ができた。

早く起きすぎた気がするが初出勤で遅刻もまずい気がするので、ギルドの制服に着替え始めるとあることを思い出す。

時刻的に今電話をかけて迷惑ではないか心配だったが番号を入力する。

電話のあいてはルツカ。同い年で超お嬢様（ていうか王女）なのにギルドに身分を隠して働いている。

レディットが自信を持って友人と呼べる数少ない人間だった。

三回目のコールがなり終わる前にルツカは出た。

『もしもし』

「もしもしルツカ？」

電子機器だけはこの国の物はとも発達して持ち運べる電話は画期的だった。

『どうしたのレディット、こんな時間に？』

「君だろ。アデルバについたら連絡よこせて言ったの。」

『おおお、そうでした。』

思い出したようにルツカが言う。一国の次期女王がこれでいいのかと思わざるをえない言動なのだ。

『そう。今日だったっけ。それで、例の力を使うことはありそうなの？』

力 その言葉がレディットは好きではなかった。

この世界で力を持っている人は少ない。全体の1000分の1程度だ。基本的には生まれつきの物なので「ないと困る」というほどの物ではないが、場合によっては特別扱いをされたりもするし、妬まれたりもした。

「なるべく使わないようにするよ・・・分らないけど・・・」

『そう・・・まあ自分の力ぐらいは誇りにもちなよ。』

そういうと余韻もなしに電話が切れる。

あくびを一つこぼし、ねぐせを直しながら相棒の刀を腰に差すと気合が入る。

「よし、いくか」

そういつて寄宿舎のドアを開けると圧倒された。

昨日引越してきた時は夜中だったため気づかなかったが、幾千とテントが入るほどの広さの訓練場、四方を囲む鉄壁、何もかもが地方支部とは比べ物にならなかった。

そんな広い訓練場の向こうにある本舎の支部長室に挨拶にいくのは骨が折れそうだ。

その後、得意の方向音痴で何度も迷いそうになってフラフラになりながらも、なんとか支部長室に着いた。

息を吸い、複数の話し声のする支部長室のドアをノックする。

「どうぞ」

ドアの向こうから聞こえた声は女性の物だった。

「失礼します」

一礼をして中に入ると三人の人間がいた。

奥の椅子に腰掛ける先ほどの声の主は、レディットのイメージしていたような大男ではなく、凜とした恐ろしいほどキレイな女性だった。

「ギルド、アデルバ支部支部長のユレイダ・オーファンだ」

レディットにはユレイダが自己紹介をすることを嫌々やっているように見えた。それもやる気がないのではなく、「支部長」という役職自体を嫌っているように見えた。「さて、君は本日付でアデルバ支部に異動してきたわけだが、それにあたり紹介したいのがその二人だ。」

そういつて今まで黙っていた二人を指し示す。

一人は男性で眉間にしわを寄せている厳しそうな人だった。

一人は女性で男性とは対照的に笑顔が眩しかった。

「ロゼット・サーペントだ。以後よろしく。」

男性が単調に挨拶をする。それに続いて

「リース・エルモンドよ。歳は近いみたいだね。」

二人の挨拶が終わるとすぐにユレイダが仕切る。

「この二人が君の直属の上司にあたる。以後よろしくしてやってくれ。特務班のことは二人から後ですとして・・・何か質問は？」
中性的な口調でユレイダが質問してくる。特に聞きたいことはなかったがとりあえず聞いてみる。

「何故こんなに急な異動だったのですか？自分には準備期間が一日しかなかったのですが。」

今よく考えれば一日で準備が出来たのもすごいかも、とレディットには思えた。

「それについては私も知らされていない。すまないな・・・他には？」

正直ギルドの立場上支部長より上の立場の人間がいることに驚いて何も思い浮かばなかった。

「い、いえ・・・」

「ではこちらから質問しよう。わが国の防衛状況は？」

（よ、良かった・・・分かる質問で）レディットは心底ホッとした。
「はい・・・シェダールは現在、国際防衛を担当する軍、治安維持を担当する警察、民間防衛を担当するギルドの三つの組織がそれぞれ魔獣の駆逐、テロの防止、人命救助など様々な事に対処しています。」

「よろしい。では二人と一緒に特務室に向かってくれ。」
レディットは寿命が縮んだ気がした。

気づくための a n o v e r t u r e (後書き)

こんにちは 私は不定期投稿で、今日は一日に二回も書いたんで腕が痛いです。でもまだまだ続くんで次回もよろしくおねがいします。

b y
レイ

meet of only one

「ね、支部長つてとってもキレイでしょ。」

そういつてリースが覗き込んでくる。制服の上からでは良く分らないが胸のボリユームがすぐく、近づけられると少し圧巻だった。視線を無理やり釘付けにするその部分からがんばって目を離しながらレディットは答える。

「そうですね。今まで出会った女性の中で一番かも知れないです。」

「あら、私はキレイじゃない？」

レディットの答えに皮肉をこめたような言い方でくるりと身を翻しながら言う。

明るくて親しみやすいのはいいのかもしれないが若干サバサバしすぎな気もする。

「いいえ。エルモンドさんとても可愛いですよ。それに明るくて親しみやすいし。ああ、いい先輩を僕は持ったなあ。」

お世辞半分で褒めちぎるとリースが吹き出す。

「ありがとう。それと私はリースでいいわよ。他人行儀みたいなのはあんまり好きじゃないし。」

「くだらない話してないで行くぞ」

そんな二人の会話に飽きたのか、親しげなリースとは真逆の態度のロゼットが割り込んでくる。

その部屋はとても広い本舎のさらに端にあつた。

支部長室のような重々しい鉄製の扉とは違い、古ぼけた木の扉で、クオリティの低さはレディットの期待を裏切ったりする物ではなかった。

「ささ、入って入って。」

リース促されるまま、心の中「よろしく」といってドアを開ける。と。一瞬でそんな淡い期待は冷めてしまった。

見る限りは普通のギルドの仕事場。依頼を貼りだすボードもある。
ただ。

誰もいない？

（まさか・・・）いやな予感以外何もなかった。

「そう、そのまさか、よ。」

（心を読まれた！！）

「あら、当たってたのかしら。」

レディットが分かりやすく動揺すると、リースがそれに気づいたのかくすくすと笑う。「・・・ええ・・・コホン。ここで衝撃の発表をしますか。えっと・・・この特務班、君を含めて五人しかいません！！」

「はあ！？」

大分ショッキングだった。まずそれで一つの部署として認められている事自体不思議でなかった。

「だってまだ出来て三年しか経っていない、言っちゃえば新米部署なんだもん。でも小さいからって舐めちゃいけないよ。結構頻繁に依頼来るんだから。」リースはなぜか自慢げだ。「あ、そうそう。あとの二人は今、泊りがけの任務に行ってるから、帰ってきたら紹介するわ。」

ロレント支部にも泊りがけの仕事はなかった。

「話が長いぞ、リース。」ロゼットが焦れたように言う。「そろそろ今日の依頼について話してやれ」

（依頼？初日から）

「そう。依頼。」また心を読まれた気がしたが諦める。「今日の依頼はテストみたいな物よ。内容は、この国の東にある『景色の塔』というところの調査をしてほしいの。ここは最近、行方不明者がたくさんでてるの。ギルドからの依頼だけど報酬は出るわ。それじゃ頑張ってね。」

そういうとリースはレディット一人を部屋から放り出す。
もう眩暈がした。

「やっと着いた・・・」

レディットがギルドを出た時間は10時だったのに、もう日は傾きかける16時だった。

改めて地図を見るとたった100km程の距離だった。列車を使ったレディットなら2時間で着く距離のはずだったが、方向音痴はレディット自身直す気がないので仕方なかった。

「ここが・・・」

そういつて目の前にある塔を見る。

「景色の塔」という割には、外観はとても殺風景で、所々風化し、何階建てかが分からないよう、窓は外に一つも着いていない。

「どこに『景色』の要素があるんだ？」

色々文句をたらしながら早く帰りたいレディットが塔に足を踏み入れた瞬間。

ガシャーン！

すさまじい音を立て槍が落ちてきた。間一髪でそれをかわす。

「あつぶね・・・」

どうやら人が落としたのではないらしい。

砂埃立つ中、よく目を凝らすと人らしき物が槍の横に倒れている。

脈はないがまだ体温が残っていた。どうやら最近死んでしまったらしい。

さらに周りを見渡すと畏らしき物に引つ掛かったのか、5〜6体程度の死体が転がっている。

入り口付近をレディットが搜索していると、またさらに何か降ってくる。

碗状に凹んだ着地点の中央にいるのは、明らかに人ではない。

「魔獣だと・・・！！」

魔獣とは大戦時の核兵器の影響で一匹の狼が突然変異を起こしたのが元凶とされる、今までになく凶暴化した動物のことで、通常は軍やギルドが駆逐するはずなのだが残っているということはこの死体

は・

そんなことをレディットが考えていると魔獣が襲ってくる。

「くっ・・・！」

初撃をかわしたレディットが刀を抜き、肩口から切りつけるが、火花を散らしはじかれる。

通常の武器で殺せないということは、この地域で独自の変化を遂げた「新種」なのだろうか。

そんなのがいるとルツカに聞いたことがある気がしたが、全然覚えていなかった。

「はあ・・・」

ため息をつきながら、手に力をこめる。体中にほとばしる痺れるような熱を手に集めると、レディットの手に炎が灯る。

これがレディットの力「炎」^{フレイル}、様々な特性を持つ炎を利用出来る能力である。

炎を操り、剣に纏わせて魔獣を切りつけると、とても硬い魔獣の皮膚を豆腐でも切るように簡単に切り捨てる。

長距離の移動に加え、能力を使ったためレディットは強い酩酊感を覚えた。

「チツ、これが転勤初日にやる仕事かよ。」

汚れた制服を払いながら、舌打ち混じりに言う。

「仕方ない・・・」

そういつて刀を抜く。正直力はあまり使いたくなかった。

銀色の月の光が刃を光らせている。

反射した刀に映るのは、大量の魔獣。不自然なぐらいに多い。

加えて誰かが仕掛けた罠のような物でボロボロになり、さらに迷子。

「こんなことになるなら依頼概要をしっかりと聞いてけばよかった・・・」

いまさら後悔しながら、魔獣を切り捨ててとりあえず上を目指す。

「ハア・・・」

ため息をつきつつ、首を垂れながら歩いていた。
と。

急に視界が開ける。

瞬間。レディットの体から今までの疲れがすべて吹き飛ぶ。

それは今まで以上に不可解な「景色」だった。

一面の銀世界。と思えば

満開の桜、燃えるような紅葉、青々と茂る草木。

なんとも統一感のない、それでいて美しい、それは昔紛争の仲たがいに行った島国で見た「四季」という景色だった。

それはとてもキレイで感動的なものだった。

しかし、レディットの目を奪ったのはそんなものではなかった。

「景色の塔」という名前を納得させるための景色すら脇役に追いやるそれは

それは広間のような空間の中央にある祭壇の上

奇妙な装置の中。そこには少女が「封印」されていた。

「あ・・・」

かすかに漏れる声。もう何が何だか分からない。

周りの景色に興味が全くないように、気がつけばレディットは装置に歩み寄り、触れていた。

本能的に「触れれば開く」と感じ取ったかのように。

装置を覆っていたガラスのような物が消え、少女がゆっくりと降りてくる。

一枚の布を合わせたただけの上着をまとったその少女の顔立ちはひどく繊細で、青がかった黒い髪、閉じた目の上にある睫毛は、瞬けば音を立てそうなほど長い。

すべてを見てレディットは「可愛い」と思ってしまった。

雪のように白いその頬に触れようとしたその瞬間。

「・・・ん・・・」

少女の瞼がゆつくりと開き、赤に近い紫色の瞳と目が合う。レディットは反射的に手を引いた。

「ただ、だ　誰？」

ずっと眠っていたわりには、元気そうなので安心すた。

正直こちらのほうが聞きたいことはたくさんあるのだが。

「僕はレディット、レディット・ギルバーツという。君の名は？」

「私は・・・」そういつて一瞬考え込むような顔をする。「私は・・・ミヤビ・センドウ」

（ミヤビ？どこの国の名前だ？）

異国人であるだろう事は分かったが、こうして同じオランダ語を喋っているのだ。少なくとも幼い頃からシェダールにいるのだろう。

「さて、ミヤビ。君も色々聞きたいことがあるだろうが、まずはこちらの質問に答えてくれるか？」

「うん・・・」

ミヤビは不服そうにも首を縦に振ってくれた。だめもとで言ってみたので少し安心した。

「よし、まずひとつ。何故君はココにいるんだ？出来れば詳しく教えてくれ。」

「覚えてない。」

記憶喪失。これは強敵である。

「そうか・・・じゃあ次。君の保護者はどこにいる？知っているか？」

「知らない。お父さんもお母さんも見たことない。」

「じゃあ家は？」

「そんなもの記憶にないわ。」

（まずいな・・・）レディットはいやな予感がした。

「いつから記憶がない？」

「分からないわ。目が覚めたらあなたが目の前にいたの。」

レディットの額から冷や汗がにじみ出てくる。

「食事は？」

「した記憶はないけどお腹は空いてる。」

つまり正常な人間である。ということ。基礎知識だけ持つてずっとこの装置に入っていたことになる。

レディットのいやな予感の原因はシェダールの法律にあった。

それは「20歳未満の保護者のいない児童が行方不明から見つかった場合、原則として第一発見者が保護者になる」というものだった。今まで誰も迎えに来ていないということは保護者はなく、行方不明だったということになる。レディットも働き手なので原則に従うわけなので、今のこの状況ならレディットが保護者になってしまうのだ。

レディットがそんなことを心の中でそんなことをぶつぶつ呟きながら顔を上げると、いかにもご立腹といった膨れ面をしているミヤビがいた。

「私の質問していい？」

「っああ・・・ごめん。」

心のほうもひどく繊細なようで、レディットは心の中、自分に「取り扱い注意だぞ」と言い聞かせた。

「ココはどこ？」

「ああ・・・ココは僕もはじめてきたんだが、景色の塔というところで・・・ほら、周りを見てごらん。キレイだろう？」

「でも統一性がないわ。四季がぐちゃぐちゃに混ざっちゃってる。」

四季を知っているということはこの景色があるところのうまれなのか。

「僕もびっくりしたよ。でももつとびっくりしたのは、君がこの装置に入っていたことだよ。」

「ええ！！」急にミヤビが取り乱す。「私この中に入っていたの！？ずっと？お風呂にも入らずに？」

衛生観念だけはittyちよまえな物である。

「だから、ぼくがそれを・・・」

「もついい！！」レディットの言葉をミヤビがさえぎる。「私じゃ

あれからどうすればいいの？いいわ。もう一回閉じこもるわ。」
そう言っただけで装置に入るが周りのガラスのような物はいつまでたっても現れない。

「私、どうしたら・・・」

仕舞いには泣き出しそうになる。女の涙は最強の武器である。

そしてそこでレディットははじめて気づく。「自分のせいである」と。

レディットは覚悟を決め口を開く。

「僕のところに来い！！ご飯も食わせてやる。風呂にも入らせてやるから！！」

「ほんと・・・？」ミヤビが頬を上気させながら言う。「仕方ないから行ってあげるわ。」

見事なまでのツンデレ。これから大変になると分かりながらもレディットは今この瞬間が楽しくて、自然と笑顔になっていた。

meet of only one (後書き)

どもども。三部目、やっと文がほぐれてきた気がします。

私、実は受験生なのですがこんなこととしていいのかと危惧しています。

でも次回からもしっかり書いていきたいなと思います。

byレイ

meet of only one 2

「ふああ・・・」

大きなあくびを一つすると、レディットは気づく。

いつもと違う部屋の空気に周りを見渡すと、昨日まで自分が寝ていたベッドに誰かがいる。

「ミヤビ・・・？」

口から自然と零れるその名前が、記憶を呼び覚ます。

昨日

やっと町に出た。

今の今まで砂漠をさまよっていたミヤビとレディットはもうくたくたであった。

町といっても当から一番近い町で、アデルバまでは列車を使ってあと1時間30分はかかる地点だった。

それでもさつきは行きにこの町から塔までが一番時間がかかってしまったので、本来30分でつくことに驚くと共に、なぜか他人がいると迷わない自分を発見した。

「ちよつとお・・・あとどれくらい？」

散々歩き回って疲労困憊のミヤビが不機嫌そうに言う。

「うーん、あともう少しかな・・・疲れたかい？」

そういつてレディットがおんぶの姿勢をとると、ミヤビが顔を真っ赤にしてそっぽをむく。

「いいわよ。自分で歩くから。」

ミヤビは道も分らないのにすたすたと早足に歩く。

しかし、レディットは気が気でなかった。それは「ミヤビを寄宿舎にどうやって匿うか」ということが次第にどんどん気になってくるからだ。

基本的に機密を守るため、ギルド及びそれに関連する施設も外部の

人間は立ち入り禁止だからだ。

それをごまかすには、いろいろな方法があったがレディットはその中でも簡単な方法を選ぶ事にした。

それにあたりまず布団を買うことにした。

「どうして布団なんか買ったの？」

店から出るとミヤビが覗き込んでくる。なぜか近いその距離は、レディットのパーソナルスペースを悠々と侵してきたが、ミヤビの無邪気な表情によけることが出来なかった。

「ああ・・・これはね・・・」そう言つてレディットが思いついた案を提示する。「ミヤビ、君は部外者だから普通は入れないんだ。だからこいつを使って君を隠す。それで生態認証や赤外線荷物検査のない

ゲートは通れるはずだ。」

「いやよ！そんなの！！」ミヤビが声を荒げる。「何でそんな暑いし変な事をしなきゃいけないの？」

本当に常識人なのか、無知なのかどっちなのか分からない。

「君が僕のところに来るためには必要なんだよ。」

「むう・・・仕方ないわね・・・」

絶対に塔に戻りたくないのか、レディットが必死になだめると大体のことは理解してくれるようだ。

しかし、本当に心配なのはミヤビを寄宿舎に入れた後のことである。外に出さずにと隠し通すのはムリだろう。報告と合わせてリースに報告するかどうかが問題だった。

絶世の美少女と一つ屋根の下暮らせるのは嬉しいのだが、いやな可能性ばかり浮かんでしまう。

が、その思考はすぐに遮られる。

ガサガサと草むらから音がしたかと思うと、魔獣が現れる。

「ミヤビ、はなれて！！」

刀を抜きながら叫ぶが、ミヤビは魔獣を見たことがないらしく、腰を抜かしてしまっている。

「くっ……！」

動けないみやびから魔獣を牽制するように戦っていると、あることに気づく。

（こいつも武器が効かない！？）塔の中の魔獣といい、進化型が多すぎる気もする。

あまり人に能力を見せるのは好かないが、仕方なくレディットは手に力をこめる。

ほとばしる熱が体を包み、炎が灯る。

（どこかで感じたことが……）その熱と光はミヤビの目を釘付けにして離さなかった。

レディットもそれに気づく。

「どうした？」

「あなた炎使いなの！？」
フレイル

どこかで感じたことのある炎に懐かしさを感じたミヤビは声を荒げる。

（ミヤビが知っているということは僕以外にも炎使いフレイルがいるのか……）

気になったが、レディットはアデルバでの力の使いすぎも気になった。

「ほら立って。」

そういつて手を差し伸べるが、「いいわよ！」と払いのけられる。

ツンデレ……？ 嫌われた……？

懐かしの寄宿舍。

列車では大きな荷物を背負っていたため身動きがとれず、さらに周りの人から変な目で見られた。

緊張の面持ちでゲートをくぐる。

特に怪しまれることもなくは入れたが、時刻が遅かったため自然と

忍び足になった。

「ぷはっ」ミヤビが新鮮な空気でも求めているかのように飛び出る。

「苦しかった!」

「バカ! 大きい声を出すな!」

おもわずミヤビの口をふさぐ。

「なんで!?! そんなの私の勝手でしょ!」

ミヤビがさらに大声を上げる。

「すまない・・・僕の説明不足だった。君がココで騒げば舎監の人が来るんだ。そうすると君は追い出されてしまうんだ。分かったね。」

「うん・・・」

解せないなりに理解して頷いてくれるのは世話が焼けないので楽だろう。

気を取り直して明日からのことを話そうとしたが、ミヤビはレディットのベッドで眠ってしまった。

それを確認するなり一日の疲れがレディットを襲い、深い眠りへと落とした。

meet of only one 2 (後書き)

今更ながらもうちよつとだけギャグ入れたかったかなあ
これからもっともつと柔軟に練って行きたいです。
次回に乞うご期待です。

byレイ

first mission start!!

浅はかだった。

昨日の記憶をたどり、まだボーっとしている頭を横に向けると、自分のベッドにミヤビが寝ている。

その絶世の美少女は、出会ったときと同じようにすやすやと寝息を立て、無防備な寝顔をさらしている。

かわいそうとも思ったが、その小さな肩を揺さぶる。

「ん・・・」目をこすりながらミヤビが起き上がる。「もう朝？」

「ああ、そうだ。それでね、僕はもう仕事に行かなくちゃならない。静かにこの部屋から出ずに待っていてくれ。いいね」

「はい。」

不安と心配を抱きながら、レディットは部屋を後にする。

昨日は帰ったのが遅すぎたため、携帯で連絡を入れて報告を今日に延ばしてもらったのだ。

ドアの前になると中は少人数なのに賑やかな笑い声が聞こえる。

「失礼します」

ノックをして中に入ると、「パンパンッ」という軽い炸裂音と共に火薬のにおいが立ち込める。

「これは・・・」

無駄に飾り付けられた室内、テーブルの中央に置かれたケーキ。これは俗に言う・・・

「パーティー・・・？」顔についたクラッカーの紐をどける「なんでこんなものが？」

ボーっと突っ立っていると、リースが近寄ってくる。

「ほら、何突っ立ってるの。君の歓迎パーティーだよ。」

「え・・・？」

周りを見渡すと昨日は見なかったひとがいる。

「では、紹介します。本日の主役、レディット君です。」

（仕事中に何をやっているんだこの人たちは。）レディットは本気で困ってしまった。

「ほら、リースさん困ってるでしょ。」

すると昨日は見なかった女性が近づいてくる。「私はヘル・フォーゲルよろしく頼むよ。」

おっとりしたような女性で、口調がそれとなくユレイダに近い物を感じた。

それに続き優しそうな男性が近づいてくる。

「ぼくは、クレヴァー・レンテルだ。よろしく頼むよ。」

お祭りムードを満喫しているのは女性陣だけで、男性陣は適当に合わせている。

飽きたのか、リースが思い出したかのように手を叩く。

「そうだ。報告をして頂戴。」

「はい・・・」

今までのムードはどこに行ってしまったのか気になったが、クレヴァーが何事もなかったように飾りを片付けているのを見て触れないでおく。「行方不明者が出ているとの事でしたが、おそらく全員死亡です。」

塔に入ったところでたくさん死体が転がっていましたから。」

ココまでは大体予想どおりらしく、特に驚いた様子もなくリースは珍しく静かだ。「それですね・・・塔の中には、誰かが人為的に仕掛けたような罠がたくさんありました。それと通常の武器が効かない魔獣がたくさん生息していました。あれではおそらく軍の兵士が言っても返り討ちでしょう。僕が確認しただけで50はいましたから。」

そこまで一息に言い切るとさすがに疲れたが、やっとリースが驚いたような顔をする。

「魔獣！？50体！？死体！？」

（最初の二つは分かるが最後の二つは今更！？）一応先輩なので心の中で盛大にツツコミを決める。だが

「あら。ツツコまれちゃった。」

これまた盛大に心を読まれる。

「ハア・・・続けますよ」ちゃんと聞いているのか心配なのでレディットは無意識うのうちに確認する。「それで一応、魔獣を一通り狩ってから戻ってきました。以上です。」

一通り報告を終えると、クレヴァーが質問をしてくる。

「その状況から抜け出したということは君も能力者なのか？」

「当たり前じゃない。ココは能力者を集めた部署なんだから。」

これまた初耳のことをさらっとリリースが暴露する。

「ええっ！？聞いてないですよ？」

「そうだったかしらねえ・・・」

「お婆さんか！」

なぜか二人で一口漫才を披露する。

「ちなみにみんなの能力を教えるはね・・・えつと私が『治療』^{ヒール}っていう能力で、軽い傷なんでも治せるわ。ロゼットは『記憶の手』^{メモリアハンス}

っていつて、金属の形状を自由に変化させられるの。クレヴァーは『追撃』^{ホーミング}って言うって、自分の放ったものをある程度操れるの。んで、

フォーゲルは『工作』^{クラフト}という能力ね。紙を使っているんな物を作れるの。ああ疲れた。説明終わり。」

説明口調。もう誰に向けてかも分からない。

でも、とりあえず力を特別扱いされて仕事を増やされることはなさそうだ。

それからいくつか仕事を終わらせ部屋に戻ると、昨日今日とは様子が違っていた。

ベッドやテーブルが横倒しになり、バリケードが作られている。覗き込むとなぜか震えているミヤビがいた。

「なんだ・・・レディットか・・・」

安心したような、つまらない物を見たような目で見てくる。

「ココは俺の部屋だぞ・・・」

「だって一日中ずっと暇だったんだよ！！着替えもないからお風呂に入れないし・・・」

（そうだった。）ミヤビの生活面という大事な問題をレディットは忘れていた。

つまり女の子の買うものが分からないレディットは、ミヤビを連れ出すしかない。

そして連れ込んだときのようにはいかない。

昼間だから、ごく自然に、怪しまれずに。

「むう・・・」

『買い物するため、外にミヤビと一緒に外に出る。』それが最初の大きなレディットのミッションだった。

f i r s t m i s s i o n s t a r t ! ! (後書き)

こんにちは!!

今回のリリースの説明口調は自分で書いてて笑っちゃいましたww
レディットに向けてですよ・・・たぶんww
難しいんです!!

それに男の子の口調も自然かどうか心配だし、ユレイダとフォーゲ
ルの中性的な口調も出来てるか心配だし・・・
もう心配だらけです。

b y
l e i

first mission start!!2

「くそ・・・眠い・・・」

目の下に出来た分厚いくまを擦りながらレディットは大きなあくびをこぼす。

結局昨日は、ミヤビをどうやって外に連れ出すかばかりを考え、一睡も出来なかった。

おそろく思いつくまで外に出るのはやめたほうがいいだろう。

「おはようございます・・・」

「おはよう！！まだ目が寝ているぞ！」

リースがレディットの肩を叩き、目を覚ませようとする。

それでもレディットのテンションは低く、「今日も一日がんばるぞ！！」などという気は起きなかった。

適当に依頼を済ませ、帰って策を練ろうと考え掲示板を見るが、そこに依頼は張り出されておらず、代わりに「合同依頼！！」と書かれた紙が張ってあった。

それに戸惑うレディットに気づいたのか、リースが説明を始める。

「そうそう、ここの依頼は結構レベルが高いから、複数人でいくことが多いの。今回の依頼は議会委員であるノーマット氏のボディガード、つまり『要人警護』ね。えっと・・・希望人数は5人・・・ありやりや、全員出勤です。」

よくよく考えれば、人数が少ないということは希望人数に足りないということがあるのだから心配だった。それでも用心警護とは意外と大層な仕事だったので、レディットは感心せざるを得なかった。

「それじゃ、出発進行」

まるで遠足に行くかのようなリースの掛け声に、「おー！！」などと返す者はいなかった。

シエダールの議会委員であるノーマット氏はオランダ人ながら庶民

派として人気がある議会委員だ。

だがエリート派の議員に恨まれることも多く、闇討ちも多いとの事だった。

一通り秘書から説明を受けたレディットたちは、珍しくスーツを着ていた。

「あつついわね……まだ9月よ。」

「ほんとですな．．．」

女性陣が声をそろえて文句を言う。

二人とも言いながら首元を緩めるのでネクタイがないボディーガードスーツでは、だらしく見えてしまう。

「やめてくださいよ。恥ずかしいから。」

二人がレディットの咎めや周囲の目を全く気にしていないでいるうち、ノーマット氏が来てしまった。

しかし、特に気にする様子もなく笑顔で挨拶をしてきた。

「おはよう。君たちがギルド特務班かね？」

「はい。」

「そうか、今日一日よろしく頼むよ。」

それだけ言うとも秘書に今日の予定を確認し、リムジンに乗り込む。
レディットたちも同乗する。

車の中はカーテンに覆われていて、外からは見えないが意外と質素だった。

庶民派と呼ばれるだけのことはあるのかもしれないが、他人からは狙われるといつてもボディガードをつけるまでの事があるのか？疑問だった。

しかし移動中、チラリと外をのぞくと先ほどいたノーマット氏の家がある高級住宅街の景色とは打って変わって、廃れた景色になる。シエダールの首都であり、経済の中心地である最先端都市アデルバにこんな景色があるとは驚きだった。

そしてどんどん景色が悪くなっていくさなか
ドオオオオオオオオオオオ！

とんでもない衝撃が車内にほとばしる。通りがかりにゴミ箱が爆発したのだ。

「何事だっ!？」

「うるたえないください!!レディット君とクレヴァーは周りの不審人物の確認、ロゼットとフォーゲルはノーマット氏を守りつつ安全なところへ、私は負傷者の治療に当たるわ。」

いつものおふざけムードとは違い、リースがすばやい判断を下す。

「いくよ。レディット!!」

クレヴァーに従い周りを搜索していると、遠くに一つの人影を発見する。

「あれだ!!クレヴァーさん!!」

レディットが指を差すと同時にクレヴァーが銃弾を放つ。その弾丸は人影に当たると同時に「バチッ」と音を立て人影を転ばせる。

「いくぞ!!」

人影は足を引きずりながら裏路地に逃げ込む。

常人の何倍も高いレディットの身体能力で、追いつくのに時間はかからなかった。

「待て!!観念しろ!!」

こんなので諦めるような犯人ばかりならどんなに楽だろうか。

案の定、男は抵抗しようとして以外にも素早く胸元から銃を出してレディットに向かい発砲する。

「レディット君!!」

後ろでクレヴァーの声がする。

防弾仕様の制服でも骨折は免れない。

常人なら。

レディットは胸の部分に意識を集中させる。

胸に灯った炎は銃弾を包み込むと空气中で動きを止めさせる。

「うわあ!!」

犯人は驚き腰を抜かしている。

「とりあえず来てもらおうか。」

クレヴァーのなかには、驚きがばかり渦巻いていた。

結局被害は小さく、警察に犯人を引き渡した後そのままノーマット氏は議会に向かったため任務は続行で、レディットたちは会場警備に転じていた。

「お手柄じゃない！レディット君！！」

「はぁ・・・」

リースが褒め称えてくるが初手柄を上げたレディット自身、ショックのほうが大きかった。

「あれ・・・？いきなり事件に巻き込まれたからショックとか？」
本当にリースがエスパーに見えてくる。

「まあノーマット氏は無事だし、後で話を聞かせてくれるらしいしね。」

「でも正直驚いたよ。僕より視力が良いし、足も速い、それに仕舞いには銃弾まで受け止めてしまっただから。」

クレヴァーまで褒めちぎってくる。照れ屋なレディットは顔を伏せなくなる。「並大抵の修行じゃあんなに強い力をならないだろう。」

そもそもなんで学校にも行かずに働いてるんだ？

レディットは自然と眉をひそめる。正直過去の話はしたくないし、思い出したくもなかった。

「あれ、なんか話せない事情でもあった？」

「そりゃ無かつたらこんな年で働きには出ないでしょうよ。」

「すいません・・・いづれ話しますので」

場に重々しい空気が流れかけたとき、ノーマット氏がちょうど出てきた。

「やあやあ、待たせてすまない。このまま行ってしまうのか。」

議会の隣にあるカフェに入る。これから警護を担当したりする場合を考えると、聞かなければいけない事があるからだ。

個室を用意できたのは人気の証拠だろうか。

席に着くとリースの顔がまた変わる。さっきといいやる時はやるのかもしれない。

「さて、単刀直入に聞きます。お心当たりは？」

「そんなことを言い出すときりがないんだが、おそらくエリート派のドイツ人議員だろう。」

この国は第二次大戦で新たに生まれた国家なので、色んな国の人が出て、むしろ50年以上もこの国だけの純血を受けついでいるのは珍しいのだ。だから思想の差を無くすために議会にはいろいろな国の人が所属している。

「なぜそうだと？」

「知っているだろう？ 私は家柄ではなく選挙で選ばれた議員だから、ひいきを受けることも多いのだよ。」

帝国主義のドイツとしては私のような民主主義の議員は好まないのだよ。」

だがそれでは納得がいかない。明らかにさっきの刺客は素人ではなかった。銃を持っていることも、それを出す動作の素早さも。

「犯人の身元は分かりますか。」

「分からない。分かれば告訴することも可能なんだがな．．いや、まさかな．．．」

最後にノーマット氏は何かもったいぶるような素振りを見せたが、リースは特に気にせず質問を続ける。

「今回が一回目ですか？」

「いや。正直数えられないが、今回ほど派手なのは初めてだ。今までは催眠ガスを使ってきたり、運転手を気絶させるなど．．．そう、私を議会に出させないようにするような物ばかりだったが、今回は私の命を狙ってきたような感じがした。」

いやなところに来たものだ。殺人やその未遂事件は基本的に警察の仕事なので、レディットは新鮮かつ面倒くささに鼓動が速くなっていた。

「そうですか．．．お時間頂きありがとうございました。」

「いやいや、私が捜査の協力になるなら時間などある程度裂きますよ。」

立った五つの質問でリースは何かを察したようだ。

去り際にリースがノーマット氏の耳元で何かを囁く。

レディットには聞こえなかったが、ノーマット氏は家に帰るまでずっと苦い表情をしていた。

「何が分かったんですか？」

特務室戻るとレディットには理解できなかった質問の内容をリースに尋ねる。

「うん？」リースの口調や表情はもう普段どおりに戻っていた。「えっとね・・・確実ではないんだけど3つの可能性が浮かび上がったわ」

リースの話はこう。

1. 「犯人が変わった」：今まで依頼者が依頼していた犯人が過激な犯人に変わり今回のような大胆な犯行に及んだ可能性。この場合、依頼者にとっては想定外である。依頼者はなく、個人の犯行の場合もこれに含む。

2. 「依頼者が変わった」：これまでの依頼者とは違う依頼者、もしくは新たに現れた依頼者によって依頼されたため犯行が変わった。この場合、少なくとも新たな依頼者にはノーマット氏への殺意がある。犯人と依頼者、どちらもが変わった場合もこれに含む。

3. 「目的が変わった」：犯人も依頼者も変わらず、犯行の目的が「妨害」から「暗殺」へと変わった場合。この場合、状況の変化により依頼者の目的が変わったため、裏にもう一つ二つ何かがある。少なくともこの場合にも依頼者には殺意がある。依頼者が故意に犯人を変えた場合もこれに含む。

4. 「自作自演」：字の通り。事前に計算し、自分が狙われてい

るような犯行に見せかけた。この場合犯人―（ノーマット氏）の目的は今のところ不明。

「さて、レディット君。どれだと思う？」

「今のところですけど、1と4は犯人側に全くメリットを感じない。自作自演のようには見えなかったです。2や3はうつすらとだけ奥にある目的が見え来ます。たぶん議会にドイツの考えを反映させるためでしょう？」

ロレント支部にいた時代は魔獣退治ばかりやっていたレディットは推理系はさっぱりが、自分なりに答えを出してみる。

「いい読みね。ちなみにあの人、依頼者はともかく、犯人の正体を知っているわ。多分だけど、一瞬言っのをもったいぶったところがあるでしょ。あそこで心を読んだの。だから多分3ね。」

（ずるいような便利なような・・・）リースが心がある程度読めるのは幼少期からの経験で、特に能力というわけではないらしい。

「犯行を阻止した以上、私たちにも危害が加わる可能性があるわ。とりあえず気をつけましょう。」

そういうと仕事は終わり解散となった。

寄宿舎に帰るまでの途中。

（ん・・・？）

後ろに人の気配がする。振り向くが誰もいない。

（気のせいかな・・・）そう割り切って歩を進める。だがやはり気配は消えない。

レディットは真意を確かめるため部屋の前まで来ると体に炎をと灯す。

攻撃や防御のときに使うような炎ではなく、ゆっくりと、流れるようなイメージ。

途端、レディットの姿が消える。

陽炎を利用して姿を消したのだ。激しい動きをすればれるが、そ

う遠くないストーカーを捕まえるには十分である。

「誰だ!？」

レディットが後ろに回って肩をつかみかかると「キャッ」という声と共に見た顔の二人が振り向く。

「リースさん? フォーゲルさん?」

「いつの間に!？」

「何故こんなところに? っていつかつけてたでしょう?」

「当たり前じゃない。新人君の部屋をチェックするのは!」
なぜか二人は胸を張って自慢げに言う。

「とりあえずココじゃ何なんでこつちに・・・」

そう言つて二人を部屋に入れようと鍵を開けた瞬間。

(ツ!!) ミヤビの事を思い出してドアを閉める。
事件に巻き込まれたことで完全に忘れていた。

「どうしたの? 入れてくれないの?」

「えっ、これはあの・・・!」

レディットが弁解しようとした瞬間。

「おかえり!! お腹空いた!!」

元気な声を上げながらドアを開けてミヤビが出てくる。

双方とも「・・・誰?」みたいな顔をしている。その後レディットに顔を向ける。

レディットのファーストミッションは見事に失敗した。

f i r s t m i s s i o n s t a r t ! ! 2 (後書き)

今回の（これからもしかかもしれません）お話、私の一身上の都合でいつもより一話一話の文字数が多くなるかもしれません。

理由は受験で投稿する頻度が確保できないかもしれないからです。それで遅れが出ないようにと・・・すいません

それでもしっかり書いていきたいと思えますのでよろしくです。

b y
レ イ

まだ見えない影

「ちゃんと説明して頂戴。」リースがお茶を啜りながら言う。「どうしてこんな可愛い娘がレディット君の部屋にいるの!？」

「可愛いってそこですか・・・」

なぜかさつきからリースは興奮気味だ。鼻息が荒くなっている。

とりあえず部屋の前で話すのも迷惑になるので、部屋に上がってもらったが一つのテーブルを男一人と女三人で囲む状況は、レディットにとって息苦しい物だった。

「そうよ!お人形みたいな顔立ちに、この長い睫毛、この髪の色はアジア人のものね!全部パーフェクトだわ!こんな可愛い娘と同棲なんてどうしたの?」

少し話の視点がずれている気もしたが、とりあえず説明するのが先決だろう。ばれてしまった物は仕方ない。

「実は・・・この子とは最近なんです。出会ったのが。別に最初から連れ込んでいたわけじゃないんですよ。」

「いつの事?」

「それは・・・最初の任務のときです。」

リースが心底驚いたような顔をする。塔に行ったことがないのだろうか。「その塔の最上階に行ったときに・・・」

レディットがそこまで言いかけたところでリースが立ち上がる。

「ちょっと待って。」

そういうと電話をかけ始める。

「ああ、ロゼット?今すぐレディット君の部屋に来て。4階の8号室ね。」

それだけ言うと電話を切る。なんて一方的な会話だろう。「すぐに来るって。彼にも聞かせるわ。」

「あはは・・・あれ?クレヴァーさんは?」

「クレヴァーは自宅からの勤務だから、来れないのよ。」

「そうですか・・・」

と。不意にチャイムが鳴る。「オレだ。開ける。」

（速ッ！！）まだリースが電話をしてから一分とたっていないかった。ドアを開けると不機嫌そうなロゼットが立っていた。それでも来たのだ。リースの人望の厚さの凄みを感じた。

「ど、どうぞ・・・」

いつもは寡黙で冷静なロゼットもミヤビを見たときはリースたちと同じ反応をする。

「誰？」

次々と知らない人が来ることにはミヤビも少々戸惑っているようだ。

「この人もオレの上司。ロゼットさんだよ。」

「さっ、説明を始めて頂戴。」

いつしか一人暮らし用のレディットの部屋は、いっぱいいっぱいになっていた。

「はい・・・。景色の塔の最上階に行ったとき、この子が祭壇の中央にあった謎の装置に封印されていたんです。それで助け出してみれば名前以外の記憶もないらしく、家も思い出せないらしいので、仕方なくココに。今のところオレが保護者扱いになるみたいなんです。」

「ふゝん。あなた、名前は？」

「ミヤビ・・・」

人見知りなのかミヤビはさっきからレディットの後ろに隠れている。

「カワイイ〜〜〜〜〜！」

（何がだ！？）さっきからリースとフォーゲルはおかしくなっているようだ。

何かに耐え切れなくなったのかリースがミヤビに飛びつく。

しかしミヤビがレディットの後ろに隠れたため、勢い余ってリースとレディットがぶつかる。

「いてて・・・」

目を開けると何か柔らかい物がレディットの胸を圧迫する。

「はっ!!」

思わず身を引く。レディットの顔が一気に赤くなる。

「ごめんごめん。私ちよっと可愛い物を見ると興奮を抑え切れなくて・・・」

そんなことを人前でするのはどうかと思ったが、リースはその類を気にしない性格であることは初対面のときから薄々感じてはいた。「でもねえ。部外者は基本立ち入り禁止だからなあ。どうしますかね。」

フォーゲルが痛いところをついてくる。たしかにこの件ではそこが一番問題だった。

「そうですね・・・だから今まで隠していたわけだし。」

「放り出すのはあまりにも可哀想だし・・・」

「養護施設は扱いがいいとはいえないし、孤児院はこの年じゃ・・・」

「四苦八苦するが全くだいい答えがでてこないし、当の本人は何の話をしているのか全く分かっていない。」

「ちよっと・・・ロゼット。あんたも考えなさいよ。」

困ったリースが八つ当たりがてらロゼットに答えを求める。

「そいつ・・・ミヤビを特務班に入れればいいだろ。」

「!!」

「!!!」

「!!!!」

「その手があつたわ!!」

三人の間に衝撃が走る。自分たちがいくら考えても出てこなかったまさに正解を一発でだされた。

「でも、それって出来るんですか？支部長とかが認めないと・・・」

「大丈夫。特務は支部長のお気に入りだから。」

そんな理由で決めてしまっているんだろとかとレディットは不思議でならなかった。

「兎にも角にもとりあえず策は見つかったので解散!!」

リースが号令をかけると二人は部屋から出て行く。

レディットも寝ようとベッドを見ると誰かが布団にもぐっている。

「・・・」

近づいて布団を引き剥がす。犯人は分かっていた。

「帰りましょうか。リースさん。」

「やつぱり？」

）

（電話？こんな朝早くに誰だよ・・・？）

寝ぼけ半分で電話に出る。

『おはようレディット君！！』

一気に目が覚めるような大声が通話口から聞こえる。リースだ。

「声が大きいですよ。叫ばなくても聞こえてますから。で、どうしたんですかこんな早くに。」

『昨日支部長に電話で掛け合ってみたら「とりあえず連れてきてくれ」だって。服はそのままでもいいって。良かったじゃない。』

本当に話を聞いてくれたとは。支部長も支部長である。

仕方なくミヤビの肩をゆすり起こす。結局レディットの使っていたベッドが気に入ったらしく、奪われていた。

「ふああ・・・」

「おはよう。君がココに残って自由になれるかもしれないんだ。」

「ほんとに！？やったあ！！」

まだ朝だというのに元気に跳ね上がってミヤビが喜ぶ。数日間外に出ていないことを考えると当然なのかもしれない。

「その代わりやらなきゃいけないことがあるんだ。」

「ん？」

「ここで仕事をするんだ。働かざる物食うべからず。分かるね？大丈夫。そんなきつい仕事はないし、いざとなったら僕や他の人と一緒でもいいんだ。それでもいいかい？」

正直ミヤビが力を持っているのかも、一人間としてどれぐらいの能

力があるのかも分からないが、一人の少女を守るくらいは出来るだろうというレディットの考えの下の条件であった。

「うん!!」

ミヤビのその笑顔は出会ってから始めてみる物だった。

(ココに来るのは二回目か・・・)

いまだに消えない緊張を胸に、支部長室の扉をノックする。

「失礼します。」

ミヤビをつれユレイダの前に出ると、ユレイダが驚きの表情を見せる。

まるでミヤビのことを良く知っているような、その上でレディットが連れてきたことに対し「やはりな」といわんばかりの感情が混ざっている。

それにつられミヤビを見ると、ミヤビも同じような顔をしている。

だがこちらはユレイダのような確信の表情とは違い、「この人どこかで・・・」くらいのものだった。

二人の間には詮索しがたい何かがあるようだが、ミヤビははっきりとは思いつけない様子だった。

顔立ちや容姿に遺伝は見られない。親子ではないだろう。

「二人は知り合いですか？」

「いや、すまない。それで今日はそっちのミヤビ君が特務に所属したいと・・・」なにかユレイダに丸め込まれる。「リースから話は聞いたよ。確かにこの年で何らかの養護施設に預けても労働力としていいように扱われるのが落ちだろう。ココに勤務することは私のほうは特に問題はない。認めよう。」

何かユレイダはまだ言いたいことがあるような表情をする。

「なにか？」

「いや、なんでもないよ。服は大体のサイズで作らせてもらったから、合わなかったら言いつけてくれ。」

それではがんばってくれ・・・ミヤビ君」

まるでミヤビにこの場から消えてほしいかのような口ぶりだで早々と話を切り上げる。

「はい・・・」ミヤビも空気を察してか声のトーンが落ちる。「失礼しました。」

後味の悪いまま、謎を残して支部長室を後にする。

「支部長のことを知っているのか？」

特務室へ向かう途中、腑に落ちないレディットはミヤビに聞いてみる。

「うーん、それがあのような気がするんだけど思い出せないんだよね。キレイな女性だったから忘れなと思うんだけど。」

曖昧な記憶でも、今はミヤビに繋がる大事な情報だ。このことが本当だとしたら、またいろんな可能性が浮かんてくる。

これは記憶を取り戻せるいい傾向なのかもしれない。

とりあえず着替えるために更衣室に行く。

更衣室の中はあたり一面にギルドの制服が並べてあった。レディットたちが着ている通常服、主に技術班などが着る作業用つなぎ、医療班などが着る白衣など、種類の多さが組織の大きさを物語っている。

ミヤビは自分の名前が書かれた制服を取るとカーテン式の部屋に入る。

「・・・覗かないでよ。」

正直そこまで心配があるなら一緒に生活などムリな気もする。

とりあえずカーテンの前で待っていると中から声が聞こえる。

「えっ、何でこんな所に・・・キャッ!・・・やめてください!」

(なっ・・・!!)

不審者がだと思いいカーテンを勢いよく開ける。が、途端に力が抜ける。

「・・・え?」犯人がミヤビを襲っていたのに違いはない。「リースさん!? フォーゲルさん!」

どうやら待ち伏せしていたようだ。どこまでミヤビを襲いたいんだ

ろうか。

だが、この状況で問題になるのはそれよりも・・・

（僕じゃないか・・・）

更衣室のカーテンを開けている男が一人、カーテンの向こうで女が三人。しかもそのうち一人は着替え途中の下着姿をさらしている。

この状況下、「変態」と呼ばれるのはレディットであった。

「キヤアアアアアアア！」

考え込む顔を上げるとミヤビの拳が飛んでくる。

見事に飛んできた左ストレートが、抗う事も出来ずに頬に叩き込まれる。

（グーかよ・・・）

予想外の威力にレディットは一言愚痴りながら倒れた。

その10分後、レディットが赤くなり腫れた頬をさすりながら更衣室の端に座っていると、やっとカーテンが開く。

「おまたせ」

リースとフォーゲルに押されて半分涙目のミヤビが出てくる。

さっきのことを怒っているのか全くレディットと目を合わせようとしない。

「ご、ごめんって・・・」

レディットの謝罪もことごとくプイとそっぽを向かれ、スルーされる。

なんやかんやで許してもらえないまま特務室についてしまう。

「ただいま」

「仕事サボってどこに行ってたんですか。」クレヴァーが鋭く突っ込む。「ん？その子は？」

どうやらミヤビの存在に気づいたようだ。クレヴァーは目を丸くしている。

「朗報よ、クレヴァー。わが特務に新人君が入ったの。レディット君の紹介だね。」

「でもその子は景色の塔の・・・」

どうやらクレヴァーは景色の塔に行った事も最上階まで行った事もあるらしい。

「あれ？知ってたんだ？じゃあ話が早い。ほら自己紹介」

リースがミヤビに自己紹介を促す。二人がまるで姉妹のように見え
てくる。

「ミヤビ・センドウです・・・」

「クレヴァー・レンテルだよ。よろしく。いやあそれにしても人数
が増えたのは嬉しいね。」

いまだにたつたの六人なのだが新米部署にとっては大きな進歩なの
かもしれない。

確かに人数が少なくて希望人数に満たない依頼はうけることがで
きない。

「いやゝそれにしてもほんと可愛いわね。持ち帰りたいわ」

「私それでもいいですよ」

ミヤビが冷ややかな目をレディットに向ける。軽蔑の眼差しだ。

「だからごめんって」

「じゃあ何でカーテンを開けたの？」

「それはリースさんとフォーゲルさんだって知らなかったら不審者
だと思っただろ」

レディットの必死の弁明むなしくミヤビは「フン！」といってそっ
ぽを向いてしまう。

「どうしたの？」

事情を知らないクレヴァーはなぜ仲が悪くなったか分からない様子
だ。

「氣しないで。良くある痴話喧嘩よ」

（あんたのせいだろ！！）

レディットは二人の不穏な会話を小耳に挟みながらつつこむ。
そして思い出す。

「あ、そうだ。今日ミヤビの日用品などを買いに行きたいので早め

に切り上げたいのですが・・・」

その言葉を聴いた瞬間また女性陣二人が反応する。そして部屋の端によりひそひそ話を始める。

「・・・・・・」

「・・・・・・」

数秒間の間のあと二人が満面の笑みを浮かべて振り返る。

「私たちも行く！！」

（なんでそうなる！？仕事をしろ！！）

つつこみどころ満載な結末を無理やり取り付けられた。

「仕事をしろ・・・」

ロゼットがポツリと呟いた。

「何でクレヴァーさんまで・・・」

なぜかクレヴァーも参加し5人となった一行はアデルバにあるショッピングモールに来ていた。

さすが近代大都市だけあって狭い土地に100以上もの店舗を連ねている。

洋服屋、家具屋、美容室、本屋言い出せばきりが無いほど。ココに買い物に来れば大体の物はそろつた。

今よくよく考えれば女性陣が来るのに、レディットが女性の買い物についてくる必要があったのか疑問だったが、喧嘩のあとでもミヤビは拒んだりはしなかった。

結局最後までロゼットは特務室に残って仕事をするらしい。

「いいじゃないか。今日は仕事も少なかったし。」

なんという無責任な集団だろう。本来はロゼットが正解なのだが、ここにいるとレディットもこの空気に飲まれそうになる。

「それに新しくあんな可愛い子が入ってきてくれたんだから。」

「とりあえず行きましよう。ミヤビちゃん最初はあそこね。」

そついうとリースとフォーゲルは半ば強引にミヤビをエスコートする。

三階建てのこのショッピングモールの店を全部回らんとする勢いだ。
「ちよつと待つてください!」

レディットもそれについていく。こうして楽しい買い物が始まった。
・
・

と思っていたのは2時間前のこと。

「まだ回るのか?」

どこかで聞いたことのある「女性の買い物は長い」という噂は本当だった。

レディットは一時間程度済むと踏んでいたがその考えは甘かったようだ。

そして二時間も色々な店を回っているのに、買ったものはいまだに洗面用具と髪留めなどのアクセサリーだけだった。

レディットはこれからさらに財布が薄くなることを覚悟せざるをえなかった。

そんなレディットの悩みなど露知らず、三人はやつと本命である洋服屋に入る。

「ちよつとまって。」

レディットも入ろうとするとクレヴァーに呼び止められる。「話で
もしよう。多分長くなるから。」

店の前にあるベンチに腰掛けることにする。

「実は僕も景色の塔に言つて彼女を見つけたんだよ。昔ね。僕は遺跡の調査を得意としてるが、あの装置の開き方は分からなかったよ。どうやって開けたんだい?」

まじめな質問に、レディットは少しだけ戸惑う。

「いや、僕にも分からないです。触ったらあいたんです。多分自分でも無意識に感じ取ったのかもしれないです。『触れば封印が解ける』って。」

そついうとクレヴァーが分かりやすく驚く。

「あれを一瞬で封印と見抜いたのか・・・君はセンスがあるのかも

しれないな。」

遺跡発掘のセンスは、はっきり言って必要なく、自覚はなかったの
で褒められても恥ずかしいだけだった。

「・・・ありがとうございます」

「おわったよ」

なぜか今までの何も買わなかった時がうそのように、三人が早い時
間で買い物を終えて出てきた。

しかしさっきまで何も持っていなかった手にはいくつもの袋を持っ
ていた。

「レディット君、財布ありがと。」

そう言つてリースから返された財布はすっかり丸裸だった。

「ハア・・・」

思わず深い深いため息が出ていた。

「疲れた～～！」

部屋に戻るなりミヤビはベッドに倒れこむ。

結局帰り道、荷物もちをやったのもレディットで、倒れこみたいの
もレディットだった。

とりあえず今日のところは部屋の荷物は端に寄せておくことにした
ので、色とりどりのタワーが建ってしまっている。

「レディット、ご飯は？」

買い物の影響か、ミヤビの機嫌は気づけば直っていた。

「ちよつと待つて、あれだけ歩き回ったんだ。お風呂が先。」

「分かったわよ・・・」そう言つて洗面所のドアを開けて一言「今
度はのぞかないですよ。」

（覚えていたのか・・・）

結局覚えていたらしいが、そのうえで許してくれたと思うと優しさ
を感じる。

ミヤビを養っていくことを考えるとあることを思い出す。

電話に手をかけ、番号を打つ。

「もしもしルツカ？」

『あれ、レディット。どうしたの？』

「ちよっともろもろ起こってしまって、しばらくそっちには戻れないんだ。」

アデルバに来る前にルツカと帰省の約束を取り付けていたのだが、わざわざミヤビを他の人に預けるのも気がひけるし、ひとりで生活させるのも心配だった。

『そう・・・そういえばレディット学校に入らないの？もうお金に困ることはないでしょ？』

「いやいや、さすがにそこまでの余裕は・・・」

金銭面の事もそうだが、学校に行く場合、ミヤビをおいていかなければならないし、仕事も出来なかった。

『そう・・・まあ余裕が出来たら、年相応に通いなさいよ。』

電話が切れると同時にミヤビが風呂から上がってくる。

「ねえ、ご飯」子供のようにつま々をこねる。「お腹空いた！」

「分かったよ・・・」

そう言っただけ夕食を作っていると、後ろでしていたテレビの音と共にしていたはずの急にミヤビの鼻歌が消える。

何かと思っただけ振り向くとミヤビがベッドで寝息を立てて寝ている。どうやら自分で思う以上に疲れていたようだ。

「仕方ないな・・・」

そう言っただけミヤビに布団をかけようとした瞬間。急に眠気に襲われる。

レディットはそれに抗うことも出来ず深い眠りに落とされた。

まだ見えない影（後書き）

こんにちは!!

今回も文字数多めでサーセン

イメージ的には今回で序章が終わりくらいです。
章の設定を今更つけるのもあれなんで・・・

次回もよろしくどうぞ

byレイ

真実の端の端

「ここは・・・？」

見た事のあるその景色は塔のある東のはずれの砂漠だった。

妙な浮遊感がレディットに夢だと気づかせる。

レディットが誰もいない広大な砂漠を彷徨っていると、向こうから人影が来る。

人影は三つだったが一人は別の一人に抱えられていた。

「あの・・・」

しかしレディットが声をかけても反応はない。どうやらココでレディットの存在は認知されないようだ。

すれ違いざまに深くフードをかぶって良く分からないが三人の顔が見える。一人はどこかで見たことのある絶世の美女、一人は背丈の高い男性、そして男性に抱えられている小柄な体格のその顔は

「ミヤビ・・・？」

見間違えるはずもない。さっきまで一緒にいたのだから。

しかしその顔は青ざめ、生気が全く感じられなかった。

ミヤビを抱える二人は何かあせっている様子で、早足だった。

「いったい何なんだ・・・」

いやにリアルになりつつある夢の内容にレディットが軽くめまいを感じていると、三人の後ろから別の男が現れる。

「返せ！！」男もまたあせっているように叫ぶ。「シェーン様を返せ！！」

（「シェーン」・・・ドイツ語で「美しい」か・・・）

誰の名を呼んでいるのか分からないが、「様」をつけているところを見ると、どうやら崇拜している何かや誰かを奪われたような口ぶりである。

「ユレイダ！！」男性がレディット知っている名前を口にする。「

お前はこの子を連れて塔の頂上に行け!!」

そう言つてミヤビを引き渡す。

「でも・・・」

「いいからいけ!!」

そういうと一人が追つ手らしき男の足止めに入る。

それを見ながらレディットはなぜか自然とミヤビたちについていく。レディットが来た時とは違い、罾が一つもかけられていない塔を登りきると、女性はミヤビを例の装置に入れると、ひざについて呪文を唱え始める。

聞いたことない国の言語でぶつぶつと唱えるその呪文は聞いたことのある声によつて唱えられる。

「この声は・・・」

現実が良く思ひ出せない夢の中で出来るだけの記憶を搾り出そうとしていると、さっきの追つ手が追いついていく。

「やめろ!!」男が叫ぶが女性は無視して呪文を唱え続ける。「やめないか!!」

男が怒り狂つたように手に持っていた剣を投げつける。

「ーーーーッ!!」

女性の腕が千切れ飛ぶと同時に深々とかぶっていたコートが吹き飛ぶ。

「・・・ユレイダさん？」

またもや知っている顔が現れる。そこでやっと聞き覚えのある声を感じ出す。

そしてそれと同時に装置が閉じる。

「許さんぞ・・・」

ユレイダはゆっくり立ち上がり顔の見えない追つ手と対峙する。

ユレイダが足元の剣を手に取り、男が胸ポケットから銃を取り出した瞬間。

「ハッ!!・・・」

目が覚めると鼻と鼻が触れ合いそんな近さにミヤビの顔がある。

あせって起き上がると体が熱い。体温が尋常じゃないほど高い。それに手の甲に奇妙な紋章が浮かび上がっている。それはさっきまでミヤビと触れ合っていた手だった。

「くそっ、何なんだ・・・」

体中から噴出す汗を拭きながら立ち上がり改めてミヤビを見てみると、ミヤビの手の甲にも同じ模様の紋章が浮かび上がっている。

「どうしたの・・・」ミヤビもまた汗でぐっしょりだった。「あれ、私なんでこんなに汗を・・・」

「それが僕にも良く分からないんだ・・・」

そう言ってミヤビと目が合うと体が一気に熱くなる。

今まで味わった事のないほど呼吸と鼓動が早まり、一夜にして急にミヤビを異性として見始めたような感覚。

どうやらミヤビも様子が同じで、二人して頬を赤らめる妙な時間が生まれる。

「あ、あのさ・・・」そんな空気に耐えられなくなったのかミヤビが切り出す。「今日ねあなたの夢を見たの。多分昔の事だわ。」

思わずレディットは反応する。昨日からの体の変化といい、偶然とって割り切れる物ではなかった。

「えっとね・・・なんかリアルだから、あなたの過去に本当に会ったことじゃないかと思うの。あなたはベッドに縛り付けにされていて、周りにいる複数の大人たちがあなたの体から何かを吸いだしていたわ。見る見るうちにあなたは弱っていった・・・記憶にない？」

「いや・・・」

レディットの記憶は昔から所々途切れていて、覚えていないところは少なくなかった。

それでも記憶の断片をさぐりながら思い出そうとすると、体がだるくなる。

「僕も君の夢を見たんだ。偶然じゃないと思うから少し調べてみるよ。」

レディットは味わった事のないこどこのたかなりに戸惑う事しかできなかった。

「失礼します。」

会話の無いまま特務室のドアを開けると中の全員がいつせいにすばやく振り向く。

普段は冷静な男性陣やいつもおっとりしている女性陣まで恐怖の混じった視線をレディットに向け、皆一同に目を見開いている。

「どうかされました？」

「いや・・・おはようレディット君。ところで普段力を抑えたりしている？」

なにやら意味深な質問をリリースがしてくるが全く見に覚えは無かった。

何かをした覚えはないが、強いて言うなら今朝の事に関係があるのだろうかそれも良く分かっていない。

「いや・・・力が・・・じゃあ今日もよろしくね。」

納得のいかない様子を見せつつもリリースが聞くのをあきらめる。

歯切れが悪いが切り替えて依頼ボードを見るとちよいどいい依頼が張り出されている。

「紛失図書の搜索 市民図書館より」

レディットはその張り紙を取ると図書館へ向かった。

市民図書館はアデルバ南の政治中心地にあり歴史の浅い図書館にしてはほんの数が多い。

「特務班の方ですか？」まじめそうな職員が困ったように話し始める。「探してほしい本は三冊です。別に無くなってしまったわけではなく正確には期限を過ぎても返却してくれない方がいるのです。」職員の話によるとうち二冊の持ち主とは連絡が取れているらしいが残り一冊の持ち主が何度訪れても返してくれないので連絡したという。ようはパシリである。

「わかりました。」

住所メモを職員から受け取ると珍しく小さな任務に出発した。

「あのー・・・すみません。」

一冊目、二冊目は簡単に手に入ったものの、三冊目の持ち主はいくら呼んでも出てこない。本当に住所はあっているのだろうか。「まったく・・・」

ドアに耳を当てながらチャイムを鳴らすとわずかだが物音がする。

「あのーすみません。ギルドの者なんですけど・・・」

「ギルドだと・・・」

仕方なく身分を明かすと、図書館の人でない事を確認するように住人が姿を現す。

眼鏡をかけ、無精ひげを生やしたその男もまたレディットを見るなり驚いたような顔をする。

「あの、図書館の本を・・・」

「いいから入りましたえ!」

レディットは用件を伝えるひまもなく家の中へと引きずり込まれる。

「あの、こっちは用件が・・・」

「それより質問だ!!」またもや遮られてしまう。どうやら質問に答える他ないらしい。「その力、どうしたんだ!?!」

さつきも聞いたような質問をされた気がする。

「力が何なんですか?」

「気づいていないのかね? 君の力は私が見てきた中で最も大きく、凶暴そうだ。それでも昔は能力者の研究をしていたのだね。」

「そうなんですか!?!」

偶然にも今朝の事やリースたちとのやり取りの謎が解けるかもしれない。

「これは今朝からなんです。仕事の先輩たちにも驚かれています。」

「ああ、そうだろうな君の力は恐ろしい。能力者でも驚くだろう。」

居留守を使っていたわりには今更興味津々にきいてくる。「きっと君は特務班だろう?」

数年前に出来たばかりの部署を知っているのは何がギルドにコネを持っているのだろうか。

「知ってるんですか？」

「ああ、ユレイダとは昔からの知り合いだね。あいつが作った部署だろう。」

「支部長を知ってるんですか。」

ユレイダを呼び捨てにするとはなかなかの大物なのだろうか。

「まあな。それよりも何か心当たりはないのか？」

いつもと違うところはたった一つ。レディットは腕の紋章を見せる。「あるといえばあります。関係あるかは分かんないんですけど、昨日の夜わけあってある女の子と一緒に寝る事になってしまったんです。そしたらある夢見たんです。」

『夢』という単語に男はピクリと反応する。「その夢にはその少女が出てくる夢で、朝起きてその子に聞いたら、その子も僕の夢を見た。そして体にこの紋章が。」

「それはおそらく『夢交換』をしたのだろう。」

聞き慣れない言葉が男の口からだされる。夢を交換？「夢交換って言うのは、能力の近い物同士が体の一部を触れ合わせながら眠りについたときに行われるんだ。」男はそういいながら本棚から一冊の本を取り出す。「この本に書いてあったよ。そうして夢を交換した次の日の朝、触れ合わせていた体の部分に紋章が浮かび上がるという。私も実際にこの紋章を見るのは初めてだが、おそらく個人個人によって違うのだろう。そしてもう一つ言われているのが・・・」そこまで言い切ったところで男は言うのをためらう。

「何か？」

「・・・君とその子は恋人同士かね？」

唐突な質問過ぎてレディットは驚いたが、男は何か遠まわしに言っているように見えた。

が、以前とは違いそれだけでもレディットは取り乱す。

「ッチ、違いますよ！何でそんな事・・・！」

その動作を見て男は「やはりな・・・」といった顔をする。

「君の力は何だね？」

「^{フレイル}炎ですけど・・・」

「おお！！」

なぜか男は驚きと簡単と興味に満ちたような顔で迫ってくる。

「その能力、はじめて見たぞ！学書で存在するとは知っていたが、すごいぞ！」

「何がすごいんですか？」

レディットを差し置いて男は一人でなにやら興奮している。

「おっと、自己紹介が遅れた。オレはカーリー・セントだ。それでな・・・^{フレイル}炎はいろいろな事に利用できるだろう？それがな、命にも代用できると昔ある教団が唱えていたんだ。」

「命に！？」

思わず素っ頓狂な声を出してしまう。確かに自分の中に本当にそんな力があるのなら驚きだ。

「そう。炎を注入すれば時間に限界があれど、命の変わりに使えると・・・何だっただけな・・・名前は忘れたがある教団が言っていたんだが・・・忘れたな。」

言葉が出なくなる。その教団の意図も全く分からない。

「いや、君とその子を調べたいので近々伺いたいのだが。」

「ギルドにですか？構いませんし、その子には私から掛け合ってますが・・・」

「コレイダにはオレから掛け合ってみるから心配するな。これでも学者の一人だからな。」

「ここまで教えてくれた人なのだから信用に値するだろう。」

「そうですか・・・ありが・・・」

そこまで言っただアを出ようとしたときある事を思い出す。

「あの・・・本返してください。」

「くっ、ばれたか・・・」

「見当たらないな・・・」

レディットは楽ながらも仕事を一つ終えてから市民図書館で今朝の出来事に関する書物を探していた。

「まずなんて調べたらいいのか・・・」

病気に関する文献を調べたがただの熱風邪なら仕事もままならないのだからレディットの場合常時体温が40度ほどあるのに仕事はいつもどおり出来た。

それにカーリーの家にあつたなら図書館に本があってもおかしくないだろう。

「お、居た居た。」

闇雲に探していると後ろから聞き覚えのある声がする。「何探してるのだい？」

「フォーゲルさん!？」

私服で現れた彼女の服装は意外と女の子らしかった。

「最近君、悩み事があるみたいな顔してるし、それに今日の朝の事も気になったしね・・・おそらく夢交換だろう?紋章からして。」

「知ってるんですか？」

「ああ。支部長から昔聞いたよ。でも力が強くなるってことは・・・」

「またフォーゲルにも何か気になる事があるようだ。」「いや、ごめん。なんでもない。で、何を探しているんだい？」

これだけ夢交換に詳しい人が多いなら、本を探す必要もないだろう。

「あの・・・正直ミヤビのことも今朝の事も全然分からないんで調べてしまおうかと。」

レディットのその言葉を聞くとフォーゲルはにっこりと笑う。

「じゃあ、教えてあげるから私とデートしよう!」

「え？」

今の状況と全く関係のない単語に思わず反応する。

「さ、いくよ!」

結局何も調べられないまま図書館を後にした。

「ここが、百貨店で・・・」

「あの・・・」

デートといった割にはさつきかかフォーゲルは観光案内のようなことばかりしている。

百貨店、フォーゲルお勧めの喫茶店などレディットが教えてほしい事とは全く関係のない事ばかりしている。

「あの、いい加減教えてくださいよ・・・」

恐る恐る尋ねるとフォーゲルは笑顔を全く崩さずに答える。

「次が最後だから、ね」

わけも分らずフォーゲルについていくと、ノーマット氏が襲われた場所に出る。やはりココだけ周囲とはなっている空気が違う。

ごみが散らかっているとか、不良がたまっているとかいいう分かりやすい物ではない。

「ここ、覚えているでしょ。ここね、人がいないのはマフィアの縄張りだからなの。」

「マフィア？警察は摘発しないんですか？」

普通ならマフィアは警察が摘発して逮捕及び解散が出来るのだが、何故しないのかが疑問だった。

「警察は動けないの。」フォーゲルの珍しいまじめムードにレディットも飲まれる。「警察って国の機関でしょ。だから政府や議会の承認がないと動けないの。で、この前ノーマット氏が言っていたように、議会にはドイツ人の議員がいるって。」

「それが何か？」

フォーゲルが人差し指を立てる。まるで探偵。

「ノーマット氏の事件も絡めて、こう仮説を立てるとうまくいく。」

1. 犯人はドイツ人議員でそれらがマフィアを金で雇って、自分たちの意見を通すために他の議員を襲わせたり、その他汚れ仕事をさせている。

2・それらの議員は、マフィアが有名になり摘発されそうになると、その要請を力づくで蹴って軍や警察が動くのを防いでいる。

というのだろうか。まだまだ推理段階でなんともいえないけどね。」

リースといいどこか抜けているように見えてとても頭がいいんだと思ひ知らされる。

そこまで言い切るとフォーゲルはやつと普段の顔に戻る。

「さ、帰ろう！もう遅いからな」

確かにもう夕日は落ちかけていた。「よし。またデートしよう！」

今日のはレディットの初デートに数えていいのだろうか。

真実の端の端（後書き）

遅くなって申し訳ないです。

ここ3日ほどPCをつけられず・・・

そうだ！！新作、投稿させていただきました。
詳細は活動報告まで（ry

というわけでこれからよろしくぶっぞ。

by
レイ

二つの日常へ・・・

今思えば、3日前のフォーゲルはデートによって悩みの種を解決するのに必要な情報をくれたのではないだろうか。

そう考えると優しさに溢れているのかもしれないが、政治的な問題まで絡んでくるとなるとレディットひとりで解決するのは無理に近い物だと思い知らされる。

結局時間の都合上、カーリーによる検査は大分あととなってしまったので、そこまで謎が解ける事はないのだろう。

それよりも今は・・・

「あつつい・・・」

リースとフォーゲルが半袖の制服を腕まくりし、もうノースリーブになっている。だらしないにも程がある。

仕方ないのかもしれない。9月初旬の猛暑の中なのに特務室のクーラーは見事に壊れていた。

それは昨日

「ひまー・・・」

仕事が確実にあるという職業ではないため、時折ぱったりと仕事がなくなくなる時がある。

今はそういう意味で沈んでいる時期なのだ。

そういう場合、他の部署に分けてもらう事もできないし、急な依頼が入るかもしれないので、サボって外に出るわけにも行かない。要は部屋の中にこもりきりなのだ。

「ああああああ・・・」

さつきからリースは扇風機で遊んでいる。冷暖房は使い放題なのでその辺で困る事がないのが唯一の救いだ。

「暇だからなんかやろう・・・」

扇風機にも飽きてきたのかリースはレディットが来たときからずっ

と閉ざされている棚を開く。

レディットは今まで重要な書類だとか、緊急時に必要な物が入っている物だと思っていた。が、違う。

中にはすぐくやランプ、絶対仕事場に要らない物が入っている。(何でこんな物が・・・)

どうやら暇つぶし用に常時装備しているようだ。

「これでもやりましょう。」

そう言ってリースは的のような物を取り出す。

「それは・・・？」

「これは能力を使った遊び・・・いや、戦いよ。」

最後の不吉な一言にみんながまさかといった顔で振り向く。「今日の昼食をかけます!!」

今まで読書をしてたクレヴァーも、退屈そうに外を見ていたロゼツトも、半分寝ていたフォーゲルまでもが厳しい顔に変わる。

「どういうことですか？」

どうやら時折特務室ではこれを行っているようだが、その重要さと厳しさを理解していないレディットとミヤビは戸惑う事しかできない。

「分かっていないねレディット君。この暑い中食堂まで言ってご飯を食べるのはとても厳しい。だからこのゲームで負けたものが自腹で外まで買出しに行かされるのだよ。」

確かに外の気温は40 近い。そんな中、関係者食堂で悠長に昼食を食べる猛者はいないだろう。かといって最寄のパン屋などに行くにも遠い。つまりみんな日の下に出たくないのだ。

「ルールは簡単、フォーゲルが作った紙人形浮かべてそれに能力を当てて誰かの的に当てるの。当てられた人は買出し決定!!」

分かりやすいルールだが皆の目はもう血眼だった。

合図と同時にフォーゲルが紙人形を飛ばす。

瞬く間もなくクレヴァーがゴム弾を撃ち弾き飛ばす。

ものすごい速さで紙人形はフォーゲルの元へと飛んでいく。

「私かつ!!」

あわてて紙で作った剣のような物ではじく。

リース、ロゼット・・・弾くごとにどんどん加速していく。

(どれだけ必死なんだこの人たちは・・・)

レディットが冷ややかな目で他人事のように見ていると

「甘い!!」

油断を見抜いたのかリースがこちらに弾いてくる。

紙なのにもかかわらず、軽くプロの野球選手の剛速球くらいの速さが出ている。

「なっ・・・!!」

突然弾き返そうとしたので炎を制御しきれず、ほぼ最大威力で弾く。何とか燃やさないように能力を制御したが、炎の大きさは能力が強力になったと思われる今朝のままだ。

狙いをつけられなかった紙人形は、まっすぐ審判役のミヤビの元へと飛んでいく。

「エッ、嘘!? 嘘!!? 嘘!!!??」

どうする事もできずにミヤビは戸惑うばかりだ。

「ミヤビ!!」

誰もが危ない!!と、思った瞬間。

「キヤアアアアア!!」

ミヤビの体が一瞬だけまばゆい光を出して紙人形を弾く。そして真っ先にエアコンへ・・・

という経緯で業者が来るまでエアコンが使えなくなったのだ。

エアコンが壊れた事よりも、ミヤビが何らかの能力を使ったと思われる事実自体にみんなは驚いていた。

「すいません。私が・・・」

ミヤビが申し訳なさそうな顔をする。

その顔を見ているとレディットは申し訳なくなってくる。

「いえ、ミヤビより俺が油断していたからです・・・」

「もう！二人とも気にしないの！！ミヤビちゃんが能力者だと分かってよかったし、ね！」

とはいってもこんな残暑の真っ只中にエアコンがないのはきつすぎる。

「あつついわね・・・結局みんなで昼食、買いに言っただしね。」

どうせ今日も昼食を買いに行かなければいけないのだ。

覚悟を決めて買い物に行こうとすると、タイミングよく他の部署の人間が現れる。

「すみません・・・うわっ、暑い・・・あのレディット・ギルバーツ君とミヤビ・センドウさんは？」

その人もさすがに異様な暑さに気づいたのか身を引ながらたずねる。

「はい・・・僕ですが。」

「あの・・・支部長が呼んでいるので支部長室までと・・・」

レディットは汗だくでふらふらになりながらも立ち上がり、その人についていく。

しばらく歩いているとさすがに気になったのか、特務室について聞いてくる。

「あそこってさ・・・なんであんなに暑かったの？」

まあ当然の疑問だろう。

「昨日エアコンが壊れてしましまして・・・サボるわけにもいかないので。」

「特務室の人ってさ・・・自由だね。いいなあ」

確かに特別扱いを受けている分、他人から恨まれたり、妬まれたりする事も少なくないのだろう。

チラリと見える能力者への特別視は、力を持たないものにとって許しがたいのだろう。

そういう特別扱いはレディットも嫌いであつた。

「まあイヤ、ごめんね。君も能力者なのにこんな話聞いてもらって。これから会うこともあるかもしれないし、よろしくね。」

そういつて彼女はその場を立ち去ってしまう。

「名前聞いてないんだが・・・」

今のところはつきりどちらとはいえないミヤビは、この問題に対しどんな心境なのだろう。

さすがにもう緊張はなかったが、今更用件があるのかどうかも疑問だった。

ノックをして中に入ると相変わらず無表情なユレイダが座っている。

「やあ、ミヤビ君、レディット君ここには慣れたかね？」

「はい。ところで何のようですか？」

夢の中の一件のせいでレディットは自然とユレイダに不信感を抱いてしまっていた。

なぜなら・・・コートからチラリと見えるはずの左腕がないから。

だが今考えて、夢が真実だとしても、なぜユレイダがミヤビを封印する必要があつたのか全く想像がつかない。

「そうだな。用件に移ろう。君たちはまだ若いだろう。こんな年で働きづめは良くないと思うんだ。」

いきなりの深刻な話に二人は戸惑ってしまう。「そこで、ギルドのほうから助成金を出して君たちには学校に通ってもらいたいんだ。」

「学校ですか・・・」

確かに年を考えれば珍しくはない、っていうか当たり前なのだが、生活費やミヤビの順応性を考えると万事OKというわけにもいかない。

「君たちは二人とも働いているし、生活のほうは問題ないだろう。」

まあ決めるのは君たちしだいだな。」

「僕たちの待遇のよさは気持ちが悪いくらいですね？」

「ああ。君たちは特別だからな・・・」

レディットが皮肉をこめたつもりの質問をしたが、ユレイダはなぜか真剣に返してくる。

珍しく強気に出るも、すっかりレディットは調子をくるわされてし

まう。

「・・・僕はかまわないですけど、ミヤビは？」

「私もそれでいいです・・・」

「そうか。それじゃ手続きはこっちで済ませておくから。」

「またもや早々と用件が終わってしまいそうなので、去り際にレディットは一つ聞いてみる。」

「その左手は、景色の塔でなくされましたか？」

その質問をした瞬間、初めてユレイダが表情を乱す。

「そうか・・・君も夢交換を・・・だがその話は後だ。」

問題を後回しにされたとはいえ、また一步謎に近づけた気がした。部屋を出てしばらく歩いていると珍しくミヤビが袖を引っ張って話しかけてくる。

「ね、ねえ・・・学校ってさ・・・勉強するところでしょ？そんなところ私が言っても大丈夫なのかな？」

どうやら基礎知識だけでは想像がつかないらしく、緊張しているようだ。

そつえばどこの学校に行くのかも聞き忘れた。

「大丈夫だと思うよ。いざとなったら僕が・・・」

そこまでいったところ小っ恥ずかしくなり、言葉を止める。

以前なら「どうしたの？」と近すぎるくらいの距離で覗き込んできたミヤビも今は無言で歩いている。

特務室に帰ってくると、またあの異様な熱気に襲われ、一気に元気を奪われる。

「何の用件だった？」

汗をかきすぎてげっそりしているリースが、睨むように聞いてくる。「皆さん大丈夫ですか？・・・まあ、こっちの用件は僕とミヤビの通学に関することです。ギルドのほうから助成金を出してくれると別にどちらでもいいんですが。」

「そつ、学校・・・」そついい終えると、何か閃いたようにリースが立ち上がる。「どこの学校！？」

「すみません。聞いてないです。どの学校かは。」

それを聞くとリースは内線をかけ始める。

「もしもし、ユレイダさん？どこの学校にするの？・・・決まってるの！？じゃあ、マルフ学園で・・・うん。あそこなら私のツテもあるから！」

よくよく聞けば支部長にタメ口であつたがそこはつつ込まない。それよりも「ツテがある」の一言にはいやな予感を覚えた。

電話が終わると今まで暑さで元気がなかったのが嘘のように、何かを想像してにやけている。

レディットは寒気を覚えた。

部屋に帰るとレディットは真つ先に電話を取る。

『もしもし？』

「もしもしルツカか？俺も学校通う事になったよ。」

『ほんとに！？良かったじゃない！！でどこに通うの？』

「どうやら喜んでくれているようだ。まあ実際、一番進学を勧めていたのもルツカだったである。」

「えっと・・・マルフ学園・・・？」

うる覚えの名前を口にする、ルツカが電話口からでも分かるほどに周りにいる人間（おそらくメイド）と騒いでいる。「えっと・・・どうした？」

『あ、覚えてないな！？私もマルフなの！！』

どこかで聞いたような気もするがレディット自身、学校という物に興味がなかったため、覚えてなかったのかもしれない。

「ご、ごめん・・・」

『いいわよ、待ってるからね』

電話はそこで切れる。

兎にも角にも知り合いがいるならそれなりにやっていけるだろう。問題はミヤビのほうである。まだ塔から出て一ヶ月も経っていないというのにいきなり一般人と同じことができるのが不安だった。

「な、なあ・・・ミヤビ・・・」

まだ慣れない胸の高鳴りはまるでミヤビとの接触を避けているようだ。「無理することないんだぞ。君はまだ外に出るのは早い位だし・・・」

可愛そうなのは分かっていたがレディットはそれ以上に心配だった。

「いいの・・・私が決めた事だから・・・」

心配されたのが照れくさいのかミヤビは顔を真っ赤にして伏せる。それでもまっすぐな目をしている。

ミヤビの決心はどうやら強いようだ。

その心配はただ、レディットのわだかまりを増やすだけだった。

リースに聞けばマルフ学園とは、シェダール中の金持ちかつ頭のいい秀才が集まる学校なのに、校風が特殊という理由から変わった学校と呼ばれているらしい。

なぜ王女であるルツカがそんな学園に入学しているかも、リースが何を思っただけ進めたのかも全く分からないので、不安は募る一方だった。

「これが標準服だけど、レディット君はギルド用に特注させてもらったわ。ほら、背中にギルドの紋章！」

今はレディットの部屋で制服合わせをしていた。

これまたなぜか楽しそうに頼んでおいた制服をリースが手渡してくる。

ミヤビはすでに受け取り、着替えている真っ最中だ。

「もうすぐ学園祭でしょ。この時期に編入したら大変ね。」

確かに9月は学園祭の時期であるが、レディットは学園祭という物を体験した事がなかったため、想像がつかなかった。

マルフ学園はなぜかとても制服が多く、標準服、式典のときに着る礼服、体育授業時に着る体操服、掃除等のときに着るつなぎ、水着に武道着に生徒会委員専用制服、更には看護師服やなぜか調理服まであり、そのすべてにギルドの紋章が刻まれていてレディットは少

し小っ恥ずかしかった。

測ってもないのにサイズがぴったりな制服を羽織るとまだ硬く腕が動かしにくい。

「うんうん。二人ともいいわよ。」

後ろを見るといつの間にか着替え終わったミヤビが立っている。

「あんまり見ないでよ・・・」

ミヤビが頬を赤らめながら言う。

しばらく体を動かしているとある事に気づく。

（炎が出にくい・・・？）

少し力をこめただけでは炎が出ないのだ。

「そうなの。それは肩と首に制御装置みたいなのを作って取り付けたの。」

久しぶりに心を読まれた気がする。「レディット君。もう分かっているとと思うけど、この前から急に大きくなった炎を完全に制御できてないの。ちなみにあの暑い部屋にいるとき、汗と一緒に駄々漏れだったわよ。」

己の未熟さを感じながらも、自分の特別さを実感してしまう。

おそらくこれも能力者であることを絶対的にではないが隠す物だろう。

「じゃあ、明日から学勉も仕事も怠ることなくがんばってね。」

それだけ最後に言うというリースは部屋から出て行く。ミヤビは姿見で襟を整えている。

（明日からなのにな・・・）

レディットは少し通学が楽しみになっていた。

二つの日常へ・・・（後書き）

暑いですね・・・

だからといってずっとクーラーにあたっていると体を壊してしまうらしいです。

気をつけてください。

それよりもちよつと次回予告でもしましょう。

マルフ学園に入学したレディットとミヤビは二つの日常の上に立つことに・・・

学園とギルド。その二つから二人はどう変わっていくのか？

そしてリースの予想通り学園のほうでは学園祭の準備へ・・・

特殊な校風が故の学園祭とは？

・・・堅苦しくもこれにて。

次回もどうぞよろしくです

レイ

b
y

ミヤビの嫉妬

レディットとミヤビは今、マルフ学園の学園長室の前に来ていた。緊張と期待を胸にココまで来た。

それこそ今朝なんて、レディットが何かの物音に目覚めて時計を見るとまだ5時だった。

何かと思って体を起こすとミヤビが姿見の前で嬉しそうに、しかも鼻歌交じりに制服をあてがっていたのだ。

ミヤビがレディットに気づいていなかったのか、ずっとやってる物だから気まずくなつてレディットが「似合ってるぞ」と声をかけた途端顔を真っ赤にして飛び退く、なんてことがあったのだ。

楽しみに思いすぎるのもなんというか・・・

さすが金持ち学校。学園長室に来るまでに通った廊下や中庭だけでも、もの凄く広く、廊下にカーペットが敷いてあるのには本当に驚いた。

この学校の授業は基本的に4時限目までで間に合うように組まれており、午後からは仕事が出るのでその心配は必要なかったが、夏休みも時折登校する必要があったので、休み返上は覚悟しなければいけなかった。

最初に支部長室のドアを叩いたのと同じような気持ちを胸にノックをする。

「どうぞ。」

中にいたのは白いひげが特徴的な老人だった。イメージ、サンタさん。「ギルバーツ君とミヤビさんだね。ようこそわがマルフへ。学力調査で補習は要らないという結果だったので今日から早速授業に参加でいいね。」

事前調査みたいな感じでやった問題は意外と出来たのでレディットも自分自身驚きだった。

「はい。特に問題はないです。」

「それで、ギルドに勤めているという事だが、許可はおろしてあるので緊急時などは早退してくれて構わないよ。」

ユレイダもリースも手回しが早い物で、何一つ不自由はなさそうだ。「ギルバーツ君はルックセンカ王女の幼馴染だったね。二人とも王女と同じクラスで言いかね。」

どうやらルツカは手続き上では身分は隠さないようだ。ただそれを知らない人間が一人。

「ええっ！！レディットそんな偉い人だったの！？」

ミヤビが声を大にして驚く。まあ、身分を隠してるといえ偉いのだろうが、幼い頃から結構一緒にいたので、そんなのは今更気にしてない。

本人曰く「一人の人間として接してほしい」らしい。

「まあ、昔から知ってるってだけだよ。」

「それじゃあ、教室に行きましようか。」

そういつて学園長が立ち上がる。

「え！？学園長も行くんですか？」

「何を言ってるんですか。私は学園長だから直接紹介して差し上げるのが礼儀ですよ。」

なんとなく特殊な校風は誰が作ったのかわかった。

「ねーねー、今日来る転校生一人はルツカの幼馴染でしょ。男？女？」

「教えて！教えて！」

ルツカは教室で友人に囲まれて質問攻めにされていた。

「あーそうだよ、男だけど期待しないほうがいいわよ。もう一人もアイツの連れらしいし。」

さつきから同じ質問ばかりで疲れる。

もう一人は女だという噂も流れ、女子も男子もざわめき立っている。自分でも言えないが、みんな良いとこの子供とは思えない。

「イケメン？身長は？趣味は？」

「イケメンかどうかは幼馴染が言ってもあれだし、そんなのあいつ本人に聞きなよ・・・」

「もう！ルツカの意地悪！！」

と、言われても幼馴染を褒めちぎる気にはならない。

とはいってもルツカも8月の終わりから会っていないため、少しばかり変化の期待をしていた。

「はい！HR始めるから席に着いて！！」

教師が来て、みんな席に着いてもざわめきは収まらない。「みんなが期待してるのは多分転校生でしょ？どうぞ学園長お入りください。」

「

「なんだ、学園長か・・・」

みんなががっかりといった表情をする。学園長に対しなんとという反応。

「みなさんご安心を、二人ともどうぞ。」

今度こそ転校生が入ってくる。瞬間、ざわめきがいつそう大きくなる。

もちろんルツカも驚く。先に入ってきたアッシュブロンドの髪をした青年の後ろには目を引くほどの美少女がいたのだから。

男子はそれにざわめいている。こういふとき男子生徒は『もしも付き合ったら・・・』などという妄想でもしているのだろうか。

「レディット・ギルバーツです。よろしく願います。」

「ミヤビ・センドウです・・・」

名前を聞いて更に驚く。名前の感じからして・・・日本人だったからである。

驚いた事は正確に言うと、日本人である事ではなく、レディットが日本人をつれている事であった。

だってレディットは・・・

転校生にとって最初の休み時間は地獄である。目を付けられればとりあえず質問されまくるから。

その通りレディットとミヤビはそれぞれ質問の嵐を受けていた。
その大半は女子である。

「ギルドで働いてるんでしょ？」

「ええ、まあ・・・学園と両立で頑張りますよ。」

「ルツカの幼馴染だったんでしょ？」

「そうですよ。」

「ルツカって昔どんな子だった？」

急に質問が変わると、地獄耳でもつかったかのようにルツカが割り込んでくる。

「ちよつと、私は関係ないでしょ！？レディットもちよつと来て。」

そう言つて廊下に連れ出される。「どういふこと！？なんであなたが日本人と・・・」

「昔の事は関係ないだろ・・・それにあいつ、身寄りがないから・・・同棲してるんだよ。」

少しだけ迷つたが、周りのみんなに聞こえないように小声で話す。
いろいろな意味で変な噂でも流れたらたまらない。

「同棲！？」

にもかかわらずルツカが大声を出す。

「バカ！！大声出したら聞こえるだろ！！」

幸い誰にも聞こえていないようだ。レディットはそつと胸をなでおろす。

ミヤビもどうやら男子に質問攻めにされているようだ。

あまり人と触れ合えないミヤビにとって、それがいいのかどうかは今の段階では分からないが。

とりあえずうまくやれない事はなさそうだ。

そんなこなしているうちに最初の授業が始まる。

それはリースが予言したとおり文化祭についてだった。

話によれば、例年奇抜な出し物で結構な人数の人が来るらしい。奇抜な出し物と聞いていい予感はないが。

今回は使える備品の説明や電力供給の割合など、専門的な話を「素

人に話してどうするんだ？」とか考えながら聞いていたため、奇抜な出し物だのなんだのは分からなかった。

「ちょっと、ちょっと、君。」

授業がすべて終わり、廊下を歩いていると、誰かに話しかけられる。聞きなれたようなおっとり口調に振り向くと誰かに似ている人がいる。

「生徒会長のニーナ・エルモンドよ。レディット君とミヤビちゃんね。ちょっと来て頂戴。」

（エルモンド？）どこかで・・・

それだけ言つと生徒会長と名乗るその人は腕を引っ張つてレディットとミヤビを連れ出そうとする。

「だ、誰ですか？」

「あれ？姉さんから聞いてないの？私はリースの妹よ。」

エルモンドに納得すると共に、リースが言っていた『ツテ』というのも理解する。

それを知つて改めてみると、とても似ている。雰囲気も声色も見た目もそっくりだ。「良いからちょっと来て頂戴。」

仕方なく二人がついていくと、たどり着いた部屋には『生徒会室』と書かれていた。

ニーナに無理やり中に引き込まれると、中には数人しか人間がいない。

見たことのあるような景色。それはまるで、特務班のような景色だった。

「お、来た来た。」

そう言つて振り向いた人数は4人・・・まんま特務室では？「副会長のジャンだよ。よろしく。」

そういつて自己紹介してきた男性。イメージ：クレヴァー。

「ジャン、ちょっと・・・」

ニーナがジャンに耳打ちする。それを聞いたジャンが頷き、

「ミヤビちゃん。僕らと一緒に学園を歩き回ろうか。」

「ええ！？レディットは？仕事だってあるし……」

「大丈夫よ。姉さんに許可とつてあるし。」

それだけ伝えると、ミヤビと他の生徒会委員は出て行ってしまう。つまり今は二ーナとレディット二人だけになってしまった。

「あ、あはは・・・」

心の中で「超帰ってええええええええええええ！　」と思いながらもレディットは何とか苦笑い。

リースも何を考えて許可したのかわからない。

それでもさすが姉妹。どちらも無茶苦茶な割には信頼を持っている。

「ねえレディット君。君、能力持ちよね。」

「え、ええ、まあ……」

いきなりの話題の展開に戸惑っていると。

「炎」

「なっ
・
・
・
・
・
・
！」

いきなりニーナが体を触ってくる。「な、なにを!!」

「静かにして頂戴。」

レディットの唇に人差し指を当て静粛を促す。

ずりずりと後ずさりするも背中が壁に当たる。

逃げられないのをいい事に――ナはどんどん触ってくる。耳から腰までお構いなし。

しかし左手を触り始めたところでニーナの手が止まる。

「この紋章……」

どうやら夢交換のときの左手の紋章を見ているようだ。

「これは……」

「言葉にする必要はないわ。私、人の心読めるから」

レディットの説明は衝撃の一言によって遮られる。これが能力なら
遺伝的にリースが持っていておかしくないだろう。

しかしそういつた二一十の顔はいやに悲しげだった。

人の心が読めるゆえに人間関係がうまくいっていないというわけもなく、レディットに知られたくなかったという顔でもなく、形容できない何かを感じているようだった。

「ミヤビちゃんとか・・・？これって・・・！？」

また心を読んだようなことを言つと、今度は驚いたような顔になる。何度も何度も紋章を触り何かを確かめているようだ。

「なんですか？」

「レディット君、死んだ事はある？」

なにを言うかと思えばわけの分らない事を言い出す。表情は以外にも真剣だ。

何か裏があるのかもしれないが、今のレディットに読みきれるはずもなく、答えは正直に「NO」。

「も、もう良いでしょう！？」

恥ずかしくなりレディットが手を振りほどくと、今度はソファに倒れてしまう。

レディットが下でニーナが上。つまり馬乗り状態。

イケナイ状態のような気がして早く降りてほしいのだが、ニーナにその気は全くないようだ。

ほのかに香る甘いにおいが鼻腔をくすぐり、異性慣れしていないレディットは鼻血が出そうになる。

「ただいま。・・・あれ？入ってよかった？」

結局どいてもらえないままドアが開いてしまう。

ドアを開けたジャンの後ろにいるミヤビは目を見開いてこちらを見ている。

「いえ、問題ないわよ。」

そのくせどころとする気配は微塵もない。「事故だから。」

しかしそれでは納得いかないのかミヤビが怒りに満ちた表情をしている。

何故そのような表情をされるのかは分からないが。

「ち、違っんだミヤビー！！」

しかし体勢の変わっていないこの状況でいくら弁解しても無駄であった。

目いっぱい涙をためたミヤビは走って部屋を出て行く。最近やっと会話も戻ってきたのに、また会話がなくなる。

あわててニーナをどかしミヤビを追おうとすると、ニーナに腕をつかまれる。

「まって。アクシデントだから今日は帰ってもいいけど今日ここに呼んだ用件を伝えるわ。あなたたちを生徒会に入れてやってくれと姉さんに頼まれたの。ミヤビちゃんにも話していてね。」

「はい……」

そういうとレディットはミヤビを追った。

ミヤビの嫉妬（後書き）

どうもレイです。

今回、悩みました。それはニーナとレディットのくだり。

正直絶対にミヤビの嫉妬心を目覚めさせる。というよく分からない確固たる意思の元、書いていたのですが、ニーナは後々出てくるキヤラなのでレディットとの友好を程よく崩すといった感じで大分ハイドルが上がりました。

ごめんなさい。知らない話を・・・

それと、自分で挿絵書いてみようかな・・・なんて考えてます。（多分やらないです。）
次回も精進。

b
y

レイ

ミヤビの嫉妬2

意外とミヤビは足が速く、結局ギルドにつくまで追いつけなかった。ノンストップで部屋の前まで来ると、中から物音がする。

あけようとするが、鍵がかけられている。

さすがに鍵は持っていたが、強引にあけるのも気がひけたのでドア越しに声をかけてみる。

「あのーミヤビさん・・・？」

「・・・・・・・・」

中から返事は聞こえない。相当怒っているようだ。

「ごめん。本当にごめん。あれは事故なんだよ。」

「・・・・・・・・」

弁解むなしく、また無視されてしまう。

諦めて一度部屋を離れて文句を言いに行くことにした。

「ちょっとリースさん!!」

勢いよく扉を開けると、暇そうにリースが振り向く。

いやな話、今更ながら特務班は給料がいい。

歩合制だが、最低賃金は確保されているし、魔獣退治ともなれば中級ランクでも一回5000円は堅い。

そう考えれば学校に通いながらも生活は出来るし、暇でも特別みんな焦ったりはしない。この前のような自体は例外だが。

「あら、レディット君遅かったわね。ニーナには会えた？」

「そのニーナさんが問題なんですよ!!」

「あの子が何かした？」

そういわれるとニーナに直接の罪はないので言葉が詰まる。

「あ、っと・・・急に生徒会ってどういうことですか!？」

「そっちのほうが便利でしょ？」

「そうなんですけど・・・」

押し付けられた仕事でも一応はこなす主義のレディットだが、生徒会はずいぶんめんどくさいにおいしくない。

ニーナのせい（？）でミヤビが怒ってしまったことへのやり場のない怒りがレディットの中に渦巻く。

とりあえず自分が悪いのだと言い聞かせる。

しかし、ニーナはあの時気になることを一つだけ言っていた。

『君、死んだことある？』

あの言葉の真意はいつたいたんだっただろうか。

気になるが、本人以外に聞いてどうなるかは分からないので聞くのはやめたほうがいいだろう。

「まあ、良いじゃない。ところで何で学園制服のままなの？」

「これは・・・部屋に入る前にこっちに来たので」

リースにばれると面倒になりそうなので適当にごまかす。

「そういえばミヤビちゃんは？」

「えっと・・・疲れたようなので部屋にいます。」

心の読めるリースに嘘をついても仕方ないのかもしれないが、リースは空気を読んでか、心を読まなかったのか特に何も言わないで頷く。

とりあえずとはいえレディットの報告は終わった。

と、不意に携帯の着信になる。フォーゲルのようだ。

「もしもし・・・え？」

驚いたような顔をするとレディットを一瞥してから部屋を出て行ってしまった。

ミヤビは混乱していた。

ずっと外の世界を知らなかったからかもしれないが、今回のような気持ちは初めてだった。

あのニーナという女性がレディットの上に乗っかっているのを見たとき、事故とは分かっているとしてもんでもないいやな気持ちになった。

怒りや悲しみ、酩酊感や焦燥感のようなものではない何か。知っているようで知らない何か。

レディットに悪いと思いつつも、気持ちの整理がつかない以上、謝る気にもならない。

さつきまでドアの外でレディットの声がしていたが、今はもうしない。

「レディットが悪いのよ・・・」

部屋の隅でポツリと呟くがそれも空しい。

この気持ちを解消するには誰かに相談するよりないと考え、電話を手取る。

とはいっても知っている電話番号は二つ。

ひとつはレディットの番号。

二つ目はフォーゲルの携帯番号。もちろんこちらを入力する。

「もしもし・・・」

「私です・・・」

『え?』 ドアを開け閉めする一拍の後、フォーゲルが小声で話し始める。『もしもし、ミヤビ君か? 今どこだい?』

「レディットの部屋・・・」

話しているうちに、フォーゲルもミヤビのテンションの低さを察したらしく、問い詰められる。

『・・・何かあったのかい?』

「レディットと喧嘩をしちゃって・・・」

正確にはただ自分が腹を立てているだけなのだが、人のせいになければやっていられない。

とりあえず今日学園であつた事をアレンジしながら話すと、「レディットと二人が気まずいなら・・・」と、フォーゲルはどうやら部屋に招いてくれるらしい。

「本当に?」

『ああ。女子寮の4階、12号室だ。鍵はかかっているけどすぐに戻るからまっていてくれないか。』

「はい……」

支度を終え、部屋を出ようとすると一つだけ心残りが生まれる。それはレディットにメモを残していったほうがいいのではないだろうか。というもの。

こつちが一方的に腹を立てているだけの状況。何も残さずにレディットが部屋に帰ってきたら、優しい彼は、きっと心配して外に探しに言ってしまうのではないかと思った。

迷った結果、ミヤビ一言メッセージを残して部屋を出た。

レディットは少しだけ疲れていた。

ニーナとのやり取りによって生まれた新たな疑問。その場でなぜかミヤビが怒ってしまい、人の感情を汲み取るのが得意ではないレディットは、原因不明のミヤビの怒りに翻弄されていた。

一日にたくさんの問題を抱えすぎたのか、寄宿舎に帰る途中から足取りが重くなる。

だるい体を引きずり、部屋に帰るとドアノブに手をかけるのを戸惑う。

ミヤビになんていえばいいのかわからなかった。

ミヤビの怒りは何なのだろうか分からないので何を謝ればいいのかも分からないし、ギスギスしたままこの後生活を送るのかと思うとそれは辛い。

寄宿舎は満室らしく、ミヤビの部屋は作れないとリースも言っていた。

迷っていても仕方ないと覚悟を決め、ドアを開ける。

「え？」

部屋には誰もいなかった。

いつもどおりの部屋は最初より物は増えたのに、何かが足りない。見渡すとレディットの机の上、いなくなったミヤビの変わりに白い紙がおかれている。

「……」

気になって開いてみると、思ったよりも分は短く、拙い字で一言。

「今日はフォーゲルの部屋に泊まります。」

と書いてあった。

先ほどのフォーゲルの電話の意味を理解したところで、気づく。

薄くて読み取れないが、その文の後に一回書いて消したような後がある。

何かと思つて擦りだしてみると、レディットは少し笑ってしまう。

「ゴメンネ。」

そう書いてあるように読めたのだ。

それと同時に視界が歪む。眩暈もする。こんな感覚はまだ夢交換したての頃みたいだ。

レディットは安心感と共にベッドに倒れこんだ。

「待たせたね。」

ミヤビが部屋の前で待っていると、ようやくフォーゲルが帰ってくる。

「すみません・・・」

「気にしないでくれ。ミヤビ君と話すいい機会だしね。」

そういいながらドアを開けて部屋にミヤビを招き入れる。

少しだけ意外だったのは、中性的な口調とは違い、部屋の中はピンクやオレンジ、黄色などで作られていて、女の子らしかった。

しかし所々ウマの置物だったり、変な壺など高級そうながらも謎の物体はあったが。

レディットの部屋は色味に欠けるモノトーンばかりなので、新鮮だ。

「とりあえずかけてくれ。ミヤビ君、紅茶は飲めるだろう？」

そういうとフォーゲルはポットに火をつける。そしてこれまた高級そうな紅茶である。とうとうフォーゲルの私生活が謎になっていく。

「さて・・・お待たせ。」

空気をかえるように一声かけると、テーブルの上に紅茶を置く。「

「おおかた仲直りの仕方を知らないんだろう？君も。レディット君も。」

心の中でギクリと音がする。話を振り出す前からばれていたようだ。「君はごまかすのが下手だな。声色と状況ですぐ分かったよ。」

「……………」
分かっていた上で今ここにいると思うと、よりいっそう恥ずかしくなる。

「まあ、恥ずかしがる事でもない。君は外の世界に接してこなかったんだし」

「でもそれだけじゃ……………」
そこまで言うためになってしまう。今のこの気持ちをミヤビはうまく形容できなかった。

「どうした？」
また分かりやすい顔をしてしまっていたのか、フォーゲルに悟られる。

とりあえず自分の表せる範疇で説明を試みる。

「実は……………味わった事のない気持ちなんです。今日学園でレディットが女の人に乗っかられてて、それを見た瞬間、なんていうか……………いやな気持ちになったというか、それが原因でケンカを……………」

「ふむ……………」
そんなミヤビの、曖昧かつ抽象的な表現でも、フォーゲルは何かを理解したようだ。

少し考え込むような表情をすると、紅茶を啜りながら語り始める。

「私も昔の記憶はないんだ……………」

全く関係のない話であり、最初は何の告白かと思ったが一拍おいてその意味を理解する。

「ええ！？」

「まあ、もつと小さい頃だな。たしか10歳ごろだったと思う。親に捨てられたのか、人質にでも取られていたのか、今となってもわからないけどね。」

「……………」

今でさえ結構何事も気にしないような性格なのに、暗い過去を背負っていたとも思えないし、なにより今こうして話しているのは、開き直っているように見えた。

「親の顔も分からない身元不明の私を拾ってくれたのは支部長だった。それで私に力があると分かるなり、特務班を作って私を受け入れてくれたんだ。」

ユレイダの優しさと行動力にミヤビは感嘆する。しかし同時に、ユレイダと顔を合わせたときのような懐かしい感覚がする。

そう。それはまるでユレイダが

「まあ、つまり私もここに来るまで君と同じ様な事があった。でも、分からない事を分からないまままで終わらせるのも良くないだろう？ 私から言えることは唯一つ。」

フォーゲルは一息飲み込む。ミヤビも生唾がのどを通り過ぎる。

「それは、君がレディット君を大切に思っているが故の『嫉妬』という感情だ。」

「嫉妬？」

言葉として基礎知識だけはなぜかしっていた。独占欲の一種であるとか。

ただそれも状況順ずるものの以上、その言葉に意味はないだろう。それよりも自分が言われて初めて「レディットを大切に思っている」と気づくと、体が熱くなる。

「言葉の意味なんて重要じゃない。大切なのは君自身が君の心にどう順ずるか、だよ」

その言葉を聞いた瞬間、胸に何かが突き刺さる。

まるでミヤビは自分自身何がしたかったのか分かったような、それでも何かによってそれは縛り付けられているような感じがした。

「君は今、どうしたい？」

「……うん！私レディットに謝ってみる！！」

フォーゲルに最後の一押しを受けたかのようにミヤビは立ち上がる。

「大丈夫。レディット君もきつと分かってくれるさ。」

それだけ聞くと、ミヤビは勢いよく部屋を飛び出した。全速力で廊下を走るが、学園から走ってきたときのような息切れなどは全くなかった。

むしろ体は軽く、何にウキウキしているのか自分でも分からない。

「レディット！あ・・・の・・・」

勢いよくドアを開け中に入るが、なぜか帰ってきているはずなのに鍵が開いている。

レディットは普段から恐ろしく用心深く、鍵をかけることを欠かさなかった。

少し気を引き締めながら、部屋に入ると、レディットが机に突っ伏している。

「ねえ、レディット。」

今すぐ謝りたいミヤビが肩に触れた瞬間。「熱ッ！！」

レディットの全身が触ると身を引いてしまうほど、体温が高い。

「なに・・・これ・・・」

頭が回らなくなる。今まで意気揚々と仲直りするつもりでここまで来たのに、目の前の相手が今、なぜか倒れている。

）

レディットの携帯が不意に鳴り、そこで意識を引きずり戻されるとりあえず電話に出てみる。

「もしもし？」

『その声・・・ミヤビか？』

「え？ロゼットさん！？」

声の主は以外にも、一番無口で話す機会の少ないロゼットだった。レディットと話しているところもほとんど見ない。

『なぜお前がレディットの電話に？』

「大変なんです！！レディットが！レディットが！」

非常事態（？）の救いの手に思わず取り乱し、早口になる。

『落ち着け。何があった？』

「あのレディットの・・・体温がメチャクチャ高いんです！汗も出ていて・・・全然起きないんです！」

『それはおそろくただの風邪だろう。タオルを冷やしてわきの下に挟ませろ。まず服を着替えさせて汗をふき取るんだ。今介抱できるお前が取り乱すなよ。俺はいけないがお前でもやれるはずだ。体温は免疫力の促進の表れだから問題ない。仕事を休まれちゃ困るからな。早めに直すように言っとけ。』

それだけ告げると、ロゼットは余韻もなくきってしまった。

一気に説明を受け何が何だかわからなくなりそうだった。それでも事細かく分かりやすい説明をしてくれたし、何より最後にねぎらいの言葉が入っていたのは感動した。

とりあえず今言われた事を全部やってみるが、服を脱がしたりするのは恥ずかしく、思わず適当になってしまった。

適当な介抱で良いのかと思いつつも、結局謝れないままミヤビは眠りについた。

ミヤビの嫉妬2（後書き）

申し訳ございません。遅くなりましたのお久しぶり、レイです。
まったり不定期更新の悪いところが出てしまいました。
すみません。

これからも精進が必要ですな。
それでは次回も。

y
レイ

b

過去のかげら

「・・・ドー・・・、リドー・・・」

誰かが、誰かの名前を呼んでいる気がする。とても温かくて、優しい調が耳に響く。

虚ろな意識の中で、ミヤビは目を覚ました。

周りは見えない景色覆われている。それなのに、懐かしい感覚がする。覚えていないだけのよう、忘れていてだけのよう。そんな感覚がミヤビの脳裏をうごめいている。

気づけば、ありえない俯瞰の景色と浮遊感。初めてではないこのリアルすぎる夢。これは

「夢交換・・・？」

ミヤビは口からポロリとそう零していた。

以前にもした事があった夢交換。レディットから概要だけ聞いたときは驚いた。夢を交換する、にわかには信じがたい事だった。

あの時、最初の夢交換で、レディットが出てきた見た夢は、目をそらしたくなるような光景だった。

レディットは体のいたるところに傷をつけられ、麻酔もなしにそこから何かを吸い出されていた。耳を塞ぎたくなるような悲鳴は今でもよみがえる。本能に赴くままの夢では、残酷な事を隠してもくれない。

目覚めた後もミヤビはそれを、直接的にレディットに伝える事ができていなかった。

しかし今度は違う。

もつと穏やかな景色。緑に囲まれたところに物静かな一軒の家が建っている。

シェダールとは明らかに違う建築法の家。文化の違いが顕著に現れているようだが、ミヤビは思い出せない。これはどこの国の物で、自分とどういうかわりがあるのか。

だがその家にある物すべての名前を、ミヤビはなぜ知っている。縁側と呼ばれる、地面から50センチ程高い腰掛式のテラス。扉は木でできた骨組みに、紙が張ってある。たしか障子というやつだ。屋根に貼られているのは、特殊な石で出来た瓦というやつだ。

それらから他の物まで、すべての物の用途や名称が手にとるようにミヤビには分かる。

「……リドー……」

ボーっとながらふと耳を澄ますと、さっき聞こえた声がまた聞こえる。

草木を掻き分け、声のしたほうに歩いていくと、稲穂と稲穂の間に出来た空間に一本の気があり、女性が木陰に座って子供を膝枕している。

女性はミヤビと同じ、吸い込まれる様な闇色の髪と瞳。優しそうな表情は一度見たものの眼をひきつけて離さないほど、神々しく、美しい顔をしている。

だがそんな女性よりもミヤビの目をひきつけたのは、膝枕されている少年のほうである。顔立ちこそ母親と似ている物の、その女性と親子とは思えない、すべてを反射するかのようなアッシュブロンドをしている。

そう。見覚えのあるアッシュブロンドと緋色の瞳。

「レディット……?」

それはさっきまでミヤビが看病していた彼そのものだった。が、まだ幼さが残っているし、なにより名前が違う。

母親と思しき人物が何回か呼びかけるうち、レディット(?)は眠そうながらも目を覚ます。

一人で生きてきたという今のレディットの姿とはまるで正反対である。

「おはよう利道。よく眠れた?」

「うん……」

利道。母親は確かにそう呼んでいる。違う人物と考え

て良いほどの名前。しかし容姿は別人とは思えないほど似ている。ミヤビの頭の中はいろんな情報が入り乱れ、混乱していた。

それこそ、わずかながらの知っている人間像が、音を立てて崩れているようにしているのだから。

何か、夢交換で見る夢は、リアルで、現実味を帯びていて、この前るときもレディットのリアクションは、思い出したくもない過去を掘り返されているような顔をしていたので、ミヤビは胸が痛くなるのを感じていた。

真実であるかないかは別として、普通に見ればただの仲のいい親子だった。

だがレディットは全く過去の話したがないので、これが事実かどうかはわからない。

「さあ利道、家に帰るわよ。」

「え？でもお父さんは？帰ってくるんでしょ？」

利道がそういった瞬間、母親は一瞬困ったような表情をする。何か深い事情があるのだろうか。

「うーん・・・わからないわ。お父さん仕事があるもの。さあ、行きましょう。」

母親が利道の両の手を取り、少しだけ悲しげに家へと入ろうとするその瞬間。ミヤビはともいやかな予感がする。見上げると一機の飛行機が頭上を飛んでいる。その飛行機からとんでもないいやな予感がする。まるでどの奥に何かが這いずり回っているようで、ミヤビの鳥肌が一齐に立つ。

親子に知らせようとするが、今回もまた干渉する事ができないように、伝わらない。

そして案の定、悪い予感が当たり飛行機から何かが投下される。突き抜ける蒼穹に放たれた一つ鈍色その何かがまばゆい光を放ったとき、急に意識が夢から離れて。

「・・・あ・・・」

レディットは目が覚めると同時に腹部に重みを感じる。

視線をずらすと、そこにはミヤビが座って寝ている。寝返りを打っていないのか、一晩中同じ体勢でいたせいで顔に跡がついて大変な事になっている。

見れば、服は着替えさせられていて、わきの下には、濡れたタオルが挟まれていた。

昨日までブイ！とそっぽを向いて怒っていて、部屋にも帰ってきていなかったのに、看病してくれた事を考えると、レディットは目頭が熱くなるのを感じた。

そのおかげか、昨日まであった気だるさや眩暈は全く残っていない。ただ、レディットは今日も夢を見た。今のこの状況から夢交換なのだろうと推測する。

今回の夢では、ミヤビが幼少期の頃の夢だった。日本式の神社のようだった。うだが内容が把握しきれなかった。

「起きたの・・・？」

起こしては悪いかと思い、そのままの寝ていると、やっとミヤビも目を覚ます。

下になっていた顔の左側だけ、見事なまでに寝癖が立ってしまっている。

「ああ、ありがとくな、ミヤビ。看病してくれたんだろう？」

レディットが素直に感謝を述べると、ミヤビは何かを思い出したかのように顔を真っ赤にする。

「で、でも私は・・・」

そこまで言ってミヤビはレディットの顔を一瞥してから「なんでもない！シャワー浴びてくる！！」

ベッドの横から跳ね起きると勢いよくバスルームに入り、ドアが壊れんばかりに激しく閉めた。

「何だっけ言うんだ・・・」

仲直りをしたと思ったらまた怒ってしまう。オトメゴコロという奴は分かりにくい。

その後レディットがとりあえず朝ごはんを作っていると、バスルームのほうから鼻歌が聞こえたような気もした。

学園生活も、慣れればそれまでで転校生フィーバーは終わりで、まだ2日目なのにとと思うと少し短い気もしなくはなかった。

普通の授業などそこそのレディットにとってはどうでもいいものだ。

たとえ就職難や不景気でもすでに職場はあるというのは学歴を求めなくて良いので気が楽だった。

問題は学園祭についての事である。

リースの話もほとんど頼りにならない（していない）ので、少し恐怖があった。

いよいよラウンジに移動し、委員長を中心に円を書くように座る。

「さて、今日の議題は皆さんお待ちかね学園祭についてです。」

委員長がそういった瞬間。みんな分かっていたはずなのに、喜ぶような声もあれば、「また来るのか!」みたいな顔をしている声も混ざっている。

いいイベントなのか、悪いイベントなのかすら怪しくなってきた。

「まあまあ、みんな落ち着いて。」一旦委員長がみんなを制止する。

「今回もとりあえず基盤は男女逆転祭で行くとして……」

「はああああああああああ!」

ついに委員長もおかしくなったのか、ここに常識はないのか、とにかく不穏な一言が聞こえたため、レディットは思わず声を大にしよう。

「あれ?そうか。レディット君とミヤビちゃんは初めてなんだよね。説明を忘れていたよ」

得に悪びれる様子も、レディットの反応に驚くような事もない。何事もなかったかのように、当たり前でない事を当たり前のように説明しようとする……つまりレディットが推測するに、常識の裏の裏を言った超非常識人となるだろう。だがそんな変わり者の集まり

を見るのが初めてでないのが悲しかった。

「・・・えっと、ここの学園祭というのは基本形態として、当日は男女が逆転して行っただよ」

「服装や・・・口調とか、仕草も・・・？」

「オフコース!!」

さす後にそれはないだろうと、レディットが恐る恐るした質問も「当たり前じゃん」見たいな雰囲気で流される。これについてはさすがにミヤビも驚いているようで、声は発せないものの、やや額から汗がにじみ出ている。

ここではレディットとミヤビ以外が常識だと思い知らされる。

「問題はクラスごとの出し物です。去年は無難に喫茶店でしたが、今年はどうしましょうか？」

男女逆転喫茶・・・ギリギリセーフなのかもしれないが、レディットはアウトな気がしてたまらない。

そもそも気持ちが悪くて需要があるのかどうかから疑問だし、こんな学園祭に本当に人が集まるのかがレディットには心配だった。

ただそれよりも重大なもんだが一つ。

レディット

は女装だけはごめんだった。

そんな心配など2人以外誰もしていないのか、さつき文句を言っていた生徒も楽しそうに話し合いに参加している。

「はい！案が出揃いました!!!？創作劇？水着喫茶？屋外模擬

店です！！とりあえず拳手制の多数決で決めて、意見がある人はその後で申し出てください。」

委員長がそういうと、またみんな各々で話し合いを始める。

どれか選ばなければいけないと割り切り、レディットはいつもの癖でまずデメリットを探す事にした。

まず・・・自分が大役に抜擢されたあかつきには、もう最悪である。講堂でたくさんの人に見られ、辱めを受ける事になる。

次に・・・まず格好が恥ずかしすぎる。女子は何かしらの配慮があるだろうが、男子にいたっては一部の特殊な人間以外恥ずかしさ

で憤死するだろう。

最後に？・・・外という時点でアウトである。もはや来場者全員に見られることを覚悟しなくてはいけない。

どの選択肢も男女逆転祭である以上、最悪の結果となる気がレディットはしてならなかった。

「ミヤビ・・・君はどれにすんの・・・？」

レディットは自分だけで真剣に考えていると、ただのヘンタイサンになりかねない事に気づき、とりあえずミヤビに相談してみる。

「分かんないよ・・・でも、やるなら？か・・・な？」

やはり予想通りの結果にひざを落とす。女子にとってはこれが一番ましな意見だし、妥当だろう。

女子のほうが多いこのクラスで意見が割れる事も考えると、確実に？になるだろう。

「ルツカは！？」

藁にもすがる思いで、同意見の人を求めとりあえずルツカに聞いてみる。

「私は？ね。男子の女子水着なんて誰に需要があるのか分からないし、みんなこれが一番困らないと思うしね。まあ、レディットの場合・・・」

「やめてくれ」

遮りつつも、レディットは心の中で大きくガッツポーズを決める。レディットも同意見だったからだ。

劇なら、裏方に回るという事も可能なので一番の安全策がとれる。

「はい、そこまで。一人一回だけ手を挙げてください。」

レディットはこめかみに汗が流れるのを感じながら、ゴクリとつばを飲み込む。

「まず、劇がいいと思う人！！」

全力の祈りを込めながらレディットは手を挙げる。

だが周りを見渡してみると、手を挙げているのはレディットをあわせ9人ほど。全部で30人のこのクラスで半分取れないと厳しい。

「はい。10人ですね。じゃあ水着喫茶がいいと思う人!!」

(終わった……)

女子の票が集まりそうな水着喫茶で決まりだろうとレディットが諦めかけて、顔を伏せた瞬間。

「はい。4人ですね。じゃあ模擬店がいいと思う人!!」

「え……?」

4人。レディットは一瞬自分の耳を疑ったが、確かに今委員長はそうだった。

数瞬の激動が頭の中を駆け巡り、すべての脳細胞を使って、やっと今の数字の意味を理解する。

しかしレディットはガッツポーズが出来なかった。そう、これがダメだったという事は模擬店になってしまうのだから。

結局どちらに転んでも悪い結果にしかならないと、レディットは踏みついてもどれだけ模擬店をやりたいと言い出す人間がいるのかとoriaえず見てみる。

が、そこで手を挙げている物は一人もいなかった。

「はい。0人ですね。後の人はどうでも言いという事で。じゃあ今年は創作劇にしましょう!!」

「はあああああ!!?」

『そんな選択肢もあったの!?』というミヤビとレディットの驚きを見事なまでのスルースキルで流して、そこかしこからパチパチと中途半端な拍手が起こる。

クラスの半分以上の人間がどうでもいいと選ぶとは正直驚き、呆れた。

「じゃあ、明日オーディションをします。実際に衣装を着るヴィジュアル審査と、演技審査をやるので、みんな気合を入れて化粧でもしてきてください。推薦がある人は僕のところまで持ってきてください。ちなみに全員強制参加です」

そう言うのと解散になり、みんなラウンジから出て行ってしまう。

「……………どうしよう……………」

（実際に衣装を着るといふ事は、まさか・・・女装・・・？）

そう考えると頭が痛くなる。

「どうしたの？」

レディットの様子に気づいたのか、ミヤビが心配そうに見ている。頭の中に浮かんでくる最悪の構図を振り払い、レディットもラウンジを出た。

「ただいま戻りました・・・」

「おかえり・・・どしたの？」

ギルドに戻ってもレディットのテンションは上がらず、リースにまで気を使わせてしまう。

レディットは姉妹が学園にいらんだから何とかできるのではないかと期待し、リースに相談してみる。

「あの・・・明日男女逆転劇のオーディションをするんですけど、女装って絶対しなくちゃ駄目なんですかね？できる事ならしたくないんですけど・・・」

「うーん・・・ニーナのお目にかければ大丈夫だと思うけど、レディット君が似合ってたなら、それこそ無理やり主役にさせられるわよ。とりあえず明日次第ね。私から言ってみるけど、似合ってたなら諦めて。」

アドバイスが全部自分次第だということにレディットは気づき、肩を落とす。

「ごめんね。あの子わがままだから。あ、それより・・・カーリーさんから手紙が届いてたわ。アナログもご苦労さんね。」

レディット自身すっかり忘れていたが、調べてくれる事になった。たはずだった。

とは言っても何をするのかとかは知らないんで、とりあえず手紙に目を通す。

『明日準備が出来たのでそちらに向かう。ユレイダには許可を取つてあるのであしからず。』

たったそれだけの短いメッセージを、わざわざ速達の手紙で出す必要があったのか疑問だが、これにより色々な謎が解けるならレディットに文句はなかった。

「ねえ、何でレディットはそんなに女装がいやなの？」

唐突だが、いかにも不思議そうにミヤビが聞いてくる。世間体言うところの女装をしている人の立場が分かっているらしい。別に悪い事ではないのだが、レディットの場合。

「それは・・・母親の影響なんだ・・・」

「・・・・・・・・・・！」

レディットが「母親」という言葉を口にした瞬間、ミヤビが異常なまでに反応する。

「うちの親は優しくったんだが趣味が特殊で・・・アルバム写真とか撮るときは全部僕に女物の服を着せていたんだ。それ以来その写真を見返すとトラウマで・・・」

自分で言っていて恥ずかしくなってくる。なぜ話してしまったんだろうか。

ルツカもその写真を見ていたため、ラウンジでルツカが口を滑らせたとき、レディットは遮ったのだ。

とにかく明日に起こる二つのイベントへの、期待と心配を抱きながらレディットは仕事に出た。

過去のかけら（後書き）

どうも。レイです。

今回は文字多めかつ視点切り替えややこしくてごめんなさい。
やっとレディットの過去に触れ始める事ができました。

それと、近いうちにでもキャラ紹介でも投稿したいです。
それでは、次回もまた。

b
y
レイ

知るべき事と知りたい事

「どうしてこうなった・・・」

レディットは思わず深い深いため息をついてしまふ。

「どうしたギルバーツ？悩み事でもあるのか？」

クラスの別の男子は、これから女装をしなくてはならないというのに、みんな乗り気である。

クラス単位でやるはずだったオーディションも、今は予定を変更して全校生徒の前で行われていた。

それは昨日リースにお願いしたニーナへのお願い

確

かにどうせ見せる事にはなっていたのだが、どうやらそれを聞いたニーナは生徒会長の権利を使い、このようなイベントに発展させたのであった。もうただの職権乱用である。

「いや・・・なぜこんな事に・・・」

「諦める。会長の決めた事だし、良いじゃないか。己の美貌をアピールするチャンスだし、美人の会長も身にかけていることだし」

ニーナは確かに、リースの妹と言うこともあつて美人ではある。ただし性格をのぞけばのことだが。

ただこれも、大舞台で醜態をさらすのを避けるためだと割り切り、仕方なく更衣室に入る。それと同時にレディットはピシリと体を固まらせてしまふ。

「おいおい・・・どういうことだ？・・・」

更衣室のハンガーにかけられているのはすべてドレスだった。それも安物などではなく本当の高級シルクで、まるで新調させたようにキレイだ。

レディットはもっと『村の住人』とか『召使い』とか地味なのを想像していただけに、金持ち学校の洗礼を受けたような気分だった。みんなは当たり前のようにドレスを選んでいる。気合を入れて化粧などしている者もいた。

「仕方ないか……」

不服も不服だったが、ここで退いたら逆に本気にされるのではないかと思い、適当にかけてあった水色のドレスを着て、ティアラをつけてステージ裏に並んだ。

「お前……メチャクチャ本気じゃん!!」

「そんなわけないだろ……」

皆一様にレディットのことを褒めるが、乗り気でもないので嬉しくもない。

「それではこれから、文化祭2・3の創作劇『紅きノアルの奔走』のオーディションを開催します。まず始めにヒロインである、リヨードリア王女のオーディションです。それでは1〜5番の方どうぞ!!」

ルツカによると一日で設定、脚本、監督などすべて決められたらしい。行動力だけは一級品である。

無機質な録音音声と共に、破滅の道へと最初の五人の勇者が出て行った。

レディットは批判を受けたり笑われている人間を見続けることも出来ず、思わず目を伏せる。が、レディットの予想とは違い、ギャラリイからは歓喜の拍手喝采が湧き上がる。

ステージ上のクラスメイトは各々に自慢のポーズをとっている。女装をしているから良いものの、上半身裸ならばただの中途半端なボディービルになってしまう。

「はい!審査は全員が出てからという事で。では次の方どうぞ!!」

「あゝ、緊張したわ!!」

そんな事を言いながら1番目の5人が帰ってくる。そしてレディットの目の前の5人が行ってしまった。

これまた大喝采。ギャラリイは何でも良いのかとレディットは不思議に思えてくる。

レディットは強いプレッシャーに押しつぶされそうになる。今心電図でもつけたら振り切れてしまうのではと思えるほどに。

「ありがとうございました！！それでは次の方どうぞ！！」

ついに呼ばれる。だがなりやまない拍手を聞くと、脳内麻薬のエンドルフィンやらなにやらがスパークしてしまつて恥ずかしさがレディットの中から消えた。

（やるならとことんやる！！）

そう覚悟しステージに勢いよく上がると今まで沸きあがっていたギヤラリーがしずまり、ザワザワとし始める。

皆一様にレディットを見ては、隣の人とこそ何か囁いている。さすがに適当にやりすぎたかと心配になり、客席をグルリと一周見渡す。

二階席でニーナを見つけるが、なにやら嫌な笑みを浮かべている。

「えっと・・・じゃあ皆さんで自己紹介と共に、ウィッグをとっていただけますか？」

なにやら司会者も何かぎこちない喋り方をする。

「えっと、僕は・・・」

気になるがとりあえず早く終わつてほしいレディットは、後ろ髪に付けていた髪が伸びたように見えるヘアピースを取る。

それと同時に今日一番の歓声が湧き上がり、講堂が潰れるのではないのかと思うほどビリビリと響く。

驚きと興奮に満ち溢れた観客の叫びに思わず一步退いてしまう。

「みなさん！驚きです！感動です！本当に男性でした！！」

「・・・な！！」

司会者まで興奮して、みんなを落ち着ける職務を放棄している。

というか自分が今までここまで本気で女性に間違えられた事にレディットはおどろいた。そして化粧もしてないし演技して作っているわけでもないのに、間違えられるのは本気でショックだった。

再び2階席のニーナを見ると親指を真っ直ぐに立て、満面の笑みを浮かべている。

1階にいるルツカも『成長したな・・・』みたいな感嘆の表情でこちらを見ている。

「まじで？」

「コホン。それではありがとうございました」

司会者も仕事を思いだしたようで、咳払いをしてから仕切りなおす。ステージから降りたところで、レディットは「終わった・・・」とポツリと呟いた。

退場しなければ、危うくレディットはステージ上でひざをつき、絶望を嘆くところだった。

「お前本当に男かよ!？」

クラスメイトが歓声を聞いてか改めて茶化してくる。

だがそんな悪ふざけすらも、レディットの『ニーナのお眼鏡から外れる』という任務を見事に失敗した絶望の闇を晴らす事はできない。完全に気にいられた。

「これで全員ですね。それでは生徒会長、学園長及び先生方の投票でヒロイン役となる生徒を決めるので少々お待ちください」

ついにきてしまった。学園長すらも動かしているだろうニーナが牛耳っているも当然のこの学校で、票が割れるわけもない。

今思えば最初からあのエルモンド姉妹に振り回されていただけなのかもしれない。ニーナの表情は何か確信と理念でもあるかのような表情で、あれは最初からリリースが期待するような一言を吹き込んだ物なら説明がつく。

審査員が話し合っている振りをしている。「こんな出来レースに意味はあるのだろうか」と内心イラつきつつも、0・1%以下に等しい外れの確立を必死に願う。

「それでは発表しますので、出場者の皆さんはステージ上に並んでください」

恥ずかしさで憤死寸前だが、力が抜けている体をクラスメイトに無理やり引つ張られながら今一度ステージに上がると、「やっぱり女性にしか見えない!!」とか、「実は趣味だったり?」とか両の手で耳を覆いたくなるようなガヤが聞こえる。

「それでは発表します。グランプリを勝ち取り、見事リョーデリア

役を射止めたのは・・・」「しえのカウントダウンでも奏でているかのように、軽快なドラムロールが響く「・・・レディット君です！！」

（ああ・・・ああ・・・終わった。）

当たり前の出来事でもあるかのような拍手の中レディットの血糖値は見る見る内に下がって、ニーナをにらむ暇もなくその場に膝を着いてしまった。

「いや、最高のショーだったよ。姉さんの言ったとおりだったわ」
盛大なイベントのため授業は丸つぶれになり、『暇なんだたら・・・』と生徒会室にミヤビと一緒に引っぱられてきた。

ミヤビは適当に架空の事情をつけ、演技は無理と裏方に回してもらったものの、ヒロイン役なんて今考えうる最悪の結果だった。

リョーデリア用の台本をさっきもらって目を通してみると、恥ずかしい台詞が分厚くまとめられていた。

「ほんと可愛かったよ！！」

「本当にやめてくれ。トラウマになる・・・」

ついにはミヤビまでも褒めてくる。

「だけどいくらイヤでも本番でも適当にやってこの学校の名前を地の底に落としたら許されないわよ」

「わかってますって」

文化祭前にここをリースが薦めてきた理由がなんとなく分かった気がする。

ヒロインが何かやらかさすわけにも、仕事をおろそかにして生活を苦しくするわけにも行かないという、バランス取りの難易度の高い天秤にレディットは乗せられていた。

悩みの種の解決策を椅子に乗ってふんぞり返りながら考えていると、不意にニーナが、何かを思い出したように言う。

「そつえばさっき姉さんから電話が入って、ナント力っていう研究員っぽい人が何かの要件できたってさ。で、何時だかに来てくれ

ってさ」

不明瞭な点が多すぎてビックリだったが、昨日いつていたカーリーがついにきたのだろう。

「ほんとですか！？ミヤビ、行くぞ！！」

準備だの言って結局すっぱかされていたので、レディットはミヤビの手をつかみ、生徒会室を出た。

「戻りました！！」

「おかえり」。カーリーさん来てるよ」

時刻があっているのか分からなかったが、カーリーは部屋の隅の椅子に腰掛けてカーヒーを音を立てながら囁っていた。

「またせたな。用意は出来ているから早速向かうか・・・おっと」
そう言って立ち上がるが、すぐに倒れてしまう。

「大丈夫ですか！？」

立ちくらみでもしたのかとレディットが起こすとその目の下には、黒い絵の具でも無理やり塗りつけたの如く、くっきりとくまが浮いてしまっている。

カーヒーのカフェインもあまり効いていないようで、フラフラと立ち上がると、何度も壁に頭を打ちつけながらなんとか部屋を出た。

「どこにいくんですか？」

「支部長室に実験器具を運び込んだ。そこまで大袈裟な物ではないから安心してくれ」

そういいながらカーリーは支部長室のドアをノックもせずにあけると、真っ白なカーテンの引いてある支部長室にかズカズカと入っていった。

「よくきたね」

「あ、支部ちょ・・・」

挨拶をせねばと振り向いたところでレディットの体は固まる。ミヤビも右に同じ反応を見せる。

二人が驚いたのはユレイダの格好だった。ここは仮にも職場。とに

かく制服やギルドの服を着ているならまだ分からなくもない。それが当たり前のことである。

「そ、それは・・・」

少しだけピンクがかった白衣にハイソックスをはいて、手には何か怪しげなカルテをもっている。

そう　　俗に言うナースさん。看護師さんだった。

「どうかね？まだまだいけるのではないかと思うのだが？」

そう言つてユレイダは身を翻す。確かにイケイケといえはイケイケなのかも知れないが、ショックのほうが大きかった。初対面の印象は完璧な女性だったのに、こんな大ボケをつつ込んでくるとはレディットの予想外すぎた。

「それよりもその格好のチョイスは・・・」

すばやくカーリーがつつ込む。さすが昔からの知り合いだけあつて、ユレイダのおかしなところもたくさん見ているのだろう。

だが言いかけたところで無駄を把握したのか、スルーする。レディットもそれに便乗した。

「このカーテンは何なんですか？」

気になりすぎる白衣を視界の外に追いやりながら、とりあえずではあるが質問をかます。

「身体検査だぞ。裸にもなるのだが、君はミヤビ君の裸体に興味でもあるのかね？」

「ッ!？」

不覚。ユレイダの一言に隣のミヤビが顔を真っ赤にしているのを見て、自分の質問の無神経さに気づく。

「ご、ごめんなさい。そういう意味ではないですっ!」

無邪気は危険と紙一重。レディットはそう自分の辞書に新たな1ページを加えると、とにかく謝った。

「じゃあ始めようかね」

少し恥じらいと不信感を持った表情のまま、ミヤビはカーテンの中に入ってしまった。

「そちらも終わったようだね」

ユレイダがコキコキと肩をならしながらいう。

身体検査とは名ばかりで、学校のように身長だの体重などは一切測らなかった。

体中にいろんなパッドのような物を付けられ、その状態で炎を出せだの、逆立ちを出来る限りやれだの、結局二人の関係がどうのこうの言ってた割にはミヤビと一緒ににはなにもやらなかった。

「結果って出たんですか？」

「結果は出たが解析と考察にはまだ時間がかかるな。1週間程度で上がるだろうからまっていてくれ。」

「そうですか・・・」

待たされ焦らされやつと検査までこぎつけたのに、また待たされるのだと考えると少し残念だった。

ミヤビにはこの検査の本意は知らせていないため、彼女自身は呑気なものであった。

「ありがとうございました」

夢交換について、やめるやめないではなくただ単に知っておきたかったレディットの気持ちはまた置き去りにされた。

「で、実際のところどうだったんだ？」

二人が出て行った後ユレイダは静かな声でカーリーに聞いたです。

「まあ、お前をごまかすのはムリだろうな・・・」

カーリーはぼさぼさの頭をかきむしりながらめんどくさそうに答える。「大体分かったよ。あいつら二人の能力は

同じ物だ。オリジナルはレディットのほうだろう。ただし、理由や過去背景はお前のほうで調べてくれよ。決め付けるには早いかもしれないがもしかしたら利用できる」

ユレイダは内心あまり驚かなかった。それで今までの出来事すべてにつじつまが合う。過去も現在も何もかも。

それよりも問題だったのは

「それなんだが・・・」

クレイダが口を開きかけた瞬間。狙いすましたかのようにデスクの上の電話が鳴る。

少しだけため息をつきつつも電話に出ると、その声に「ちょうどいい」と思わず声を上げる。

「私たちの協力人だ。拡声モードにして聞かせてもかまわないだろう？」

クレイダが質問すると、油断大敵がモットーのカーリーは声は出さずに首だけ振って首肯する。

それだけ見ると、通話口に向かって喋りかける。

「報告をよろしく」

『あいつらは今無事に部屋に着いた。レディットは腑に落ちない顔をしていたが怪しい動きも何もなかったから心配は要らない』

正直信用し切れていないようだったが、カーリーはその声に聞き覚えがあったようで、少しだけ首をかしげている。

「ありがとう。私の方の成果については・・・正直言うとなさっぱりだ。ずっと調べているが何も出てこないよ。共通点だけで言うとな人も昔は二ホンという国にいた、という事だけだね」

そのときクレイダの脳内にある事件が浮かんた。そしてそれと同時にカーリーの動いていた指が一瞬動きを止める。

クレイダは静かに流し目で確認すると、話を続ける。

「この共通点も気にした方がいいのだろうがなんせレディット君の方は情報が少なすぎる。まあこれから調査はさせてもらおうよ」

『それなりに祈っている。それでは報告を終わる』

「ああ、ありがとう ロゼット君」

カーリーの驚愕と共に電話が切れる。

クレイダはカーリーに「これでわかったかな？」というドアを開け出て行った。

知るべき事と知りたい事（後書き）

どうも！！レイです。

私事ながらこの間友人に「ストーリー進んでる？」といわれてはつとしました。

全体の構想は組めていたのですが、どの話に謎をいれるかを改めて考え直し、ちゃんと完璧に組みました。

グダグダにもサクサクにもならないちょうどいい感じで収めようと努力中です。

プロフィールの方もお暇があれば更新しているかもしれないのでどうぞよろしくです。

それでは次回もまた

レイ

b

テストと濃霧と

「ええ！？中間テスト！？」

学校に通う物として当然のことながら、働いていたレディットはすっかり忘れていた。

右に同じで学校の事は何一つ分かっていない様子のミヤビも、驚いたような顔をしている。

助成金で通わせてもらっているのに、成績が悪いとユレイダに示しがつかないのだ。

「あなたたちね・・・どうするの？」

あきれたような顔でルツカが言う。

昼下がりの屋上で、レディットは悩ましい顔になる。

ここに来てから悩み事が増える一方のような気もしてきた。変人の集まりである特務班、ミヤビとの謎、見事にヒロイン役を射止めてしまった創作劇。

内容は以前よりずっと濃いが、人生的に順調なのか躓いているのかも分からなくなってくる。そしてそれになれてきた自分が悲しい。

「とりあえず勉強しないと・・・参考書とかは？」

「だめ。うちの学校は特殊だから対応してるのが少ない。参考にはならないわ。教科は数学に現国、物理と生物と世界史よ」

レディットが絶望的な顔を見ると、ため息をつきつつルツカは首を横に振る。「私が教えようか？」

「おお！ありが・・・」

そこまで言ったところで一つだけまずい事を思い出す。

それは同棲のことは知れているから良いものの、リースやクレヴァーなど変わり者を一国の王女に見せてはいけないのではないかという、先輩に対しては大分失礼な物だった。

「なにかまずい事でもあるの？」

「ああ・・・いや、僕たちが仕事をやっている間はどうしようかと・

・・・」

「事務所にいるわよ。出勤率低いけどそれでもギルドの一員なんだからね!!」

なぜか緊張して生唾を飲み込みながら聞くと、最悪の答えが返ってくる。

気に入られたなら、ルツカにもレディットにも被害が来る。ルツカの正体がばれるのもそう遠くないだろう。

「ああ、分かった・・・」

レディットはうつむき加減でつぶやいた。「何事ありませんように・・・」

「ん？なんか言った？」

「いや、なんでも」

今日はみんな仕事で出払っていることを、レディットは珍しくも信じていない神に祈ってみた。

「わあゝすっごいじゃない!!」

ルツカもロレント支部との違いに驚いたようで、目をまん丸にして驚いていた。

ルツカが証明証を持っていなかったので門番の人に何とか説明を付けて入ったが、いたるところに興味津々のため、全然進まなかった。荷物を置きに一旦レディットの部屋に戻り、ドアを開けるとたちまちルツカのおせっかい症が全開になる。

「ちよつと！何このつまらない部屋は。一緒に住んでいるミヤビちゃんがかわいそうとは思わないの？」

「人の趣味にケチを付けないでくれよ・・・」

掃除はしているし、特に問題のないはずの部屋にルツカが見出したのは、昔から何も変わらないレディットの無趣味の証であった。

確かにレディットの部屋にあるものは、ミヤビの服やアクセサリーなどの物以外、すべてがお葬式などに持っていても何もいわれなさそうなモノトーンのものばかりだった。

レディットがロレントにすんでいた時代も、なぜかそこにまでケチを付けられていた。

「もつと色身のある物でも飾ったらどうなの？」

「目がチカチカするんだ・・・」

レディットは適当な言い訳を付けさつさと制服を羽織ると、これ以上何も言われないうちに部屋を出た。

「ただいまもどりま・・・した・・・」

忍者の如くゆつくりと音を立てぬように部屋を空けると、幸い静かな特務室には誰もいなかった。

レディットは一つ安堵の息をこぼすと、とりあえず椅子を三つ並べた。

「座つててくれ。今お茶沸かしてくるから」

と薦めても、ルツカはずつと部屋の中をうらやましそうに見つめていた。

まあいいかと思いつつ急須でお茶を沸かし始めると、今更ながら一つだけ違和感に気付く。

いつも閉まっているはずのカーテンと戸棚が少しだけ開いている。そして嫌に日差しが強く入り込んできている。

小さな小さな違和感だったが、お湯が沸いても薄れる事はなく、二人にお茶を出して勉強を始めても集中できない。

「レ・・・ット、ちよつとレディット、聞いてる？」

「ああ・・・ごめん、ちよつとボーつとしてた・・・」

どうも何か気になる。ストーキングされているようだがそれでも近くに気配はない。

「ごめん。ちよつと探し物をするから少しだけ僕抜きでやっていてくれるか？」

「仕方ないわね。早めに済ませなさいよ」

レディットは立ち上がり部屋を見渡す。気になる場所は三つ。

カーテンと戸棚と

そして誰もいないはずの封鎖地

域である屋上。

さつき少しだけ見えたカーテンの向こうで太陽の光ではなく、レンズのような物が光った気がした。

それならばとカーテンを閉め、外からの視覚的介入はシャットダウンしたつもりが、まだなぜかレディットの本能は油断を許さない。

「・・・・・・？」

「レディット、どうかしたの？」

「いや・・・・もう見つかると思うから」

何かと思い、少しだけ開いている戸棚を覗くと、黒くて小さな機械のようなものはいっている。

赤いランプを点滅させているが、カメラもどこにも付いていない。はじめて見る物だが、大体レディットには予想がついてしまった。

盗聴器だ。

とはいえスパイの物かもしれないので一応筆談で二人に伝える。

「え！？そんな！？」

予想通りといえば予想通り、ミヤビは声を出して驚く。

レディットが指を立てて静粛を求めると、やっと筆談の必要性を理解したようだ。

『どうする？』

完全に勉強の手を止めてみんなで筆談会議が始まる。

ミ：『とりあえず外に置いておいたら？』

レ：『それじゃ完全に音が止まったのがばれて怪しまれる。録音テープでもあれば話は別なんだが』

ル：『布でも被せてジャミング感でも出す？』

レ：『それもいい案だがここまで良好な具合だったとしたら、急にジャミングになったという事は気付かれたと勘違いされかねない。

声で男1人女2人だとばれている状況で、相手が大勢なら乗り込んできておかしくないだろう』

侃侃諤諤な議論も、決定打が出ないまま3人とも悩んでしまう。

とりあえず怪しまれないようにちよくちよく適当な会話をしている

と、ミヤビが何かに気付いたような顔をする。

『それなあに？』

紙を示しながら盗聴器と思しき物の裏を指差す。

「……ん？」

裏返してみると、盲点ながら何かシールのような物が貼つてある。

そこには 「リースの私物にて持ち出し禁止

！！」ポップな文字で書かれていた。

「……」

一瞬にして3人の緊張感は消え、同時に怒りが芽生えた。

リースを知らないルツカも、いたずら自体に腹を立てているようだ。

レディットはその盗聴器に一言

「すみませんがこちらでは修理代を払いかねます」

そういうと、レディットは87の握力を集中させ、盗聴器を砕いた。

「ここは三角形の相似を使って、18つでやるから……」

「うゝむ……」

レディットは数学が苦手で、ルツカの説明もさっぱりだった。

「どうして分からないのかしら。ミヤビちゃんなんかすごい飲み込み早いのに」

あきれた顔でルツカが言ってくる。レディットは悔しいが返す言葉もなかった。

ミヤビはなぜかなんでも一発で理解できてしまう。長い時間の記憶がないのによく覚えられる事をレディットは少しうらやましかったが、「純粹だから何でも飲み込めるのだ」と割り切る。

「ちよつと、レディット君……！」

頭を抱え問題を解いていると、リースが悲しそうに声を荒げながら入ってくる。

「どうしたんですか？」

「ちよつと、盗聴器壊しちゃったの？あー、そつちは友達？」

始めの一言を聞いて犯人だと確信したのか、ルツカがピクリと肩を

震わせる。

仲良くなる危険性をここに来る前は考慮していたが、逆の事態になるとまたそれはそれで気まずい。

「レディットの幼馴染のルツカといいます」

「・・・あらそう。よろしくね」

鬼が出るか蛇が出るかの状況下でルツカは以外にも友好的な態度を示す。あまり怒っていないのだろうか。

それもリリースに読まれているのでないかと考えると、レディットは2重のプレッシャーに押しつぶされそうになる。

「レディット、ミヤビちゃん。今日はこれで終わりにして仕事をがんばって。じゃあね」

それだけ言つと、さっきまで勉強勉強言つてたのに帰ってしまう。
・・・やっぱり怒っていた。

結局テストと仕事の両立は難しく、勉強はおろそかもいいところだった。

それでも一夜漬けにと勉強したレディットは、もうくたくただった。だがミヤビはレディットより勉強時間が少ないのに、あさから余裕というかテストの存在を気にしていない表情だった。

「レディット顔色悪いよ？」

レディットの気心も苦労も知らないミヤビも、その無邪気さで憎めない。

ルツカも時々教えてくれたが翌朝には吹っ飛んでいる始末。さすがに呆れ顔だった。

とりあえず寝ずにすべての教科のテストがおわったところだった。

「それれでは成績順にランキング形式で発表いたします」

教師数の多いこの学校では別の教科のテストをやっている最中に、他の教科の採点などすぐに終わってしまうようで、発表が当日にあるのは成績不振のものにとっては精神的ショックになりかねないのではないかとレディットは心配になった。

固唾を飲んで見守る生徒たちの前で、担任の教師が巻物状の紙を広げていく。

と同時に、レディットたち3人に衝撃が走る。学年主席となりうる1位をとっていたのは

「ミヤビ・センドウ 500点」

と書かれていたのだ。500点満点中500点なんてとてもじゃないがレディットには信じられなかった。

「すごいわミヤビちゃん！！満点なんていまだかつて誰も取ったことないわよ！？」

「あ、りがとう・・・ございます」

ミヤビ自身も混乱しているようで、言葉が変なイントネーションになっている。

教師が失敗したのか、生徒のほうが優秀なのか、みんなそれでも400点越えは当たり前のようなのだ。

レディットも何とか460点をとったのを見て胸をなでおろす。

「いやいや、すごいじゃないの！」

ちやっかり496点で2位をとっているニーナがパチパチと拍手をしながら歩いてくる。

「ちなみこの人が昨日のリースさんの妹さんだよ」

「ええ！？生徒会長が！？」

結構似ている姉妹なのにどうやら見ただけでは分からなかったらしく、ルツカは数秒間の間目を閉じてリースの顔を思い出すようなしぐさをした後「ああ！」と相槌を打つ。

「姉さんが何かしたの？」

「ああ・・・盗聴器を仕掛けられていて、誤って壊してしまいました」

レディットがありのまま《・・・・》を話すと、ニーナは心を読んだようで、楽しそうに笑う。

「おっと、それよりも・・・」

何かを思い出したように言うと、3人を生徒会室へと引っ張り込む。

ニーナの今までの楽しかったような様子ではなく、少しだけ怪訝そうな表情になったのがレディットにはきになった。

「なにかあったんですか？」

ミヤビも空気を讀んでか、テストの事は頭から吹き飛んだようだ。

ニーナは一度深い息を吐くと、一語一語に力を込めながら話し始める。

「先ほど姉さんから連絡があつて、ここはまだなんだがアデルバ市内は10m先が見えない濃霧に覆われていて、事故が多発しているらしいんだ。そしてもっと恐ろしいのが・・・その霧は魔獣の神経を刺激してしまうから、森から出てきて暴れるかもしれないんだ。その対応にギルドと警察と軍までもが出ているらしいんだけど、ほとんど霧が広がっているらしいのよ」

「霧？」

10m先が見えないというのはもはや災害レベルで、車が何かに気づきブレーキを踏んでも間に合わない距離である。魔獣なんて出てきたらそれこそ一般人には何も出来ない。

ヨーロッパの気候的に霧はあまり出ないし、日が昇りきった午後に出る事なんてそれこそ前代未聞だ。

「そう、霧よ。それでギルドの三人にはこれから特務室の人が来るまで非常事態に備えて・・・」

そこまで言つた瞬間。廊下から悲鳴が聞こえる。

「なんだ！？」

廊下に飛び出すと、驚いた事にあたり一面霧で覆われている。

今の悲鳴はパニックになった生徒同士がぶつかったようだ。ここなら生まれてから一度も霧を見たこともない人も多いのかもしれない。「皆さん落ち着いて！！危険ですから講堂に集まってください！！」

とつさの判断ながら誘導をルツカとニーナに任せると、ミヤビをつれて中庭へと出る。

異常がないか確認していると、案の定草むらから魔獣が飛び出してくる。それでも霧があるため不幸中の幸いに、生徒たちには見えて

いないためパニックは起こらない。

「クソッ・・・ミヤビ下がって」

ミヤビをギリギリ見えるところまで下がらせると、バッグの中に入っていた日本刀を抜く。

そのまま斬りかかるのも無駄と、ここ最近の任務で分かっていた。最近なぜか異常なまでに魔獣が強くなっている気がレディットにはしてならなかった。

炎もここに来て頼る回数が増えてきたのは、その証拠だろう。

「戻ろう、ミヤビ。ここは危ない。」

とりあえずなんでもない魔獣を一刀両断して校舎に戻る途中、レディットは霧の中に少女の姿を見た気がしたが、そのまま戻った。

テストと濃霧と（後書き）

どうも、レイです。

今回は久しぶりに魔獣ちゃんが登場しました。

ありふれた事なので日常の仕事での魔獣退治などは描いていませんが、レディットは大分魔獣を狩ってます。

次回から話が転じて新キャラが登場します。

ご期待していただいてもかまいません。それでは次回も。

b yレイ

奇奇怪怪の追われ身嬢

「眠い・・・」

3人が来た後も霧は晴れることはなく、生徒全員を一人づつ送り届けたので時間がかかってしまった。

それは朝までつづき、魔獣が入らないように市外門を閉めていたので、アデルバは港以外はほとんど隔離された状態に陥っていた。

そしてその影響で、魔獣退治の依頼が昨日から大量に増えたようだ。

「本当に見えないな・・・商品の品質は大丈夫なんだろうか」

少々主婦じみたことを言うわけではなく、レディットは物資調達のため、朝早くから百貨店に来ていた。

人々も慣れたのか、パニツクになつて物を買ひ占めるということもなかったようだ。

窓をしめきつて換気扇をフルで回している百貨店も、ひざまでうつすらと霧が入ってきていた。

人間には影響のないと発表されているこの霧も、みんなはまだ心配事があるらしく外には出ていないようだ。

とりあえず、卵や肉などの比較的すぐ無くなる物だけを買い店を出るも、霧で前が見えないと不便さを思い知る。

「それにしても静かだな・・・もしかして僕がおかしいのか？」

1人ポツリと呟くとそれは町の静寂に飲み込まれるように消えていく。

住み慣れない町の道に迷わないように注意しながら歩いていると、向こう側から姿は見えないが、走るような音がバタバタと聞こえてくる。

「なんだ？」

小耳に挟みながら歩いていると、どうやらその音はどんどん近づいてきているようだ。

その音が一番近づいた曲がり角を曲がった瞬間。

「ぐふああああ・・・！！」

腹部に衝撃が走る。まるでタックルでも受けたような衝撃に意識を失いかけるのをこらえると

「もう！！お兄さん！！どこ見て歩いてるのさ！！」

やたらとかわいらしい声が下から聞こえてくる。何かと思い視線を下げると、レディットよりも色素の薄い髪をした10歳ぐらいの少女が可愛く憤慨していた。

「あ、その、えつと・・・ごめん」

「まったく・・・前は見て歩こうよ！！」

ぶんすか怒っているこの少女には、なぜか不思議な雰囲気漂っているようにレディットには思えてならなかった。

まるでこの少女の周りから霧が立ち込めてでもいるような気がする。それ以前に危険といわれているこの町で、朝から子供が何をしているのかが不思議だった。

「君は一体？それよりもなんでこんな時間に・・・」

「あ、そうだ！！」

レディットが質問すると、何か大事な用事でも思い出したかのよう
に声を荒げる。

「アタシ鬼ごっこしてたんだわ！！」

「鬼ごっこ？」

跳びはねているその姿は無邪気で、姿勢を低くして喋るレディットと目線がなかなか合わない。

こんな時間に起きているのはいい子だが、静かだからといって街中で朝っぱらから鬼ごっこというのは親が咎めないのかレディットは気になった。

「そう。お姉さんとしているの！！昨日からずっとそのお姉さんが鬼なんだけど、全然捕まえてくれないのよね。あ！来た！！」

そういうとまた走り出して向こうの霧の中に消えていってしまう。それと入れ替わるかのように、さっき少女が来た方向から誰かが走

ってくる。

「あ！あなたは！！」

その女性はレディットを見て声を上げる。あちら様はどうやらこちらを知って知るようだが、レディットに見覚えはない。

一生懸命記憶の中を探り、掻き回しながら振ったりしていると思う。

「あ！あのクーラーが壊れてたときの！！」

「そうです！！それ私で・・・あつと、そういえば名乗ってませんでしたね。私はアネモネ・ルーラーといいます。お久しぶりです・・・あれ？」

「ああ・・・僕はレディット・ギルバーツといいます」

本当はよく覚えていないのだが、クーラーが壊れていたときに不運にもユレイダのお使いをさせられていた女性だった事はレディットも覚えていた。

そして少しあの時は特務室にいいイメージを持っている人間ではなかった。羨むようで、特別視されているのを不服に思っているようだ。

「私特務室の人と話すのが初めてなんです。怖い人かと思っていたけど私より若い人がいると安心だよ。君はいくつなの？」

「17ですけど・・・」

「すごいね！！私より2つも年下なのにもう働いているんだ！！」
何をしていたのか、アネモネはテンションが朝にしては高いし、何だか息が切れている。

「もしかして、女の子を追ってます？」

レディットがそう聞くと、アネモネは思い出したかのように体をギクリと跳ねさせる。

そして、走っているわけでもないのに額から汗が滲んでいる。

「ああ！！あああああ！！そうだったわ！！レディット君は見たの！？」

アネモネは焦ったような様子で激しくレディットの肩を持ち揺さぶ

つてくる。

「おちついてください！その女の子は僕より髪の色素が薄い、10歳ぐらいの女の子でした？」

「そう！その女の子よ！！どっちに行つたの？」

「あつちですけど・・・」そういうとアネモネは走り出そうとするが、レディットは聞きたい事があつたので手を引つ張つて止める。

「なんで、追つてるんですか？教えてください、何か協力できるかもしれませんので」

とはいえ本当はアネモネに協力したいというより、あの少女の事が気になった。

関節が抜けかかったかのように、スリスリと肩をなでながら少々早口でアネモネが説明を始める。

「あのこを捕まえるように依頼が来ているの。依頼主は・・・政府なんですよ」

「政府！？」

普段は議会だのなんだの承諾がないと動かないくらい腰の重い政府が、少女一人のために動き、捕らえようとするのは至極不思議な事で、レディットはあの少女が更に気になった。

「そうです。で、ここ数日完璧に出勤できるのが私ぐらいな物だったんで請け負つたんですけど・・・」

「昨日から捕まえられない、と」

「そうなんですよ。あのこ足が速くて速くて」

アネモネが運動音痴なのか、あのこが本当に足が速いのか今の段階では分からないが、レディットは一息飲み込むと自分の性格を少し呪いながら、口を開く。

「内容は分かりました。もし迷惑でなければ手伝わせていただけませんか？」

そういつた瞬間、アネモネの顔から焦りが消えて一気に表情が明るくなる。

それと同時に0・02秒という圧倒的な速さで、レディットの手を

ギョツと握って顔を近づけてくる。レディットは思わず身を引いた。
「本当ですか！？ありがとうございます！！それでは、これを！」
そういつて紙を一枚レディットに渡すと、慌ただしくもアネモネは
さっきの少女を追って霧の中へ消えていつてしまう。
どんな面倒が待っているとも知らずにレディットは苦笑した。

「登校日じゃないからって気をぬかないでくれ」

「ごめんなさい・・・」

レディットが8時ごろに買い物から帰っても、ミヤビはまだ寝ていた。出勤時間が8時30分のギルドでは完全な遅刻である。

朝ごはんも適当に出てきてのだが、結局間に合うかどうかの駆け足になってしまった。

「おはようござい・・・」

そう言いかけたところでレディットの口からそれ以上、挨拶は出なくなってしまう。

出勤前にもかかわらず仕事に勤しむアネモネとは違い、レディットとミヤビが特務室へ行っても時間ギリギリなどお構いなのかのように誰もいなかった。

「また誰もいないの？」

ミヤビもさすがに呆れたような口調になっている。

無論泊りがけの仕事などの物ではなく、机の上には「昨日は長丁場だったので・・・ね？」という紙だけが置かれていて、レディットは少しだけ怒りを覚えた。

「そういえば、僕はいつもの仕事以外にもうひとつだけ仕事が入ったんだがついてくるか？」

ミヤビはまだ眠気が残っているのか、リースたちに文句を言った割りに頭が回っていないらしい。数秒間じつくりと考えた後、ゆつくりと首を縦に振った。

「よし・・・」

先ほどアネモネから渡された紙を見ると、そこには彼女のもの

であろう電話番号が記されていた。

とりあえず先に仕事を、と考え、ご苦労様にも朝早くに総括部の人が依頼を張り出したボードを見ると、そこには魔獣退治の依頼ばかり張り出されていて、レディットはすこし汗を垂らした。

「仕方ないか・・・」

ぼやきながらも刀を握ると、気合が入る。

この動作がレディットにとってはスイッチのような物で、この剣はシェダルでは売っていない『ニホントウ』といわれる合金で作られた剣である。そして母の形見でもあった。

「今日の目標は5体だな！」

そういうとレディットはミヤビを半分引つ張りながら任務に出た。

「これで・・・5体目！！」

そういつてレディットは最後のいつたいを切り倒すと倒れこむ。

昼下がり、日が照っているはずのこの時間帯にも霧で光が少なくなる。

5体目を倒す頃には闘っていたレディットも、小さい魔獣を倒していたミヤビも疲れていた。

「やっぱり炎が必要なのか・・・」

木陰で身を休めようと移動しつつもレディットの頭には少しだけ引っ掛かる事がある。

それはこの霧が現れるよりも前からの事だった。

「どうしたの？」

ミヤビもその様子を察してか、顔を覗き込みながら聞いてきて、自分から覗き込んだ割には顔を赤くしてそっぽを向いてしまう。

「ああ・・・僕がちょうどこに来て君を連れ出したくらいの時期から、普通の武器が効かない今までよりも強力な魔獣が現れているみたいなんだ」

それは能力を使える物にとっては小さな事かもしれないが、普通の武器をかって使う事すらできない一般人や、武器を使っても倒せない

い群などはどうするのか？レディットには心配だった。

ミヤビはどっちにしろ魔獣を知らないらしく、首を傾げるだけだった。

「まあ、気かけすぎるのも良くないが、策は早めに打っておいたほうがいい気がするんだ」

兵法はさっぱりでも、頭のいいミヤビは最悪の事態を考えたらしく苦い表情をしている。

「さて、と・・・」

重苦しい空気が流れる前に、レディットは携帯を取り出してアネモネから手渡された番号に発信する。

待ちわびてたかのようなタイミングで、1コール目にアネモネは出た。

「はい！もしもし」

「アネモネさん？レディットですが、仕事が終わったのでお手伝いできる事はないかと」

「・・・すみません、今どこですか？」

やっぱりあの少女を追いかけてるのか、アネモネは呼吸を整えつつ電話をしている。

横を見るとミヤビが少し複雑そうな表情をしていたので、レディットは『ギ・ル・ド・ノ・ヒ・ト！』とだけ口の動きで伝えてから通話口に戻す。

恋人同士でもないのに少しだけ妙な気分だ。

「えっと・・・アデル巴西口の5番街道です」

「本当ですか？近くです！じゃああのこを探してもらえますか？」
「了解」

偶然にも近くだったので、移動をしなくてすむ事がレディットにとって今は嬉しかった。

携帯をたたむと、何だかさっきより霧が濃くなった感じがする街道を見渡す。

「ミヤビ、一緒に人探しをしてくれるか？」

ミヤビもあまり動きたくはないのか、疲れた様子で首肯した。

「じゃあ、真っ白な髪の毛をした10歳ぐらいの女の子を探してくれ。いいね」

「あれじゃない？」

レディットが話している途中から、どこかあさつての方向を向いていたが、今度はその方向を指差している。

レディットもその方向をみると、確かにそれは朝に出会った真っ白で不思議な少女だった。

あちらもレディットに気づいたのか、目をまん丸にしいきなり笑顔になって走ってくる。

「お兄さん！こんなに早くまた出会えるとは嬉しいわー！」

そんな事をいいながらレディットに抱きついてくる。

そんな様子を見て見逃してくれない人が一人、案の定だがミヤビが声を荒げて反応する。

「ちよつとレディット！この子誰！？」

すると、一瞬でミヤビの健全な嫉妬心ジェラシーを見抜いたかのように少女は胸を張り、言う。

「失礼ね！！私はお兄さんの婚約者であるミスティン様よ！！」

「ええ〜！？」

いきなりかつ意味不明な宣言に二人とも声を上げる。そしてミヤビは地面に座り込んでしまう。

それをみてレディットはまた面倒な事になるのを危惧しつつも、任務を思い出す。

「そうだ、ミスティン・・・？僕たちのところに来て話をしてくれないかな？」

しかしレディットがそういつた瞬間、ミスティンの表情が一気に悲しそうになる。

「お兄さんも？」

ポツリと、喉にいきなり何かがつつかえたような小さい声でミスティンが呟く。

「え？」

「お兄さんもそう言ってアタシを捕まえようとするの？」

それにはレディットもさすがに狼狽する。今までこれ以上ないくらい元気だった女の子が、自分のせいで一気に暗い表情になれば誰でもそうだろう。

そしてレディットは理解してしまった。この少女、ミスティンは『鬼ごっこ』といいながら、何らかの事情やトラウマで大人たちから本気で逃げ回っているのだと

「いや、そういうことではなく・・・何というか、ただ君と話がしたいだけなんだ」

レディットの弁解が届いたのか、ミスティンは零れそうなほど出ていた涙をふき取ったが、レディットと距離をとって顔を上げた。

「お兄さんは嘘を吐いてないみたいだし、いい人だから許してあげる。でもお兄さんも鬼よ！！」

そういうと、アネモネから聞いたとおりの速さで霧の中に融けていってしまう。

「レディット君！！いきました？」

それと入れ替わるかのように、叫びながらアネモネが走ってくる。

そこでやっとミスティンを追わなければいけなかったことに気づき、レディットはハツとした。

「すみません。見つけたんですが・・・」

そこまで言ったところで、1つ気になることをアネモネに聞いてみることにした。「この霧とあの少女・・・ミスティンは何か関係があるんですか？」

「任務の詳細はあんまり聞いていないので・・・すみません。でもミスティン・・・あの子の名前はそういうんですか！！」

一瞬ながらアネモネの上下していた肩が、ピクリと規則性から外れた動きをした気がする。

首をかしげながらも、どうやら特に知らないらしいのでレディットは落胆した。

「とりあえず一回逃したらなかなか見つかってくれないので、今日はこちらまでにしましょう。ありがとうございました」

レディットは結局ミスティンというわがたまりを抱えてしまった。

とりあえずアネモネに申し訳なかったし、ミスティンについての事情も気になったので、ギルドに戻った後も機嫌の直ったミヤビと二人でミスティンについて調べていた。

「ん？」

魔獣の情報をとりあえず地区の近い物を調べようとして、依頼詳細を眺めているとレディットはある事に気づく。

魔獣の目撃情報がある地域には時刻によって偏りがあった。それはまるで、あの霧が移動して、魔獣を興奮させる地域から出たり入ったりしているということだ。

「これってさ・・・」

レディットがさすがに不思議に思いミヤビに相談すると、それを見て頭が冴えたのか閃きを見せる。

「偶然かもしれないけど・・・」

そういつて、ミヤビは地図とペンを取り出して中になにやら書き入れながら喋りだす。

「基本的に同じ時間で目撃されている魔獣は5体程度で、その中が一番アデルバに近いところの目撃例をA点として、その点から一番遠い同じ時刻の目撃例までを直径とした円で囲むの。こっちの時間も同じ要領でやると

「

ミヤビが最後の円をコンパスで描いたとき、レディットは思わず感嘆の声を上げる。

すべての円の直径が、手書きの誤差をぬいて考えると全くすべてが一緒になったのだ。

「すごいぞ！！ミヤビー！！」

テストの点だけでなく、本当にミヤビの頭がいいことを思い知らされると、レディットは少し情けない。

それでも完全に規則性を見つけたレディットと、褒められて喜んでいるミヤビがはいっていると、クレヴァーが帰ってくる。

「ただいま。あれ、二人だけ？つてなにこれ？」

どうやら散々散らかして地図の謎を解いていたのに気づいたようで、訝しげな視線をしている。が、それも地図を見た瞬間に輝き始める。「これミヤビちゃんが解いたの！？すごいぞ！その少女の事も気になるがこのことはそれこそ政府に調査でも依頼すれば動くんじゃないか？」

「あつ……」

そこまで言われて初めてレディットはこの情報の欠落に気づく。

確かにこの地図なら、『何か』があるという事は分かる。ただそこで止まってしまっていたのだ。

「この程度の事は政府にとって予想の範疇、いや、これを前提として動いているとしか思えない……」

それこそ腰の重い政府が動いたのだ。これ以上の情報は持っているに違いない。

こんな前代未聞の状況下で、やっている事といえば霧の成分調査だの警備体制の強化だの、結局何の解決にもならないことばかりで、たった一人の少女を追いかける暇があつたのならやる事があるはず。そう考えると、アネモネも何か知っていると決まってくる。

「そうか……!!」

「え？ええ？」

ミヤビとクレヴァーは、『一人で答えを出さないで!!』みたいな顔をしている。

「ああ……すみません。ミヤビ、謎が解けたから明日からまた仕事だぞ」

「え、ああ……うん」

多少強引な気がしつつも、自分の中で答えが出て、テンションの上がつたレディットはミヤビを部屋に引っ張って戻った。

奇奇怪怪の追われ身嬢（後書き）

どうも！レイです。今回長くてすみません。

今回は新キャラとしてミスティンちゃんが登場しました。

ここからミスティン編となるのですが、「ミヤビより登場の扱いがいいね！」とか言わないであげてください。

次に投稿する話とその次に投稿する話は、それぞれレディット視点とミヤビ視点で、時間軸的には同じ時間を辿ります。

それともう1つだけ。

キャラクター紹介のプロフィールで、フォーゲルの体重が、設定より10kgも多かったのを見たとき、やってしまったと思いました。ダイエツトしよう！とか、そんなムキムキ女性キャラに設定した覚えはない！

などと自分で思いながら修正してまいりました。

すでにされていた方は気にしないで、「あれ？」とか思われた方は申し訳ありません。

それでは次回も。

b yレイ

他主占有の女装少年

その後も地図の謎を完璧にすべく、各地の魔獣を倒しながら調査して、ミヤビの推測はほぼ確定になったが、意見を念のため聞いてみたリースに言わせても、事態の解決とはいえないようだ。

「そういえば・・・」

市民が危険にさらされている以上、早めに解決すべきで、ミスティン以外の問題も山積みだというのに、最近ロゼットが姿を現さない何気なく過ごしている特務室に、一つ物足りない無口なまじめ人間の存在をレディットは少し気にしていた。

ミスティンの謎にいまだに答えの出ないミヤビとの夢交換の謎。レディットの中のわがたまりは全くといいほど晴れないまま、マルフ学園祭は3日後に迫っていた。

とはいってもレディットも何もしていなかったわけではなく、ユレイダのところへ押しかけても取り込み中だったり出張だったりと不運続き。カーリーのところへ押しかけても、『研究中』などとかかれた張り紙がこれ見よがしに貼られているくせに、中からテレビを見て笑う声とコーヒーを啜る音が聞こえたときは、レディットもドアの破壊を考えたくらいだ。

最近はその二人に不信感や若干の嫌悪感も抱いている。

それに加え家でも演技の練習をするようにと文化祭の実行委員に耳にたこが出来てくるくらい聞かされ、そして生徒会の仕事としての雑用があつたため、レディットのスケジュールはパンパンで、ミスティンを探すのも最近は出来ていない。

あのときの悲しげな表情と言葉が忘れられず、それを聞いたミヤビも思うところあつたようだ。

出会って間もない少女にこれだけの感情を抱くのは、見ている人々からロリコンとか言われるかもしれないが事実であり、そして不思議だった。

「レディット君。メイク始めますよ」

そういいながらどつさりとメイク道具を抱えた演劇部の部員が入ってくる。

レディットは諦めて椅子に座った。

無論、抵抗が

なかったわけではない。レディットも必死に講義した。

だがそれを遮る力を持つ人間、この学校で絶対的な権利を持つ人間であるニーナに押し戻され、無念残念な敗北という結果になり、クラスのみんなの希望もあり前日2日間化粧と衣装込みでの演技練習となった。

「もともと中性的な顔だから、チープとかは塗らなくていいと思うんだ」

そんなレディットが分からない専門的なメイクの話の途中で、何かを思い出したかのようにその女性は手を叩く。

「さつきギルドの人たちが来てたよ。なんか会長のお姉さんとか言ってたな・・・似てたし」

「！！」

その一言を聞くと、自分でも分かるほどにレディットの全身の鳥肌は一斉起立した。

それに次ぐように脂汗がにじみ出てきて、体が震える。

現在進行形でバリバリメイク中のレディットは今ここから逃げ出すことは出来ない。

そんな状況であのリースたちが来れば茶化すだけ茶化され、レディットの精神をボロボロにして帰るであらう。いや、最後に耳元で『本番も期待してるわ』とか言いかねない。満面の笑みを浮かべて。そんなガクガクブルブルな状況に、レディットは耐えうることはできそうにない。

「着け睫毛何枚が良いですか？」

そんなレディットの中の緊張や危機感や不安や恐怖や悲しみやその他エトセトラを知らないメイク係は平然とメイクを続けようとしてくる。

今ならまだ顔を洗いなおす余裕があるかもしれないのに。

どんだん後戻りが効かなくなつて、完成形になつてから会つたらそれこそ最悪である。

「何枚でも良いですよ・・・」

『そんなことどうでもいいのでは?』などと、ヒロイン役選ばれた事で生まれた誰にもぶつけられない愚痴と、リースたちへの恐怖を脳内に忘れ去りたい記憶として埋め込むと、レディットは目を閉じた。

「最近、あのお兄さん見ないな・・・」

ミスティンは暇を恨みながら道端の缶を蹴飛ばす。

「昔と違って楽しくなると思ったのに」

だが正直ミスティンには昔の記憶など全くなかった。すべてではなく、ある一定の時期だけ虫食いのように欠落しているのだ。気づいたときには、薄汚れた感じの周りとは違う雰囲気を持った路地に放り出されていた。

ただひとつ知っていること、それは自分がいい環境にいなかった事。ボロボロの体と服がそれを物語っていた。

でもこの町のことは知っていた。朧気かつ曖昧な記憶をたどりながら彷徨っていると、あのお姉さんが現れて、鬼ごっこが始まった。

「それにこの霧は何なの? あんまり覚えてないけど昔はこんなんじゃない・・・」

そこまで言つたところでミスティンは足を止める。あちらこちら封鎖されてどこにもいけないこの町の外れに、ひっそりと隠れるように在る道を一本見つけたのだ。

最近人が通つた痕跡もある。それを見て、ミスティンの中のいたずら好き精神が騒ぐ。

そこには看板があり、その先を指す矢印とローマ字で

「エム、エー、アール、ブイ?」

と書かれていた。シエダール語しか読めないミスティンにとっては

理解不能な言語だが、特に気にする事もなく歩み入る。

「誰かいらないかな・・・」

いたずらできる人はいないか探しながらミスティンは木々に囲まれた道を歩く。

何かに使うには不便なほどに意外と道は長く、若々しいティーンでなければ歩けないほどに感じる。

そしてそんな長い道に街頭などの明かりは一つもなく、お化けでも出てきそうなほど暗かった。

喧嘩別れのような別れ方をしたものの、レディットに追いかけてもらえないのは少し寂しかった。

しばらく歩いていると、霧でよく見えないのだが向こうに明かりが見える。

門をくぐって近づくと、中から大勢の人間の声が聞こえてくる。

「あ・・・！」

窓の外から見覚えのあるアッシュブロンドと黒髪を見かけたとき、ミスティンはニヤリと笑った。

「だからこそ会いに来たんだよ

リョーデリア、君に・・・」

衣装のまま、棒読みながらセリフを読み上げてみると改めて恥ずかしくなってくる。このセリフはヒーローであるノアル役のセリフなのだが、本番はこれを聞きながら号泣しないといけないらしい。

強がりながら、レディットは单身生活を小さい頃からしていたため涙を流す暇などなかった。

『王女と商人の身分違いの恋』というありがちなストーリーのくせに専門家張りのまとまった構成と脚本には裏方委員の気合が伺えてレディットは少し怖かった。

「レディット？」

演技経験ゼロのレディットがどうしようか悩んでいると、不意にドアが開く。

「

ッー！！」

ついにリースたちがやってきたかと思い、メイク室のテーブルの下に野生の動物たちがおまけのスピードで隠れる。

「どうしたの？」

リースとは違う口調と声色に恐る恐る顔を出すと、そこに立っていたのはルツカだった。

「いや・・・なんでもないんだ。少しだけ最近疲れ気味なんでね・・・ところでどうしたんだ？」

服についてしまった埃を払いながら言うが、自分で言ってる恥ずかしくなったので話題を変える。

「ああ・・・ギルドの人たちも帰ったので演技練習を始めようかなと思って」

「わかりました」

うつむき加減で講堂に入ると、レディットは一步身を引く。大掛かりなセットまでもが完成形に近い形で組まれていた。

ただ、レディットの狼狽はそこではなくみんなの視線が自分に集まっている事だった。

みんなの声に出来ないような驚きをみて、レディットはさすがに自覚と屈辱を覚えた。

「ま、まさか・・・」

その中の一人が静かに声を上げる。

「そう。レディットよ!!」

ルツカがなぜか我がことのように胸を張っていった瞬間、レディットは空気がどよめいたのを感じる。

仕方もない。客観的に見れば、女性そのものだったのだ。オーディションがノーメイクだっただけに、更なる衝撃がその場にいる全員に走った。

「はあ・・・」

と、諦めかけたレディットがため息をついた瞬間。

窓際に何かがよぎる。霧のせいで窓がくもり、人型魔獣なのか人なのか何かは分からなかったが、他のみんなも見えたようで、いきな

り現れた謎の人影のようなものに目配せをし合っている。

「僕が見てきますよ」

みんながレディットの衣装姿と外を交互に見つめているので、早くその場を抜け出さなくては見回りに出る。

行動の重い扉を開け、視界が開けぬ周りを一通り見渡すがそれらしい姿も気配もない。が、そのせいで静まり返った中庭にクスクスと笑うような声が響いている気がした。

とは言っても何もなかったので中に戻り何もなかった事を報告すると、みんな青ざめた顔になる。

「それって幽霊じゃない？」

そんなことを誰か一人が言うともみんな確信でも持ったのか、ざわつき始める。

「それよりも練習始めましょう」

それを止めるかのようにルツカが手を鳴らすと、みんな不安そうな表情のまま練習を始めた。

「すみません。遅れました」

レディットが演技練習の後、任務で受けた魔獣を退治して生徒会室に戻る頃には、もうすっかり暗くなっていた。

この人たちはオカルト好きなのか、結局劇の練習が終わるまで幽霊の話は絶えなかった。

「遅かったのね」

ニーナは特に仕事がないように振る舞い机に足を乗せたりなんかしているが、横の机で、副会長のジャンが大量の書類に印を押している。本来は誰の仕事なのだろうか・・・

文化祭の直前だというのに、このまったりした空気は本当に特務班に似ていた。

「そういえば、さっきみんなが廊下で幽霊の話をしていたわね」

ニーナが何気なく思い出したかのように、先ほどの幽霊騒動のことを口にする

と同時に、今までつまらなそうに外を眺めて

いたミヤビの方がビクンと震える。

「どうしたの？ミヤビちゃん」

「いや・・・なんでも・・・」

「ふん」

平静を装いつつも顔を青くし、震えるミヤビとそれを見て人の弱みを一つ握ってご満悦の二ーナを見て、さすがにレディットも理解した。

「ミヤビ・・・幽霊ダメなのか？」

幽霊というたびに震えるミヤビの肩は、むしろその言葉自体に恐怖でも抱いているようだった。

科学もまあまあ発達しているこの国で、もうすぐ21世紀になろうとしているこの時代、そんなオカルトな事柄を信じている人間の考えをレディットはあまり理解できなかった。

「まあ、本物を見れば価値観が変わるのかもな・・・」

レディットがそんなチープな論題を軽くあしらおうとした時、またもや窓の外に何かを通ったような気配がする。正確には声がした。二階であるこの部屋からでも分かるほどに聞こえるその笑い声は、先ほどレディットが聞いたのと同じ物だったが、どこか聞き覚えがあるきがした。

みんなも聞こえたのか、仕事をしていた面々も手を休めて窓の外に活目する。

するとうつすらと人影が見えてくる。その姿は

「女の子？」

ジャンがそう呟くのを聞き、ミヤビはゆっくりと身を横に倒す。どうやら本能が意識を飛ばしたようだ。

「ミヤビ・・・」

そんなミヤビの間抜けで情けない姿をみると、レディットは立ち上がり、今しがた視覚情報で確信をえた真っ白な髪の少女を追いかけて部屋を出た。

嫌な予感と刀を持ち合わせながら。

他主占有の女装少年（後書き）

どうもレイです。

今回は少しながら遅れてしまいました。すみません。

3個次ぐらいにやっとバトル回です。

『カテゴリのバトルの部分が全然ないね』くらいに思っていた方はやっとなです。

うまい下手は別としてみてくだされば光栄です。

それと、次回はミヤビ視点のお話になります。

生徒会室でレディットと合流するまでのお話になります。
それでは次回も。

b yレイ

曖昧模倣な怖がり少女

学園祭の準備はミヤビにとってはそんなに重荷になる物ではなかった。

生徒会の仕事という事で、ニーナが暇つぶしに引っこ抜きに来れば、そこで仕事は終わりだったからだ。

レディットが劇の練習をしているのに、と、少しだけ罪悪感があるのも事実だった。

とりあえず仕事をしないわけにはいかないが、戦闘が得意ではないミヤビは、いつも小さな仕事ばかりで、代わり映えも何もない日常となっていて、何だかむなしささえ感じた。

それでも生徒会の席を外すわけにはいかず、生徒会室などから電話で任務報告をしていた。

それが少しだけ狂ったのが3日前。ミスティンという少女の調査を始めてから、レディットもミヤビもあの不思議な少女の事が気になり始めていた。

『そう・・・それじゃあ報告ありがとうね』

『いえいえ。それじゃ後で帰ります・・・』

『あ！ちよつと！！』

ミヤビが電話を切ろうとした時、通話口の向こうのリースが止めてくる。『ミヤビちゃんに頼まれていたこと、情報処理班から第一次調査の結果が届いたわよ』

『本当ですか？』

ミヤビは、レディットと共にミスティンのことを調査し始めてから少しだけ気になる事があったので、それを国境を越えて、他の国のギルドとも協力できると言われるシェダールギルドの情報処理班に調査を依頼していた。

その名目は、『特務班による霧の成分調査と可能性のある文献搜索』だったが、それによって本当にミヤビが知りたかったのは、ミステ

インの素性や過去であり、これを知っているのはミヤビ、リース、情報処理班にいるリースの友人の3人だけであった。

情報の混乱や、一気に大量の情報が漏洩するのを防ぐために、定期的にそこまで出調べ上げられた情報が知らされた。今回はそのうちの第一次調査だった。

『今回分かった事は少ないらしいけど、盗聴が心配だからロゼットをつれて後でそっちへ向かうわ』

その一言を聞いて、ミヤビはこちらの事情を少しだけ思い出す。

「でもレディットは少しだけ外すんですけど・・・」

『あら、どうして?』

「今年のクラスの出し物で劇をやる事になりました、レディットはその主役なんです・・・」

ミヤビがそう告げると同時に、電話を隔てたこちらの世界でも分かるほどに向こうの空間の音が消える。珍しくも、お喋りなリースが黙り込んで全く声を発していない様子を想像するのは容易ではなかった。

「えっと・・・?」

『ああ!ごめんね?』

数十秒間の沈黙に耐えかねたミヤビが恐る恐る口を開くと、意識がどこかに飛んでいたかのようにリースが返事を返す。

『なんでもないわ!何人でも別に支障はないしね。そのかわり二ーナとガーデンカフェで待っていて』

ブツツという音と共に電話が切れた。何だかリースがあわてていたようにも見えたが、ミヤビのほうも気にせず視線をずらすと、自分の名前が出たのが聞こえたのか、レディットが不思議そうにこちらを見ている。

「なによ・・・」

「いや、僕の名前が出た気がしたんだが・・・」

レディットが頬をかきながら聞いてくると、ミヤビは無性に恥ずかしくなった。

「気のせいよ！ほら、劇の練習あるんでしょ！」

「ああ・・・」

聞かれていた照れ隠しにレディットを部屋から追い出すと、勢いよく扉を閉める。

そして一息つくと、ミヤビは椅子に座って仕事もせずふんぞり返っているニーナのほうを向いた。

「どうしたの？」

「リースさんが話があるので二人でガーデンカフェで待っていてくれと言ってました」

「わかったわ」

本当に分かっているのかどうか不信がりつつもミヤビが窓の外を見ると、霧はさつきよりも濃くなっている気がした。

マルフ学園にはなぜか学食とは別のところにカフェがあり、ガーデンカフェと呼ばれる割に屋外じゃなかったり、ただの学園のくせに御用達マスターが居たりなど、つつこみどころ満載なところがあった。

兎にも角にもそんな大層な場所で、ニーナのおごりでお茶を啜りながら二人を待っていた。

「お待ちせー二人とも」

ダージリンをストリートで飲んでいるニーナとは違い、お子ちゃまなミヤビがいくつも砂糖の塊を放り込んでいると、霧の向こうからいきなりリースたちが現れる。

その後ろについてきたロゼットはいつもの如く不機嫌そうだが、ちゃんと約束どおりついてきていた。

「遅いわよ、姉さん」

「ごめん。まあ、とりあえず話を始めましょうか」

「あの・・・レディットはほんとにいいんですか？」

仲間はずれなのは若干可愛そうだと、レディットに気を使ったミヤビがその名を口にした瞬間、リースの肩がピクリと振るえて黙りこ

み、ロゼットがため息をつく。

「センドウ、それは禁句だ・・・」

未だになれないロゼットの苗字呼びと、リースの脳内思考が全く不明瞭で読めないことにミヤビが戸惑いつつも、リースをみると、立ちながら自分のブーツのヒールで自分のもう片方の足を思い切り踏みつけている。まるでそうでもしないと正気を失ってしまうかのよう。

「姉さん落ち着いて頂戴。とりあえず座って」

「あつ！・・・ああ、そうね・・・」

ニーナが宥めながらも紅茶を飲み干したところで、我に返ったリースたちも席に着く。

「ミヤビちゃんから依頼されていた調査の結果がこれよ」

そういいながら一枚の紙切れを広げる。「まあ簡単に読み上げると、『霧の正体は何らかの能力的なものであり、成分の中に少しだけアデルクローンと呼ばれる、魔獣だけに影響を及ぼす放射線のような物が含まれているので要注意』だそうよ。素人には良く分からないけど、これを今の状況に置き換えるならその誰かの野力の発動を止めない限り、霧は消えないということね」

今の状況という事なので、能力の発動源はミスティンと考えたほうがいいのかもしれないが、可能性はまだまだあるの対処が難しい。

「つまり、だ。一番の解決の糸口は能力者の特定と、能力の停止を促す事だ」

ロゼットの至極単純かつ明快な解決法もミヤビにとって納得の行くものではなかった。ミヤビにとってこの霧は確実にミスティンによるものだ。その考えの中、ミスティンが故意に霧を出しているとは思えなかった。

それは偏った考えだとミヤビ自身分かってはいたが、これ以上放っておくとレディットまで危ない目に会うような嫌な予感がしていた。

「ミヤビちゃんの浮かない顔の訳なら分かってるわ。だからこそ調べ上げておいたわ」

心の読める卑怯な姉妹の姉は、バッグからもう一つの書類を取り出すと、テーブルの上に置く。

「ミヤビちゃんは本当にレディット君が心配なんだね」

それに次ぐように、本格的に心奥底まで読める妹のほうがニヤニヤしながら見つめてくるのを必死でスルーしながら、リースの話に耳を傾ける。

「まあ、詳しいことは後で文面に目を通してもらうとして、こっちもささつと話しちゃおうか。昔話になるけど、9年前にある事件が起こったの。シェダールの歴史上これ以上ひどい事件はないといわれている事件よ」

「『子供たちの最後の夜』・・・」

感慨深く、思い出すようにロゼットがポツリと呟くが、ミヤビの耳にははじめて届いた名前だった。

名前の響きからしてロクでもない事件なのは見え見えである。

「そうよ。ミヤビちゃんは知らないかもしれないからそこから話すけど、9年前のある時、たった2週間で4〜10歳の子供が60人以上も誘拐されたの。別の国の子もいたけど、その中の多くがシェダール人だったわ。とある教団が実験のために誘拐したその子供たちは、事件を暴くのが遅れたせいで、ギルドや警察の人間がつくころには一夜にして大半が死んでしまっていたの」

名前の意味を理解すると同時に、ミヤビの背に少しだけ悪寒が走った。発見時の子供たちの状態を想像できてしまった事もあるが、ミヤビは自分も条件に当てはまる事に慄いた。

「その実験って言うのが、『能力の量産及び移植』だったの。今考えれば無理な話よ。個人個人遺伝に関係なく目覚める唯一無二の『アビリティ超能力』を優劣で分けられる『スキル活用能力』に変えようとしていたのだもの。そんな実験成功するはずもなく、何の能力かは分からないけど、無理やり押し付けられた能力に負けたから子供たちは死んだの。その教団も残念ね。人身売買の一種である誘拐と過失致死の両方という重罪を犯してまでした研究は見事に失敗したのだから」

「そんな・・・」

ミヤビは自分の想像以上のことに声が出なくなる。腐っているとしか思えなかった。個人の勝手な欲望で多くの命を奪った教団、それをとめることが出来なかったシエダールの組織も。

「当然、その組織の幹部クラスは全員極刑 終身刑よ。で

も逃げ延びた団員もいるかもしれない。その残党が集まっているというのが、この町のマフィアである『リヒティヒ』という組織よ」

『リヒティヒ』
その生名前には聞き覚えがあった。ギルドのみんなから知っておいたほうがいいといわれたし、レディットからも聞いていた。しかし、この国の政治の仕組みなど微塵も分からないミヤビにとって、その存在が許されつつ黙認されているのが不思議でならなかった。

「その残党たちが実験を引き継いで続けていて、もし成功していたとしたら？その成果がミスティンだったとしたら？というのが私の推測よ」

そこまで聞くと、ミヤビは納得せざるを得なかった。直感的にあっているといったほうがいいのかもしいが、レディットへの心配もよりいっそう強くなる。

どうした物かとミヤビが悩んでいると、軽快な音楽がリースの懐から鳴る。

「あつ、ごめんね」

そう言つてリースは携帯を取り出し、会話を始めた。「もしもし・・・はい、今はマルフ方面です・・・エッ！？・・・はい・・・はい、分かりました」

会話の途中でえらく焦り始めたリースは一気に紅茶を飲み干すと、口ゼットの袖を引っ張る。

「支部長からの連絡よ。魔獣が市内に入り始めたから応援要請。ほら、いくわよ！！二人とも、またあとでね！！」

それだけ言い残すと、調査の書類をミヤビに預けて走っていったし

まう。

「ミヤビちゃんは先に生徒会室に戻っていてくれ。私は少しレディット君を見てくる」

ニーナまで立ち上がったっていつてしまふ。だがその爪先は劇の練習をしている体育館ではなく、メイク室の不に向かっていた。

「どうしよう・・・」

レディットの練習が終わるまでまだまだ時間は残っていた。

「すみません。遅れました」

ミヤビが気がつく頃にはレディットが戻ってきていた。

時計を見上げると、リースたちが来てからもう1時間も経っている。その間ずっとさっきの事について考えていたミヤビの脳は睡魔を招いていた。

大きなあくびを一つこぼすと、少しだけ脳を働かせてレディットにさっきのことを告げるべきかどうかを考える。

きつとレディットのことだから余計にミステインのことに首をつつ込みかねないが、何も話さないままにやめさせるのも、続けさせてレディットを危険にさらすのもどちらも吉とはいかなかった。

「うゝむ・・・」

「そういえば、さっきみんなが廊下で幽霊の話をしていたわね」

ミヤビが頭をショートさせかねない勢いで悩んでいると、耳に恐ろしく吸い込まれていく気になる単語があったので、ミヤビは思わず体をびくりと震わせてしまふ。

「どうしたの？ミヤビちゃん」

「いや・・・なんでも・・・」

「ふゝん」

平静を装いつつも、幽霊が苦手なミヤビは今この場に話題になっただけで冷や汗が滴る。

ニーナに心を読まれているのはもはや逃れられないと諦め、せめてレディットには情けないところは見せたくなかった。

「ミヤビ・・・幽霊ダメなのか？」

そんなミヤビの必死の抵抗むなく、幽霊という単語が出るたびに肩が振るえ、レディットにもばれてしまっている。

レディットはそんなミヤビ様子を見て、なにやら考え込むような顔をしている。それをみると、ミヤビは何か哀れむような感情を抱かれている気がしてならなかった。

（同情はやメテー！）

ミヤビがそんな事を心の中で呟くと同時に窓の外から笑い声が聞こえてくる。少女の声だ。

ミヤビは全身に鳥肌を立てつつも、必死に否定する。

（幽霊なんかじゃない！幽霊なんかいない！！ミマチガイダ！！！！）

そうやって自己暗示をかけながら窓の外を見ると、確かにうつすらとしか確認できないが少女がいる。

ミヤビが意識が飛びそうなのをこらえながら半目でやり過ごそうとしていると、ジャンがポツリと呟く。

「女の子？」

その言葉を聞いた瞬間。ミヤビの中に眠っていた恐怖心と睡魔に包み込まれ、意識がとんだ。

曖昧模倣な怖がり少女（後書き）

どうも！レイです。

今回はミヤビ視点のお話となっております。

最後のシーンは、前回と比べてもらっても面白いかもしれません。途中で改行があまりできず、セリフでページが黒々としてしまい、読みにくいと感じた方は申し訳ありません。

今回は通常視点で色々切り替わると思います。

それでは次回も。

b y
レイ

危急存亡の霧少女

「どういうことだ・・・」

アデルバの中心街の戻ったロゼットは、思わず零す。

それも今の状況を見れば誰でもそう言うだろう。それほど今の状況は絶望的かつ驚くべき物だった。

「門が・・・」

魔獣が市街地に入り込むを防ぐためにおろしているはずの防御門が開いていたのだ。正確に言えば、嚴重に管理されているこの門が開いたということは、誰かが開けたのだ。

経緯はどうであれ、問題なのは民間人が活動しているこの時間帯に魔獣が入ってきたら危険極まりない。

先ほど来た電話ではユレイダから、他の門まで開いていたための応援要請だった。

「仕方ないわ。ロゼット、こっちに残るわよ。状況によってはみんなを呼ぶわよ」

「了解」

本来はそちらに向かうべきなのだろうが、リースが臨機応変な対応としてこの警備をする事を決める。

リースがその旨をユレイダに伝えようと携帯を取り出した瞬間。

「キヤアアアアアアア！！」

霧の向こうから女性の悲鳴が聞こえてくる。続いて荒々しい魔獣のような呼吸音が聞こえてくる。

ロゼットはチツ、と舌打ちを一つ打つと、リースに報告を続けるように促してから声のした方向に走る。

駆けつけると、そこには狼型の魔獣が3匹ほど紛れ込んでいた。それに囲まれるようにして女性が二人がうずくまっている。

「リース！！人員誘導を頼んだ！！」

姿の見えない霧の向こうに叫ぶと、ロゼットは近くにあった鉄製の

柵を一つ千切りとる。無理やり折ったり、馬鹿力を使ったりするのではなく、金属自体をやわらかくして少ない力でも取れるようにしたのだ。これがロゼットの能力。メモリアハンス「記憶の手」である。

この金属原子の状態変化を自由にする手で千切った柵の一部が見えるうちにナイフの形に変わる。それを魔獣の中心に投げ込むと、ひるんだ魔獣が飛び退いて女性たちから離れる。

その隙を見逃さず、ロゼットが女性たちを逃がすと、狼はロゼットに体の向きを正す。ナイフをどんどん作って投げつけるが、威嚇程度にしかない事はロゼットも分かっていた。

意外と素早い狼たちの引つかきやかみつきを寸でのところ交わしていると、ついにナイフがなくなる。

「ロゼット!!」

それと同時にリースが霧の向こうから現れる。「思ったより人が多いわ。最低でも10分はかかるから足止め頼んだわよ」

「離れて貰えば3分で終わる」

「分かったわ」

ロゼットの意図を察したリースはくるりと身を翻す。「皆さんこっちです！貴重品以外の重たい荷物は一旦その場においてください！子供連れの方は手をつなぐかおんぶや抱っこで離れ離れにならないようにしてください！！落ち着いて！！」

迅速かつ明快なリースの誘導によって、周囲から人の気配が遠のいたところで、ロゼットは柵をすべて引っこ抜いた。

「久しぶりだね、お兄さん」

ミステインは嬉しそうに微笑む。久しぶりと呼べるほどでもないが、数日振りに見るその顔の変わらなさに、レディットは少しだけ口角が上がる。

発見報告のために先ほどアネモネにも電話したが、なにやらアデルバで大きな任務があるとのこと、結局は一人で追いついた。結構な大問題が起こっているようだが、事実ながらも目の前にいる少女

も大問題の元凶であるとレディットは踏んでいたので追いかけてきのだ。

ミステインを幽霊だと思い込んで気絶してしまったミヤビを置いてきたのは少しだけかわいそうに思ったが、すぐに目覚める様子もなかったので良いかなどとレディットが思っていると、ミステインが急に笑い出す。

「それにしてもレディットにいつもついているお姉さんは、ホントに私を幽霊だと思ったのかな？二人を見つけておふざけ半分でやってみたら大成功だったからビックリしたわ」

「君な・・・」

それを言われると、そのただのおふざけ半分に引つ掻き回されているマルフの生徒たちや、ミヤビがいたたまれなくなってくる。今考えば、ミステインにもそれとなく幽霊っぽい要素がない事はないフランスドールの如く小さな体躯、マトリョーシカの如く白い肌も含めればそれなりかもしれない。

でも今大切なのは事態の解決であり、子供の遊びにまともに付き合えるほどレディットも暇ではなかった。そこでレディットは、ミステインの目的が鬼ごっこにあれば、捕まえる事で何かを聞き出せるのではないかと考えたのだ。

「暇だったから良いでしょ？最近お兄さんもお姉さんたちも見なかったから」

「家に帰ることは考えなかったのか？」

迷子のお子様に対するお子様な質問をだめもとでしてみると、ミステインはあごに手を当てて考えこんでいる。考え込んでる時点で期待は薄れていたが、ミステインは何かをおもって、キツと顔を上げる。

「うーん・・・思い出せない！！」

その言葉にレディットのひざから力が抜ける。こんな流れは誰かさんのときに経験済みだったが、さすがにここまできつぱりといわれるとは思っていなかった。

「でも捕まる気はないからね。いつでも挑戦待ってるよ」

「じゃあ・・・」

レディット言うと同時にミスティンが身構える。「今回は捕まえさせてもらっぞ！」

その一言がレース開始のゴングであるかのように、二人同時に駆け出す。もちろん十分大人であるレディットのほうが足は速いのだが、如何せん霧の中なので見失わないのに必死で、逃げるほうが圧倒的に有利だった。

木々の間をスルスルと抜けていくミスティンを霞む視界の中で何とか追っている、少しだけ周囲の空気が重くなり、嫌な予感がレディットの脳内をよぎる。

しばらくミスティンを追っているとその予感の源が分かる。本来魔獣のいる区域とある程度の広さで市を隔離している魔獣の嫌がる細胞が埋め込まれている地面の防壁が無くなっているのだ。つまりそれはほとんどアデルバから離れていつてることを意味していた。

（市のほうで管理しているはずの防壁がなくなるということは・・・

）

そう考えるとアデルバに何か異変が起こっているのではないかと、少しだけ不安になる。

「お兄さん！よそ見していると危ないよ」

ミスティンの一言で現実の世界に引き戻される。それと同時に木の陰に気配を感じる。

一旦とまり、刀を太ももに固定した鞘から取り出すと、力を込めて木を切り倒す。ザッ！、と音を立てそこから勢いよく飛び出してきた魔獣の一撃を交わすと、体勢を立て直して叫ぶ。

「ミスティン！逃げるんだ！！」

これでミスティンもさすがに逃げるかとおもったが、そこはこの少女の好奇心の測り間違えだった。全く逃げる様子やおびえる様子など見せず、むしろレディットが魔獣と闘うのを楽しく観戦しているようだ。

「仕方ない・・・そこから動くなよ！」

レディットは早めにけりを着けるために、炎を出そうとするが・・・

「炎が出ない？」

勿論、コツを忘れたわけでも、急に能力が体から無くなるなんてことはありえるわけでもない。ただ単に出そうとしても何らかの力がそれを拒んでいるような感覚だった。

そんなこんなで初めての経験にレディットが戸惑っていると、魔獣にとびかかれ、胸元を爪で切りつけられる。

「クツ！・・・」

少しばかり衝撃を軽減しただけなので、見事に制服には傷がつき、皮膚が切れた血まみれの肌があらわになってしまっている。タイムラグもなしに飛んでくる次の攻撃をギリギリでかわす手立ち上がると、やつと痛みが薄れる。

「お兄さん、大丈夫？」

呑気なミステインの声援を耳に、今度は正々堂々真剣で斬りつける表皮に傷をつける程度で、たいしたダメージにはなっていないようだが、こちらが受けたダメージもそうでもないの、攻撃は見える右腕の振り下ろし、噛み付きをかわして、何回もきりつけているうちによやく手ごたえを覚えてきて、36回目にしてやつと無力化できた。

「・・・よし」

アデルバ周辺魔獣の異常な強さに汗をかきながらも、辛勝した。

「よし！それじゃ、鬼ごっこ再開だね！」

鬼のような一言を吐き捨てると、ミステインはまた走って霧の向こうに消えていってしまう。

勿論手負いで追いかけるのはきつい。かといって魔獣のいる地域で女の子一人をほったらかしておくわけにも行かないので、レディットは仕方なくまた追いかけ始めた。

それでも嫌な予感はず、さらにポケットの中の携帯がなっているような気がしたが、そのときのレディットは全く気に止めなかつ

た。

「もしもし？・・・フォーゲルね！ひさしぶり！！」

「えっ」

ニーナの携帯の元にかかってきた電話の相手に、ミヤビはおもわず小さく声を上げる。

「・・・え？ミヤビちゃん？うん、今代わるわ・・・」

そう言つてニーナはミヤビに携帯を渡してくる。そのかわいらしいピンク色の携帯を受け取ると通話口に耳を当てた。

『もしもし、ミヤビ君かい？』

とても焦つたような口調のフォーゲルがでる。『すまないね。私とニーナは特務班で会つて以来旧知の仲なんだ。それよりも、レディット君に連絡は取れるかい？』

「あ、やつてみます・・・」

二人の意外な関係に少しだけ驚きつつも、自分の携帯を取り出すとフォーゲルとの電話を切らないままレディットの番号にコールする。が、いつもで立つても無機質な呼び出し音が響いているだけで、レディットが出る気配はなかった。

「出ませんね。いつもなら3コール以内には出るのに・・・」

『私がかけてもこの調子なんだ。支部長から応援要請が出ているんだがな・・・まあいい。ミヤビ君はレディット君を探し出して、見つかったらギルドまで戻ってきてくれ』

ミヤビの思う以上に緊迫した状況なのか、すぐに電話を切られてしまう。

レディットのことを任されてしまったが、どこに言つたのかなどは全く皆目見当もつかない。

ミヤビは少しだけさっきまでのことを思い出す。幽霊の噂に吊られていたが、今考えてみればあの少女どこであった事があるきがする。それどころか、今追いかけている少女に似ていたような・・・

「！」

想像と考察をしているうちに恐怖で全身の鳥肌が総立ちになる。ミヤビはぶるぶると首をふり、怖さを吹き飛ばすと、ニーナに携帯を返して立ち上がった。

「ちよつとレディットを探してきます」

「心配なの？」

「ち、違います！頼まれたからです！」

もろに心を読まれている事も知らずにミヤビが外に出ようとする、ニーナが腕をつかむ。

「ちよつと待つて。これをもつていくと良いわ」

そう言つてニーナはよく分からない地図のような画面が表示された小型の端末を渡してくる。おおそのこのあたりの地図と、現在地を示す青いマーカーのほかに、一つだけ赤いマーカーが点滅している。だが見る限りはスピーカーやアンテナなど、通信的な機能はついていないように見受けられる。

「これ、なんですか？」

「実はさっき姉さんたちが来た後に、レディット君の制服に簡易発信機を忍ばせておいたの。ミヤビちゃんがどうしても嫌な予感がしているようだったから」

「発信機！？」

どうしてそんな物を一学生が持っているのかは猛烈にミヤビは気になったが、とにかく急いでいるため、ニーナがレディットの衣裳部屋に向かった意図を把握すると、お礼を言つて部屋を出た。

「追い詰めたぞ・・・」

ついにミスティンを追いつめたレディットは止血もしないで走つていたためフラフラだったが、にこりと齒を見せて笑った。

後ろには建物が一つだけあるが、それもどうやら使われていないらしく、全く人の気配がしない。

ミスティンも「むむむ・・・」と困った表情を見せている。

一般人かどうかは別として、子供との遊びにここまで本気で付き合

ったのはレディット自身はじめてであつた。恥ずかしながらもうアデルバがどちらにあるのかも分からない。

「かくなるうえは！・・・とう！！」

最後の抵抗に、ミスティンは行き止まりと分かっているはずの建物へ逃げ込もうとする。

だが、ミスティンが振り向いた瞬間、草むらから二人の男が飛び出してミスティンを薬で眠らせる。

「！！」

片方がミスティンを担ぎ、その建物の中に入る。レディットも追いかけてようとするが、もう一人の男が行く手を阻む。

手に警棒とサブマシンガンをもっているところを見ると明らかに一般人ではない。更に丁寧にサングラスと帽子を深くかぶり、身分がばれないようにしている。

「あなた達か・・・さつきからずっと僕らを見張っていたのは」

「・・・」

男はまるでレディットの質問に答えようとはしないが、腰を低くして警棒を構える。

「肯定、だな・・・」

ミスティンを助け出すべく、レディットも刀をぬく。見たとおりの傭兵まがいの輩ならばレディットの相手ではないが、そうなる出てくる雇い主の正体が気になった。

しかし、聞いたところでどうせ答えてくれるわけもないので、レディットは呼吸を整えると、地面をけつた。

先手必勝。そんな単純な展開を繰り広げてくれる相手だつたら楽だったが、さすがにレディットの初撃はかわされる。それでも体勢を崩すことなくレディットが振り返ると、意外に早い男の警棒が振り下ろされてくる。

「予想以上だな・・・」

それをかわすと、レディットは感嘆の声を漏らす。

能力にあまり頼らない派のレディットの動きはなかなかすばやいは

ずなのだが、なにとなくついてくる男との戦闘に、レディットは久しぶりに興奮してしまった。

今度は男のほうから走ってくる。低い姿勢から繰り出される警棒の振り上げをレディットがかわしたと思ったら、警防が一回光り、レディットの腹部に謎の一撃が叩き込まれる。

「クッ!!」

浅い一撃ながらも、まだ閉じきっていない先ほどの傷口に叩き込まれたので、レディットは予想以上のダメージを受けた。

しかし、それよりもレディットが気にしたのは、かわしたはずの攻撃がなぜ飛んできたのかであつた。何らかの能力ならば説明がつくが、男自身が能力を使っているというよりも、武器自体に追加ステータスとして備わっているような攻撃の飛び方だつた。

考える暇もなく、男が追撃をしてくる。今度は刀で防いで見る、が、火花散らしてぶつかる二つの武器とは他にどこからか攻撃が飛んでくる。

(どこからだ!!)

攻撃を受けて後ずさりながらもレディットが目を凝らすと、警防が二股に分かれていて、その片方がレディットに攻撃をしていた。

(そういうことか・・・)

しかし、レディットが謎を解き、打開策も思いついたところで男は警棒を捨ててマシンガンを構える。

「時間がないので早めに終わらせます」

初めて口を開いたかと思うと、男は何のためらいもなくサブマシンガンの引き金を引く。

消音機能もつけてない銃の音が森に響く。いつもとは違い、レディットは炎による防御が使えないため、木の陰に隠れながら接近を試みる。

「キャアアアアアアアア!」

と、不意に建物の中からミスティンのものと思われる悲鳴が響いてくる。

「一か八かだな・・・」

これ以上戦闘を長引かせるとミスティンが危ないとふみ、レディットは木の陰から飛び出す。全力で男の足元に駆け寄り、足払いを仕掛ける。霧のおかげで、レディットが良く見えなかったのか男は転ぶ。

追い討ちをかけ、レディットが馬乗りになろうとすると、男が銃口をレディットに向ける。

「甘い!!」

レディットは刀で銃口をそらす。弾は狙いがそれてあらぬ方向に飛んでいく。

（よし、勝った!）

レディットそう思った瞬間、男の持つ銃はまた二股に分かれ、もう一方の銃口はしっかりとレディットを捕らえていた。

「クッ!!」
フレイル

レディットは反射的に炎をともしようとする。が、やはり炎は灯らず、放たれた銃弾がレディットの着ている制服の襟の部分を吹き飛ばす。レディットの鎖骨の辺りから血が噴出すのと同時に、右腕に少しだけ炎が灯る。それが男の体を包む。

（そういうことか・・・）

レディットが炎が灯らない原因を思い出したところで、男の2発目の銃弾が腹部をえぐった。

あつという間にレディットの周りには血溜まりが出来る。男も力尽きたのか、その場に倒れ付す。

（体に力が入らない・・・）

迫り来る「死」というものをレディットが感じていると、景色が暗転する。そこには一人の少年が立っていた。まだ幼さが残る中性的な顔にアッシュブロード。それは幼き日のレディットだった。

「君と僕的能力はそんなものだったかい？」

レディット少年は不意に問いかけてくる。「君と僕的能力はそんな能力じゃない。『炎』じゃないんだ。」

霧の中でいくら水分が多かったって、制服を着ていたって、能力の質を変えてやればいいだろう？」

ボーっとする頭で、レディットは言葉の意味を理解する。

「君は僕で、『炎^{フレイル}』の能力者だ。こんなところであの子を放り出すわけにはいかないよ」

レディット少年のその言葉が、レディットの中の記憶を走馬灯のよう駆け巡らせる。

そして、レディットは腹部に手をやると、『炎^{フレイル}』を発動した。

危急存亡の霧少女（後書き）

どうも、レイです!!

今回のお話は基本レディット視点で、バトルを交えてお送りいたしました。

次回に受け継ぐ形となっており、後2、3話でミスティン編は終わります。

難しい表現などあったら申し訳ないです。

それでは次回も。

byレイ

危急存亡の濃霧少女

「ッット　　レ・・ッット、レデ・・ト!!」

誰かに名前を呼ばれている気がする。手を伸ばせばその声の元に手が届きそうなのに、けだるい体がそれを拒むかのように重さを増して来る。

その声はレディットは虚ろな意識の元に記憶を引き戻してくる。

そう。思い出した。謎の男との先頭で二発も体を打たれ血がどんとん体から抜けていき、止血が出来る状況でもなかった。だからレディットは　　死んだはずだった。

だとしたらここは死後の世界なのだろうか。じゃあ知っている気もするこの声は誰の物なのだろうか。なぜレディットを引き戻そうとするのか。うまく頭が回らず、何も分からない。

^{フレイル}炎を防御に使えなかった理由。一つは、レディットはすっかり忘れていたことだが、リースがこの制服には能力を抑える装置が入っているとか言っていたからそのためだろう。二つ目も至極単純で、空气中の水分が多いからこそなる霧の中で、「燃える」炎をだすのは無理難題であるということ。

だが、そこでレディットは思い出した。危なげのない日常で忘れていた「^{フレイル}炎」の本質を。

「そうだ、あの後僕は^{フレイル}炎で

」

暗闇の中でポツリと呟く。その瞬間、今までの暗闇に光が差す。

「レディット!!」

目を開けると、そこには目いっぱい涙をためたミヤビがレディットの手を握って祈るように叫んでいた。その後ろから差し込む日差しにレディットは思わず目を閉じる。どうやら日が変わってしまったようだ。

そんなミヤビも、レディットが目覚めるのに気づくとゴシゴシと涙をぬぐって咳払いをする。

「よかった・・・無事で。でもこんなところで何やってるの!？」
(そうか・・・暗闇の中での声は・・・)

ミヤビの顔と、いつもの強がりを見ると、今まで冷たかったように感じた体温がどんどん上がっていく。

そしてふと撃たれたはずの二つの傷口を見ると、どちらも凍っている。それは二つとも、炎の力によって凍らされた物だった。

死を感じたときにふと現れた幼き頃の自分。その言葉通り、レディットの炎は、炎の形をしているだけで、実は他の色々な性質も兼ね備えている物だった。凍らせることも出来たなら

安心。レディットの脳内にはその言葉しかなかった。それにより口元がほころぶと、ミヤビが訝しげな顔をする。

「何笑ってるの!？」

「いや、心配してくれたんだなって」

「ち、違いわよ!!文化祭前なのにいなくなるから、みんなに探しにいつて!!」

レディットの何気ない一言に、ミヤビは分かりやすく反応する。確かに、ミスティンを追いかけて始めてから文化祭の事など忘れていたが、隣に転がっている制服はボロボロで、使い古しの雑巾みたいだった。

ミスティンを追いかけたのも、最後に劇の稽古をしたのも昨日の事なのに、何だかレディットには遠い昔のように感じる。

(・・・ミスティン?)

自分で口にしたその言葉がレディットの中にぐるぐると回る。そして思い出す。

「・・・ミスティン!!」

レディットは忘れていた。今までミスティンを追いかけて、そして不甲斐なくも相打ちになってしまった事。それにより今自分がここにいる事を忘れていた。

思わず立ち上がるが、レディットの予想に反し傷口には全く痛みが走らなかった。凍っていて感覚がないだけなのか、これも炎の恩恵

なのか分からないが、今の状況ではありがたい。

「ちよつとどこいくの！？制服も血だらけなのに！！」

当たり前だが、レディットが方向もわからずに帰ろうとすると、ミヤビが立ちふさがる。

「ミステインがさらわれたんだ！！二人組みの男だった。この建物の中にいるかもしれないんだ」

さすがにさらわれた事については驚いたのか、ミヤビも少しだけ考え込むようなしぐさをすると、仕方なく道を開けてついてきた。

「うわっ！・・・」

建物の中に入るなり、ミヤビが咳払いをする。「埃だらけじゃない人が管理していないのね・・・」

確かに建物の中は廃れている。埃が大量にたまり、レディットたちが動いたびに舞い上がるし、くもの巣は数えているときりがないほどで、縄張り争いでも起こりそうだ。

ミヤビによれば、ここはアデルバの北西3kmほどのところらしく、ミステインまでそんなに走っていたのかと思うと、さすがにレディットは驚いた。

「でも、意外とちゃんと使われていたみたいだな。資料がきちんと管理されている」

レディットは適当なデスクの引き出しから一枚の紙を取り出す。その内容は、『ロツテスユリ』の活用法と、その薬の生成方法など、レディットが聞いたこともない名前ばかりが挙がっている論文だった。

数秒見ているうちに興味を失い、机の中に資料をしまつと、奥へと足を進める。

扉をいくつか潜り抜けたところにあつた部屋で、二人は足を止める。それまで部屋を素通りするだけのレディットと、それを小走りで追いかけるミヤビの足を止めるだけの物がそこにはきちんとあつただ。

「レディット・・・これって・・・」

「ああ、何かの宗教のマークか何かだろう。それにしてもこの大きさは・・・」

そこには、30畳ほどの部屋の床を埋めるほどの大きさで書かれた紋章か何かのような物があつた。茨に捕まり、胸をナイフで貫かれて血を流しているフクロウが描かれたそのマークは、とあるマークに似ていた。

「これはシェダールの国章に近いな・・・」

レディットの知識が正しければシェダールの国章には、鋼鉄の籠手と木に足をかけたフクロウが描かれていて、それは自然の象徴である『木』と、人類の発明としての『籠手』の共存を意味しているのだ。

それを知っていたのか、ミヤビも興味深そうに口を開く。

「でもこのマークって、真逆の意味をあらわしてるのよね。多分『自然と発明により国が壊れる』見たいなことがあるんだろうけど、意図がわからない?」

「そうだな・・・宗教と仮定するならば、国家に対する反逆的思想に偏った物と思って良いんだろうが、研究施設にこんな物を描いていたら国の監査が入ったときにはばれるだろうし・・・」

「そうね。結局ミスティンもないみたいだし」

「ああ・・・とりあえず帰るか」

意図が不明瞭なまま、とりあえずミヤビの持っていたカメラで写真を何枚か撮ると、特に大きな収穫はないまま研究所を後にした。

アデルバについたのは、研究所を跡にしてから3時間もたつてからだった。

ギルドの出勤時間には間に合ったが、一応レディットは怪我人だし、案内人がミヤビなので、何度も迷いそうになっていた。

ずっと抑えているうちに傷口の氷は解けてしまったが、能力者特有の回復力と、固まった血で何とか銃創はふさがっていた。それでも

ギルドのみんなや学園のみんなに心配をかけないようにと、ミヤビの上着を借りて傷口を隠している状態だった。

「病院に寄ったら？時間もあるのよ？」

さつきからミヤビはこの調子で、5分に一回は同じ質問をしてくるので、嬉しいのだがその心配は逆にレディットを疲れさせていた。

「だめだ。僕がヒロインをやる事になった以上、休むわけにはいかないし、それに・・・ミヤビ一人に家事を任せるのは心配だから」

「ちよつと、何よその言い草は！！人がせつかく心配してるのに！！もう知らないからね！！」

レディットが24回目の回答にしてやつと一言多く減らず口を叩くと、ミヤビはそっぽを向く。少しだけかわいそうかとも思ったが、血が足りずテンションの上がない今のレディットにとっては、かまってくれないぐらいがちょうど良かった。

それでもミヤビは、レディットが少しでもふらつくと、どこにいてもすぐに飛んできた。

そんなこんなの良いく分らない関係のまま特務室につくと、出勤時間前なのに中には珍しく特務班のみんなとユレイダがそろっていた。

「レディット君！！無事だったのね！！」

これまた珍しく、険しい表情で喋っていたリースは、レディットの姿を見ると椅子を倒して声を上げる。

その声に応じてみんなもすばやく振り向いたので、レディットはさすがに動揺した。

「私がみんなに言われてあんたを探したの。非常事態なのに行方不明なんて・・・」

「非常事態！？何かあったんですか？」

ミヤビの一言に反応してレディットも声を荒げると、傷口に激痛が走る。

「やっぱり怪我してるのね」

リースが予想の範疇であるかのように呟く。どうやらレディットの些細な気遣いなどお見通しだったようだ。心を読めれば当たり前

ことなのだが。「病院は・・・行く気はないみたいね」

「すみません・・・それで皆さんは何を？」

みな口々に言う『緊急事態』の意味が分からないレディットは、不思議に思っていた。町に戻っていた時も、所々壊れていたり、厳戒例が敷かれたりしていたらしく、アデルバの変わりようはなかなかだった。

それでも霧はかかっていたため、ミステインはまだ近くにいるとわかったため、急がずにここに戻ってきたのだ。

「色々ありすぎたから、少しづつは話すわね。昨日午後6時ごろ、魔獣の侵入を防ぐためにおろされていたつり橋形式の防御壁とフェンスが壊されたの」

「・・・！」

レディットは思わずいくつかの単語に反応する。時刻も状況も、ミステインとの鬼ごっこのときに感じた異変と同じだった。

「・・・それは知っていたよね。その後、それにより魔獣がアデルバに入り込んでしまったの。勿論人も出歩いていたから大混乱になって、ギルドと警察が駆り出されたわ。苦情も来ている。でも問題はそこじゃないの」

「誰の意図したことが、ですね・・・」

今までの事から、解決すべき謎はそれだけだった。人為的にしか動かせない装置を、ハッキングによる遠隔操作にしろ、直接制御したにしろ、それだけの大事をやるだけの動機さえ絞れば、犯人も見えてくる。

「アデルバを混乱に陥れるだけが目的ではないでしょうし、組織的な犯罪と見て間違いはないわね」

「確かに同時進行できるほど簡単な事でもないですしね」

「うーん・・・あれ？それよりレディット君はミステインを追いかけていたのよね」

会話の途中で、リースがふと思い出したかのように呟く。「その様子じゃあ結果は振るわなかったようだけど、怪我と何か関係がある

の？」

さすがに女の子との鬼ごっこで胸に切り傷、わき腹と肩を鉛弾で撃たれる奴なんていない。レディットは一瞬だけ戸惑ったが、嘘をつくのも無駄と、簡潔に今までの事を説明した。

「それは・・・」

すると隣で黙っていたユレイダが、知っているかのように声を上げた。「確証はないが、もしかしたらリヒティヒと関係があるかもしれないな、アデルバの機能を止める事で、ある程度動きを柔和かつ迅速に出来るようにしていたのかもしれない」

「リヒティヒ!？」

たしかリヒティヒは法に触れないギリギリの水面下で動いているといていた。そんな組織が動かざるを得ないほどの事態とは、どうにもレディットたちだけで入り込める気がしなかった。

だが、リヒティヒがなぜ犯罪まで犯してミステインを誘拐し、それによりどういう利益を狙っているのかにはレディットも疑問を持った。

「目的は何か分からないがね。大事ならばテロもあるかもしれない」

「解決の糸口はやっぱりミステインと霧ですね」

「でもレディット、ミステインの居場所って分かるの？」

「あ・・・」

さつきからミステインのことを考えていたレディットも、いつもぶつかる壁はそれだった。

ふがいないくもレディットが逃がしてしまった男と、戦っていた男も姿はなかった。闘っていた男が自力で目覚めたり、仲間が来たのだとしたら、レディットは見逃されたという事になる。それはそれで腹が立った。

「霧の濃ささえ敏感に分かればなあ・・・」

ミヤビがポツリと呟く。ミステインのいるところは霧が濃いという法則をのべたものだったが、それを聞いたレディットは、荒々しい

が一つだけ作戦を思いつく。

「成功するかは分かりませんが、少しでも時間をください」
そういい残すと、レディットは用意のために自室へ引き返した。

危急存亡の濃霧少女（後書き）

どうも、レイです。

今回のお話はレディットの能力について触れてみました。

ミステイン解決、学園祭、『紅きノアルの奔走』、の3話でミステイン編を締めくくりますが、一つだけ問題が。

こちらの勝手な事情により、この3話を完結するのに4ヶ月かかってしまいそうです。

申し訳ないのですが、いまここで投稿日を予告します。

次話・・・11、13日 次々話・・・12、28日 3話目・・・
2、8日

に設定いたしますので、この日の17時には投稿いたします。

待ち遠しく感じていただく方もいるかもしれませんが、次回もまた。

byレイ

危急存亡の青空少女

「あ！ごめんねレディット君！」

あわただしくミーティングを終わらせたアネモネがかけてくる。

ミスティンを見つけるアイデアを思いついたレディットは、リースたちに通常任務は任せながらミヤビをつれて、アネモネの所属している部署まで同行を求めてやってきていた。が、傷のことはさすがにアネモネには内緒にしていた。

「昨日のことにおわれて。お偉いさんは何かの事情であの少女に霧の原因があることを認めたくないらしいの」

ギルド側としても、霧が立ち込める事態の終息を急ぐために下手に人員を割くわけにはいかない理由があるらしい。それについては、レディット自身もユレイダに相談してみたが、沈黙を貫くばかりだった。

難しい事情を貫き通さねばならないのは分かるのだが、事態が事態なだけにさすがに腰が重すぎるのではないかとレディットは心配になる。

「そうか・・・まあ、それはいいんだ。それよりもこれ以上もたついていると状況は厳しくなるから、アネモネさんにも協力してほしいんです」

「何か手立てがあるの？」

「はい。ちよつと乱暴だけど、一つ作戦を思いつきました」

「どんな作戦？」

「えっと、ミスティンのいると思われる地域がこの霧のかかっている圏内で、ミスティンに近づくにつれ霧が濃くなる事は実証済みです。だから、霧の濃いところに到達したら、そこにはミスティンないしは誰かがミスティンを連れた人間がいます。当然霧でぬかるんだ道には足跡があるはずなので、僕が能力で地面を凍らせて、足跡を探しやすくします」

地面を薄く凍らせれば足跡がより浮き出て見つけやすくなる。そんな安直な考えしか思いつく猶予もないくらいに事態は差し迫っていた。

この作戦に重要なのは、レディットの体力と時間。

昨日から完全に回復しているとはいえないレディットの体力では、足跡を探し出すまで氷の炎を出し続ける事が可能であるかは厳しい。霧の範囲といっても、アネモネを入れて3人で搜索するには厳しい過ぎるといっても良いほどに広い。

ミスティンが移動してしまう事も考えると、悠長な事は言ってもらえない。

「時間がないので、これ以上は考えられません。出来れば今にでも出発したいのですが」

「分かったわ。十分待つてください。その間に準備を」

早急に話し合いを済ませると、アネモネは宿舎のほうにかけていった。

「確かに近づいてる感じはするね・・・」

アネモネがよりいっそう濃くなるきりの中で呟く。

確かにレディットの普通の炎も全然灯せそうにない。氷の炎はむしろ空気中の水分を利用できるので楽だった。これは2つともこれは霧が濃くなった証拠の一つだ。

最初は彼女も能力者の行動についていけるかを心配していたのだが、戦闘はレディットが担当する事を聞かせると、なんとなくにも安心したようだ。

アネモネは自分いわく、『これ以上普通の人間はいない』というほどの自信のなさで、ギルドもギルドでなぜそんな20歳にも満たないアネモネに任務を託したのか分からなかった。

「この辺で良いかな・・・」

「もうやるの？」

心配性のミヤビはいつになく怖がりで、強がりと言う暇もないよう

だ。

「ああ。時間がない。凹んだ部分の光の反射を見やすくするくらいの薄さの氷なんで、多分5分ぐらいで全部とけると思います。その時間ごとに氷を貼りますので、足跡を見つけたら携帯に連絡を」

「わかったわ」

「それじゃ・・・」

レディットはうろ覚えの力の残骸を手に集める。薄く広くの感覚を体にねじ込み、冷たい熱を捕まえる。

レディットがそれを解き放つと、わずかに青みがかった氷が当たり一面に張られる。

「今です！！」

レディットの合図で3人はそれぞれ別の方向に走り出した。

脂汗が滲み、動悸が激しくなる。さすがに能力を使いすぎたようだ。6回目の氷の炎を張ったところで、レディットは少しだけ腰を下ろす。もうかれこれ30分は経とうかというところ、体力は着実に落ちてきていた。

足跡といっても、わずかに光の反射が周りと違うので、一瞬きらりと光るぐらいの変化しかない。それを探し当てるといのはいろいろな面で無理があることを、今更になってレディットは思い知る。レディットが少しだけサボりそうになると、視界の隅で光る何かによって引きとめられる。

「あれは・・・！」

近寄ってみると、ぬかるみで少しいびつな形をしているが確かに足跡だった。

減った体力が少しだけ回復したような気になる。

レディットは携帯を取り出すと、探すのに夢中で出ない二人にメッセージだけ残し、その場に二ーナから受け取った発信機(?)を置いて足跡をたどった。

足跡は直実が続いているが、レディットには気になる事が一つあっ

た。

「足跡が深すぎるのか？」

機能の男たちが残したにしては、その見た目から受ける質量からして合点がいかないほどに足跡が深い。それに追跡を攪乱するためか、不規則に足跡がつけてある。

レディットが倒した男のうちの一人を担いでもう一人の男がきたならこれくらい深くなるのは分かるが、ミスティンも含め二人を運ぶには、さすがにその男では非力すぎる気もしたのだ。

運べる可能性があるとするれば、それは能力を持っていること。だが能力者というのは、見るものから見れば一瞬で見抜ける。レディットもそれが出来るよう昔誰かに教え込まれた記憶がある。

「誰だったかな？ロレントの人だったか、いやもつと前だな・・・」
レディットは一人寂しく四苦八苦するが、全く答えが出る気がしない。そんなに生きてもないのに物忘れがひどくなった事に、レディットは少しだけ悲しくなる。

そんな無駄な事で気を紛らわせながら足を進めていると、草木の生い茂っていない場所に出る。

そこにいたのは

「ミスティン！！」

森の中にあるはずのない奇妙な装置にミスティンがつながれていた。助けようと走り出すが、当然黙っていない物が一人、木の陰から現れる。

「お前か・・・」

レディットが研究所前で戦ったのとは違う男だが、背格好は全く一緒だった。

男はレディットが来る事がある程度予想していたのか、すでにバトルグローブをつけて警棒も持ち、臨戦態勢に入っている。

それを見てレディットも腰から刀を引き抜く。

「その少女を返してもらふ事はできませんか？あなた方の目的は知りませんが、こちらとしても穏便に引き渡してもらえると幸いです」

無理とわかりつつもレディットは交渉をしかける。

男は少しだけ考えるような動作をするが、すぐに口を開く。

「それはこちらとて同じ事。仲間を一人やられた」

それだけ云うと、男は足を一步引いて完全に構えた。

レディットもそれを見ると、ため息を一つ吐いてから刀の刃を男に向けて腰を低くする。

「残念。闘いたくはなかったのが・・・」

レディットがそう呟くと、2人の間の空気が張り詰める。まるで戦闘開始のゴングでも待っているかのように、嵐の前の静けさがしかれる。

「力ずくでも返してもらうぞ！」

レディットのその一言が開始の合図となり、2人同時に地面をける。単純な身体能力ではレディットが上。男より早く間合いを取ると、刀を引き抜いて先手必勝の一撃を打ち込む。

男も黙っておらず警棒をかざす。レディットの一撃をギリギリで防ぐと、どこからともなく攻撃がレディットの左腕に叩き込まれる。

「クッ・・・」

レディットは間合いを取ると、驚きの事実に見開く。「あの男と同じ能力だ?!？」

男は何も反応を見せないが、レディットは確かに見ていた。今の男が持っている、昨日の男と同じ警棒。使っている人間は癖に違いがあるため違う人間であるのは明らかなのだが、持っている武器が何股にも分かれる。

これは昨日も見ただけの能力だった。世の中に同じ能力は存在しないはず。なのに同じような能力が生まれる。いくつかの可能性がレディットの頭の中に浮かぶが、とある可能性ばかりがよぎった。

レディットの逡巡を見抜き、何か知られたくないことでもあるかのように男が攻撃を仕掛けてくる。

「クソッ、どういうことだ!?!」

レディットも軽々とかわすが、男の二股警棒が飛んでくる。一度見

た能力なのでかわせないこともないが、後ろとびで衝撃を殺しつつ
レディットはあえて見た。

(……!!)

すると、男の手の部分の一つだけおかしな所に気づく。

だがレディットが見とれている間に男の一撃が傷口のある腹部に叩
き込まれる。

「ガッ……!!」

思わずレディットの口から苦痛の声が漏れ出す。どうやらリリースが
閉じてくれた傷口が開いてしまったようで、コートに血が滲んでい
る。

「レディット!!」

レディットがわき腹を抱えていると、マーキングをたどってやって
きたミヤビが叫ぶ。

ちようど悪いタイミングで来てしまった。今度こそ入院させられる
事を覚悟しつつも、レディットは手に力を込める。

「大丈夫!? 傷口が……」

「問題ないよ。ほら」

レディットがコートのすそをひらくと、傷口は見事に凍りついてい
る。

勝機と見た男も、2人相手ではムリだと踏んだのか襲ってはこなか
った。

つくづくミヤビが能力者に見られて良かったと安心しつつも、レデ
イットは立ち上がる。

手負いのまま闘うのは厳しいが、レディットにはまだ氷の炎が残さ
れている。

「すまないな。続きといこうじゃないか」

男に向かい刀の先を真っ直ぐに向ける。強がりだと分かっているも、
まともに動けない事を相手に悟られてしまっただけは負けが決まったよ
うなものだ。

男もさすがにレディットの強さに敬意を表したのか、これまたサブ

マシンガンを取り出す。これも昨日の男と同じ物だとすれば、何股にも分かれて銃弾を撃ってくるはずだ。

レディットは傷口を押さえつつ男の懐にもぐりこむと、峰打ちで警棒を弾き飛ばす。

男自身も警棒を凶にして、銃口をレディットの頭につきたてる。

（今だー！）

レディットは傷口から手を離す。その瞬間に氷が解けて傷口から血が吹き出るが、それをいとわず男の銃を握る手をつかむ。

「その能力の謎は解けたぞー！」

そういうと、レディットは男の指を銃の引き金と共に凍らせる。それに続き蹴りでその銃を壊す。

「・・・！！！」

男も驚いたような表情を見せると、今度は自分から飛び退いた。

レディットの予想通りかつ、最初からレディットの予感が当たっていたことを思い知る。

「やはりな・・・あなたは能力者ではないだろうか？」

「・・・！！！」

男がレディットの一言に分かりやすく反応する。

「おそらくあなたたちの使っている武器自体に能力が刻まれている。そうだろうか？そんな奇術が存在していたとは驚いた。引き金が二つあったなんておもわ・・・」

そこまでレディットが口にした瞬間。目の前がぐらりと揺れて、思わずひざをつく。

「レディット！どうしたの！？」

敵でありながら、男も驚いたような顔をしている。

レディットは手に力を込めるが、全く氷の炎も普通の炎も出ない。どうやら炎を使い果たして体力が限界まで来てしまったようだ。

「ここまでか・・・」

レディットは一言呟く。傍から見れば完全に諦めたような口ぶりだが、レディットは諦めてはいない。

膝を突いた姿勢のまま姿勢を更に低くすると、刀を鞘に納めたままかまえる。日本の剣術にある『イアイヌキ』という最速の剣。最後の一撃としてレディットは勝負を覚悟したのだ。

男はそれに気づかず悠々と落ちた警棒をとりに行くと、調子確かめてから、ゆっくりと歩いてくる。

くしくも同じ間合いの距離をもつ二人は間合いの一步手前で立ち止まる。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

静寂

木々や小鳥たちも黙っているようなその言葉だけが似合う状況で、先に動き出したのは

「彼女は渡せない!!」

男だった。初めて自分から声を発すると、警棒を振り下ろしてくる。レディットもそれを確認すると同時に、刀をマックスのスピードで抜く。最速と呼べるまで速くなった鋼の刃は、『分岐』ルートサイドの能力しか持っていない警棒などいとも簡単に真つ二つにすると、男の体に見事に傷をつけて吹き飛ばした。

「ふう・・・・」

残された力さえ使ってしまったレディットは、深くため息をつくとその場に寝転がる。

ちょうど男が動かなくなったタイミングで、アネモネが追いついてくる。

「レディット君大丈夫!？」

ミヤビと二人で駆け寄せられた物だから、レディットはさすがに飛び退く。

「動いちゃダメよ!!」

「僕は大丈夫ですから。それよりもミスティンを・・・」

アネモネはレディットの一言で思い出したかのように、ミヤビの入っていたものほどではないがそれでも十分奇妙な装置に取り押さえられてるミスティンに近づく。

手足を固定しているベルトのような物はずすと、ミスティンをその場にねかせた。

「ミスティン？大丈夫か？」

「ん……」

レディットが少しだけ頬を叩くと、ミスティンはやっと目を覚ます。

「お兄さんたち？あたしは……」

「覚えてるのか？」

「ちょっとただけけど……」

ミスティンはまるで今まで眠っていたかのように目を擦りながら答える。

だがそこにはいつもの元気は見られず、心なしか悲しそうだ。

「男の人が一人来て、『人口能力の定期検査だ』って。あたしは良く分からないし、目が覚めても何も出来なかったの」

「人口能力！？」

レディットは思わず声を荒げる。

「キャッ！！どうしたの？」

アネモネも驚いたのか過剰に反応すると、首をかしげる。

「あ、すみません……あの男が使っていたのもそれだったので」

「人工的に能力を作るなんてことがあるの？」

「分かりません。でもおそらく僕たちの知らないところで何かあるみたいですね」

今は考えても結論が出ないと悟ると、レディットはミスティンに向き直った。

「今はミスティンのこれからのことを考えないと……」

レディットがそういった瞬間、ミスティンは何かを察したようにびくりと肩を震わせる。頑なに保護を拒むミスティンのことから、無理やりな形になるとはおもうが狙われている子供を放っては置けない。

だからこそレディットは、ミスティンの肩を叩いた。

「鬼ごっこは僕の勝ちだ。だから君の望む形でいい。孤児院でも、

ギルドの施設でも、何でもかまわないから君は保護を受けるんだ」

約束した。ミスティンの頭の中にもこの前にした約束は覚えていた。

「考えさせて・・・」

ミスティンはうつむき加減で答える。それを見たレディットは微笑む。

「ああ。それでいい。だけどその前に・・・」

レディットはポケットから一つだけ装置を取り出すと、ミスティンの着ている服の襟の中につける。

その装置のスイッチを入れると、霧がみるみるうちに晴れていく。

「それは？」

何だか見覚えのある装置に、ミヤビが興味心身に食いついてくる。

「これは僕の炎を封じていた能力制御装置を改造してミスティン用にしたものだよ。支部長が即席で作ってくれたんだ」

「へえ」

アネモネも感嘆の声を上げる。「能力者ってすごいよね・・・」

ミスティンは初めてみるであろう青い空を、おとなしくじっと眺めていた。

危急存亡の青空少女（後書き）

どうも！お久しぶりとなりました、レイです。

ミステイン編はこれで解決となりますが、完結は後2、3話後となります。

お待たせしてしまう事申し訳ないのですが、勘弁してください。

次回の投稿は12月の28日となっております。
そのときにまたお会いしましょう。

もう一作も投稿してあります。

b y
レイ

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2258v/>

No,Fate

2011年11月17日19時17分発行